川柳核



No. 883

十二月号

創刊大正十三年 通巻八八三号

日川協加明

俺に似よ俺に似るなと子を思ひ

飲んでほし やめても欲しい酒をつぎ

葭 路 乃 郎

路郎先生は大正十三年「いのちある句を創れ」を唱えて、『川柳雑誌』を創刊、 0 |市東土堂町)に路郎・葭乃比翼の句碑が建立される運びとなりました。 たび麻生路郎先生の出身地である尾道市のご理解とご支援を得て、 文学 川柳

六大家の一人として活躍、今日における川柳隆盛の礎を築かれました。 昭和十一年には職業川柳人を宣言され、昭和四十年、この世を去られるまで、葭乃

夫人と手を携えて、文字通り川柳に心血を注がれたと言っても過言ではありませ いして、左記の通り募金をすることに致しました。 そのお二人の情熱を受け継ぐ川柳塔社では句碑建立の一助に、皆様方の浄財をお願

何卆ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

一口二千円

お 申し込みは本年中に句碑賛助金と明記の上、 川柳塔本社事務所までお願 い致しま す。

川柳塔社

主 幹河内 天名誉主幹橘高薰

笑 風

カルチャー教室川柳塔東大阪

河内天笑

短い一年でした。

「年でした。

思いでした。
思いでした。
思いでした。

同時に西村梨里・哲夫氏が自坊浄福寺で終了致しました事をご報告申し上げます。こうした陰の力のおかげで無事講座を

ます。皆様のご支援をお待ち申し上げ年月十七日の二時から句会を開いておら年月十七日の二時から句会を開いておら

仲間づくりのスタッフと数名の同人に 体間づくりのスタッフと数名の同人に よる応援以外は殆んどが、初心者である という事をふまえ、五七五の基本を出来 るだけいろいろな角度から習得していただけるように、講座は次のように構成しました。先ず雑詠を三句送っていただき、全作品について句のいいところ、正すべきところを指摘し理由を説明する。また それら作品の着想から派生するバリエーションを何句か試作して、発想の方向性 などを講座で解説する。

リントして講座当日に配付し、一人ずつリントして講座当日に配付し、一人ずつという塩梅です。という塩梅です。

こうして全員の作品に関する解説をプ

す。そのうち新しい雅号が、たくさん入 席されて、とても嬉しい事でした。特筆 殆んど全員に雅号をもっていただきまし 選句を並べられる日の来ることを信じ、 全員が一句ないし三句入選された事で すべきは出句されなかった一人を除いて た。九月の本社句会には早くも五名が出 人その人の特徴や個性を思い浮かべて、 ましたところ快諾を得ましたので、その に雅号を持っていただくようお勧め致し だくよう、エネルギーを注ぐつもりです。 の中から川柳をうんと好きになっていた 々勉強の方法を工夫して、たのしい講座 けたということで喜ばしい限りです。益 づくりのスタッフ以外の、全員参加を頂 ンバー十八名での再スタートです。仲間 再開しました。十月二十六日に受講者メ たが、この講座をもっと続けてほしいと いう声が高まり、同じ場所で川柳講座を ところで、川柳は初めてという方たち

ふくらませています。 講座をたのしく進ませて参りたく、 関連をなっています。



Ш 柳 塔 十二月号 E 次 題字・中島生々庵 / 表紙・直原玉青

大空の 水煙抄 川柳の群像 自 Ш 秀句鑑賞 Ш 柳塔 風柳多留 選集 柳塔なら 頭言 こころ 同人吟) JII 柳塔 水煙抄 同人吟..... 四篇 (119) 東大阪 研 究 カル 24 チ ヤ 1 橘 河 東 橘 宮 河 高 尾 内 苗 高 天 緑 大 笛 笑 風 林 良 選 八 選 生 笑 風 : : : : : 2 î 91 60 95 62 58 56 51 4

波多野五

楽庵

選

:

92

しい限りです。

、便利の良い所で建物も新しく雰囲気も最会場もJR奈良駅と、近鉄奈良駅からも近

名と、会場が狭くなる位の盛会となり、

では出席者が四十名を突破、投句者も約1

川柳塔なら

宮口笛生

さん、 りまして、 と併せて、 月の例会も当初三十名そこそこでしたが、 いています。会員もたくさん増えまして、 に涙の出る位うれしかったものです。 席者百十名、投句者三十七名と予想外の盛会 んの柳人がお祝に出席して下さいました。 で「川柳塔なら」を結成いたしました。 あれからまる二年。 開会式の日には、 地元奈良は勿論、 他柳社の方々とも仲良くさせていただ 十分な準備期間も無く、ぶっつけ本番 米田恭昌さん、 奈良在住川柳塔社同人の、 十年十月十日と語呂合わせの日を -十月十日に、奈良市制一○○周年 奈良県川柳連盟にも加入させても 川柳塔社役員の方々を始 坊農柳弘さん、 今ではスタッフも固ま 大阪や京都からたくさ 中原比呂志 私の四

	祝いばし神も一緒にめしあがれ	★ 速よいかな消えてしまうと火事見舞	座右の句	■編集後記	十二月各地句会案内	柳界展望	■エッセー 選者の眼	各地柳壇(佳句地十選/武田帆雀)	十一月本社句会	ほたる川柳同好会一〇〇回記念句会… 井上直次・	■私の川柳 泣きやんで木	初歩教室「 虫 」 吐	「漬ける」 今	一路集「責 任」 板	「 音 」中	茴香の花 西
7.	Ш	豆	TA	: 楓			觸田			· 田 田				東	後	出
T	田			楓楽・義子			遠			田辺正三	朱	公	愁女	倫子	清史	楓楽
1	かよこ	秋	7	我 子			野			郎	夏	_	選	選	選	選
AL	ح			:	:		::	:			:	:	:	::		
		1	L	130	128	126	125	110	106	104	102	100	99	98	98	96

す。 社寺仏閣のビデオを写してくださって好評で 毎月句会の選句中、阿萬萬的さんが、奈良の 句で、大いに盛り上げていただいて居ります。

元来奈良は「番傘」さん傘下で、私も昭和元来奈良は「番傘」さん傘下で、私も昭和まで付き合って参りました。今では奈良番傘では一番古狸だと思います。そんな長い付き合いもあり、川柳塔ならには奈良番傘の皆さんを始め、大和番傘の方も大変協力して下さんを始め、大和番傘の方も大変協力して下されている。

毎月中原比呂志さん一人で編集と句報発刊毎月中原比呂志さん一人で編集と句報発刊です。受付には吉川寿美さん、句会脇役に大内朝子さん、宮西弥生さんが頑張っています。川柳塔ならから川柳塔の誌友も出来ました。また本社同人も二人生まれました。また本社同人も二人生まれました。また本社同人も二人生まれました。これからも良き川柳勉強の場として、新人の養成にもつとめて参りたいと思います。皆々様の温かい御指導御協力の程をよろし皆々様の温かい御指導御協力の程をよろし皆々様の温かい御指導御協力の程をよろし皆々様の温かい御指導御協力の程をよろし皆々様の温かい御指導御協力の程をよろし皆々様の温かい御指導御協力の程をよろし皆々様の温かい御指導御協力の程をよろし皆々様の温かい御指導御協力の程をよろし皆々様の温かい御指導御協力の程をよろし皆々様の温かい御指導御協力の程をよろし



橘

高

薫

風

選

内 海 生

八尾市

幸

お医者さんのおっ

しゃる通り

死にました

人の言うたことは気にする毒舌家 大阪弁が最も似合う顔である

とく俵探して逃げる十二月 どんな陽が昇るのだろう新世紀

ゴキブリが叩けぬ妻の命日で

隣の子十七歳を無事通過

拟

曳野市

Ξ

好

専

平

しんねりと抱かれてみたい観世音 ありがとう薫風主幹ありがとう

神教 砂漠に剣の山を積み

レンタルのノートで大学卒業し

何回も血圧計に腕を入れ 裏口があってわたしも救われる

遅咲き

返り咲きと言う手もあったのに

鼻唄や唯我独尊しまい風呂

温かく送ろう二十世紀友よ亡妻よ 軽くみた今どきの子に介護され 親も子も逃げるカンシャク玉をもつ

富山市

舟

渡

杏

花

島根 県

原

秀

子

谷 口

東大阪市

吐

いたうそ生き生きとして風に乗る

父の轍踏む上り坂下り坂

満足なウソさえ言えぬろくでなし 妻もどきのまんまで逝くかいわし雲

平凡な名前で安心して暮し 納得はしたが安心していない

義

金木犀

誰かを呼んでいる香り

あこがれの白洲正子はもうい 郷愁を誘い群れ咲く彼岸花

ない

温情で重たくなっている手紙

お祭もさびれた町が捨てられぬ

4

壁の絵 私より 歩け 菊日和 百 ばあちゃんの座椅子に今日も陽があたる 気をぬけば神の つまず これからというのに菊は手折ら 花 米がなくなると帰って来てく 園児踊る集中力は美しい 愛犬といるコスモ 美 4 音 紐 どんな夢見て地下道に眠る人 コスモスのクチュ 珍しくべ = ゆるみ二人三脚無理だなあ L 4 越える国 び 0 3 歩け 0 出 夜 13 ~ グラスで美 底 が故郷の いて背骨 82 0 家族全部を干してある お 歩けと妻も犬も言う 笛 ストセラー 月 病な犬飼 から今も 旗 5 かい 被災地を照らす 転 0 1 潮騒 礫が が 中ほ かい つてい スよ灯台よ 味 聞 る玩具箱 クチュ笑う声 0 騒ぐ音がする 口 H L つれてくる 飛んでくる を 43 える鼓笛隊 章 て鯉 水を飲 妻 る が買 旌 群 涙 n 15 n う 竹 八 唐 がする 3 る 原市 n 津 尾 市 る 市 市 久 小 澤 牛 保 島 田 岫 T IE. 蘭 ますみ 春 剣 幸 両脇 錆び 出会っ 主婦上座 我が家今年も恙なし 心太わたし産むワに噎せかえり 煩悩に走ったミスを認知する 問 JII 小群 座 まだ 鍵 花 H F. 舞台から降 美 飛ぶと書く筆 わたくしもやがてと思う虹が Ш 0 布 盤 形 ŋ さい自負 太 の丸のバ アを手で開いたことが無 人でも手加減しない 幾 を徐 を跳 は小 続けると不 中象一頭が離れだす 団 鼓 痛 てなおレ つ越えても地平 た君の 風をか む歯 が舞う一番の小気味よさ 神 学校 々に縮 3 0 お 0 喜 ックはやは りた名 機嫌も本調子 墓 あ 順 1 あ かえてから U 0 思議なことに仏 めて跳 の花は枯らさ \$ 1) る人をたたえたい 選びながら書 の輝きは逆 ルは汽車を待 悲しみ 優無表 V 1 線 り青 体重 ん ま 遙 でい 無 \$ で か 光 計 10 4 る < 出 0 空 不 か 米子 鳥 枚 7 幸 0 10 3 方市 取 面 市 V 県 3 野 寺 鈴 木 坂 III な 公 弘 2 弘

秋風に身の透きとおる薄の穂	秋風の海とひと日を過しくる	秋風になにわの街の橋いくつ	寝屋川市	月中天 翔んでる人も病む人も	去年とは趣ちがう秋の風	秋風に誰を探すか黒揚羽	今君に必要なのは私だけ	栄養よりも好きなもの好きなだけ	山なみは変らず心のみ萎える	西宮市	桂浜の龍馬がポーズ崩せない	元気なら安心とまたほっとかれ	二枚目の舌こうつかり乗せられる	切が消えなっように目を引ごる 証拠なら濡れたタオルを持っている	の骨張った割には主義が無い		ハンサムと擦れ違っても燃えてこず		掌でかわく小さな水たまり	ストレッチ節ぶし泡をふいている	金木犀やぼったいこと言えぬまま	ポケットの底に大きな穴がある	和歌山市
			堀						Ì	奥						松							楠
			江						F	H						本							見
			光						0	みつ子						よ							章
			子						-	子						よしえ							子
ダム底と決った村が荒れていく	目隠しをした平穏の中にいる	去ってゆく夏へ手向けの曼珠沙華	ロスタイムこのひとときを日向ぼこ	その時はやはりジタバタするだろう	ケイタイを持っている子の淋しかり	鳥取県岩		支払いが迫れば住所不定かい	太り過ぎ肩で大きな息をして	糊付きは干せんと木菟が鳴いている	ぴったりの夫婦して来た五十年	自家製の糊なら雀でも舐める	鳥取県土	花道があって頂上無事に降り	昭和でも一桁はもうお年寄り	一匹の蠅に惣菜屋が慌て	帰らない猫が聴き耳立てさせる	人前は威張らせといてくれる妻	禁煙も禁酒も生命かけている	横浜市 菱	灯と過す夜の増えゆく机拭く	欲の数減ったが残る老いの欲	その島の名を持つ小花風に揺れ
						崎							橋							田			
						みさ江							はるお							満私			
						41							45							秋			

桃割れ 雑音が増 人の 校長 破産した男器用にサンマ焼く 釣好きの十七歳はいと平和 しっかりと生きねば介護されそうだ 共鳴をする木枯らしも海鳴りも 二〇〇一年少しときめく年女 不意打ちに来るわけでなし十二月 ライ Ξ 死ぬはずのない男が死んだ忽然と 白 贖 口 校長に被害者顔が許されず 靖国は名刺なしでも詣れます 民俗館三八式が置 海征かば」萬葉集に納い置く 喧 罪をせ 亀松の都 旗をあげ 日校 嘩 の手帳にいつも生徒数 お世辞がまだ心地よい七十路 バ に結った昔がなつかしい ル ゲームのようにしています ねば通れぬミレニアム えると師 0 長門を閉 ても銀 死角でドリンク飲 々逸に似たい 行責め立てる 走らしくなる めて出る 12 てある 夫婦 藤 んでい || 井寺市 大阪市 西宮 津 市 市 る 高 門 板 仁 田 部 東 谷 美代子 たず子 倫 几 子 郎 緩慢 葱坊主 にっこりと鏡 母が逝く菊 卆寿其処影先回りして困 表から影絵見ている愚弄 安楽椅子影よお前も掛けなさい 影を追う私に秋陽暮れ易く 死に際はニヤリ笑ってやるつもり 愛犬が死んで夫と散歩する ごうごうと古墳が吠える虫の音 本を閉じい 萩匂う庭から亡母の棺出る 大輪が散 白々とみじかい通 母 むらさきの視野紫の雨が降る 百 一歳の 人旅あの人やさしすぎるから が凝る一人ぼっ きらめや羽 が逝くしずかにページめくるよう(母が逝く な頭に秋 花道 弱音は吐かぬ空の碧 って苦難の道 ざバ の衣を補 百の鈴ならし 0 根 に笑う今 風通 " 0 カスの 布 ちが重すぎて 夜があけてくる 団 す 襠 が H 終る 13 膝 軽 かな 0 る すぎる 首 0 尾 中 出雲市 出雲市 原 市 居 袁 岸 谷 Ш 真 多賀子

理子

桂

子

	れぞれが音色の違う楽器持つ真面目に生きると肩や首が凝め道も通行止めだ酒たばこをつくたび大胆になってくるをつくたび大胆になってくるをのがある通行止めだ酒たばことがない。	たふりしてものぞいてみない日本の日本の日本の日本の日本の日本の日本の日本の日本の日本の日本の日本の日本の日	年金の身もあおられる十二月鰯雲でてもウルメは安ならず熱燗をコップでくれと掌をこする大吟醸の王冠をきる誕生日大吟醸の王冠をきる誕生日
高	西	藤	杉
橋	村	解	澤
岳	黙	静	
水	光	風	红
行く末をじっと見ている地蔵さまりんご捥ぐいのちを包むように捥ぐわが罪を悔いるかたちの枯れすすきれ枯しが吹いて津軽は押し黙る本枯しが吹いて津軽は押し黙る	天高くバッタ広場は人気もの 声援もメダル級だなオリンピック 奇跡はいつも人間が起こすもの 大粒のなみだ悲しい顔でない しつによる からいく かんしょう に出された祭の日 かられる かっと しょう	を	実辺国の発思
	西	森	井
	谷	田	上

文

照

子

大

吾

頑張って来たから好きな事してる愛想笑い胸に一物あるらしい愛想笑い胸に一物あるらしい葉書持参ウソ偽りのない粗品	が 対の終えた稲田にスズメ百家族 大正生れ昭和二桁感度の差 大正生れ昭和二桁感度の差	市	というには只のお礼大根持ってゆく といり打つ気負いはとうに棄てている といり打つ気負いはとうに棄てている がって見ても盥の中のこと 強がって見ても盥の中のこと
	池		
	内		尾 居
	かお	美 津 子	み 善善
	ŋ	子	り 信
左手にあけびを	を さしされ	千 古	でまずくも 脚がない男 でこの国行 を下
左手にあけびを提げて栗拾うあけび採り口に含めば故里の味此処だぞと覗く林にあけび熟れ此処だぞと覗く林にあけび熟れ状彼岸はらから共の墓掃除	まだ若いつもりリンゴを丸かじりやさしさを掬う孤独な女の手逢いに行く女に踏絵多くなる亡母の声かすかに聞いた夕枯野	は満足出来る幸 で痛み浮がべている で痛み浮がべている 一生懸命磨く床 して亡母の喪に耐え	香川県のまずくも握った拳開けない をこの国行けど獅子舞コンチキチンとこの国行けど獅子舞コンチキチンとの国行けど獅子舞コンチキチントをいるせなさ
いびを提げて栗拾うってに含めば故里の味い口に含めば故里の味と親も久しぶり	高り	は満足出来る幸 で痛み浮がべているグラス で痛み浮がべているグラス で痛み浮がべているグラス 一生懸命磨く床 「一生懸命磨く床」「香川県	香 キなら香 チさん
いびを提げて栗拾う。別に含めば故里の味い口に含めば故里の味い別、親戚も久しぶり	高りカ市	は満足出来る幸で痛み浮がべているグラス普通に暮れて恙なし一生懸命磨く床「世級命磨く床」「大」「大」「大」「大」「大」「大」「大」「大」「大」「大」「大」「大」「大」「大」「大」「大」「大」「大」「大」「大」「大」「大」「大」「大」「大」「大」「大」「大」「大」「大」「大」「大」「大」「大」「大」「大」「大」「大」「大」「大」「大」「大」「大」「大」「大」「大」「大」「大」「大」「大」「大」「大」「大」「大」「大」「大」「大」「大」「大」「大」「大」「大」「大」「大」「大」「大」「大」「大」「大」「大」「大」「大」「大」「大」「大」「大」「大」「大」「大」「大」「大」「大」「大」「大」「大」「大」「大」「大」「大」「大」「大」「大」「大」「大」「大」「大」「大」「大」「大」「大」「大」「大」「大」「大」「大」「大」「大」「大」「大」「大」「大」「大」「大」「大」「大」「大」「大」「大」「大」「大」「大」「大」「大」「大」「大」「大」「大」「大」「大」「大」「大」「大」「大」「大」「大」「大」「大」「大」「大」「大」「大」「大」「大」「大」「大」「大」「大」「大」「大」「大」「大」「大」「大」「大」「大」「大」「大」「大」「大」「大」「大」「大」「大」<	香 キなさ ら 香川県 ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・
いびを提げて栗拾う。可に含めば故里の味い口に含めば故里の味い別、親戚も久しぶり	高知市北	は満足出来る幸し満足出来る幸し満足出来る幸して亡母の喪に耐えるして亡母の喪に耐えるして亡母の喪に耐える	香川県 成 重 放 が ひ
いびを提げて栗拾ういに含めば故里の味の肌も久しぶり親戚も久しぶり	高知市北川	は満足出来る幸し満足出来る幸し満足出来る幸して亡母の喪に耐えるして亡母の喪に耐えるして亡母の喪に耐える	香川県 ボール ボール ボール ボール ボール ボール ボール ボール

さび付 栄転も左遷も同じ無人駅 七十路はずむ心が消えてない 店アイゴーアイゴーの声がする V た脳を磨きに 18 スポ 1 知 県 赤 JII 菊 野 非常識父の 解雇する男 還 曆 の贅 沢 保険 エプロンよく似合い 0 方が泣いて居 0 歯を外 L る 岡 Ш 県 荻 野 鮫 虎

狼

極楽の境界線 で蹴 つまずき

Ŀ 柳五 郎 忍 遠 かれたネ死んだふりしてねて見よう Vi 字を抱いてころげる八十 思 歩成金夢に歩は取られ 13 出拾 61 集め る八 +

ミレニアム今鮮やかに残さね 岡 Ш 県 大 石 あすなろ

ば

しあわせと平穏無事をさとるきょう

空もくせい薫る散歩道

旧任地比婆の偲ばる栗届き

無為徒食

歳月にまた置いてかれ

肥満した娘夏やせけなるが

飢

餓の子の澄んだ瞳に救われ

3

岡

Ш

市

忘れたととぼけた愛がひとつあ 幸せをこぼさぬように乾杯だ カタカタとコー ヒーカップ鳴っ 3 7 朝

どこで咲いてもバラは花形つんとする

転免許さよならに なる視 聴 岡 山県 小

林

妻

子

運

紅 糸 葉見に行くの 切れた凧 口へ続く危ない橋 が結婚すると言う では ない もあ Ш 3 0 父

みこしも車で通る秋祭り

マ焼く老いの料理に明日 が 岡 あ Ш る 県

十路橋涙と笑いで渡る橋

0

路坂

サ

八月の 欣求浄土願いつづける花 天何 時までも りつぐ の種

の世の終着駅は始 発駅

M 呼べばすぐ答えるとこに 石 るや 積 んで積んで悲しむ風 かな言 葉で心の 棘 を抜 新 0 中 111 紀 < 出

県

Ш

本

玉

恵

頂点の孤独に風は鳴りやま スプー 皮したつもりの尻尾抜けません 人と苦労して来た掌を重 ン一杯ほどの幸せに酔う 82 ta

母

娘

Ш 県 富 重

岡

路

坂

坂 志

矢 内 寿 恵子

— 10 —

新調のスーツに存在感がある の連隆盛懐かしんでる老いている でいるでいるの工人で染める白い地図 (男の結婚)	大 で	はとばしる水とほうれん草みどり 生き抜いて秋が寂しくなってくる 気付いたらスズメも鳴かぬ日曜日 まかとは別に野良猫飼うことに	岩 /	倉敷市 小 野 克
	菁	_		
	居	路	子	枝
車座になると一度に喋り出すりストラの無い主婦業で食べている直会が祭りのような七回忌をりげなくブランドを着て落ちつかぬきのはないする。	たまし舟まんまと乗った揚羽螺 を	一際寂し友の通夜の教授の講義受講出来たら楽になるとページを繰ろうといいます。	大いイヒール鴉ならべたごと靴屋 第子は弟子 師は師と思う菊花展 第子は弟子 師は師と思う菊花展 第子は第一次 は かん	竹原市 三
		王 ʃ		-
	山	木	谷	宅

夫

朽

之

枝

ソリストの真珠の歯から虹のうたしゃきしゃきと一日漕いで夜の岸	出雲市 青 山 久 子	わが海へ秋を深々沈ませる	身のまわり片付け気付く十三夜	白い飯辺りがぽっと幸せに	麦飯がところどころにある民話	にぎり飯握手の形して結ぶ	松江市川本畔
早朝の素顔と出逢う散歩道親しさは屋号でよび合う農の日に	出雲市 小白金 房 子	パチンコに必死 車の児はひん死	ストーブで温めてくれる赤字線	口喧嘩 腹のこなれに良い相手	炬燵抱き冷たい雪の降る姿	障子張る父と母との冬仕度	出雲市 板 垣 夢 酔

こをとろの晩早々と戸を閉める しんみょうに祝詞聞いてるイヤリング 巫女さんも年頃おみくじそっと引く 袴の 胸も細波打っている 出雲市 石 倉 芙佐子 手作りのワンちゃんの目と話する イヤリング人恋しさにゆれるのか

鮮

やかに全山秋

の衣替え

出雲市

久

谷

まこと

伝承館しばし心を遊ばせる 誕生日祝う花屋の香とふれる

哀

しみが胸の泉で花となる

やれやれと余震が止んで笑顔出 不景気がこうも続くと他人事 古代はす迷いを払う 柔らかな物腰歳がつくり出す 定退で知った休みの有 喝 難さ 0 声

ざくろ色付き少年は里想う 独り言いえいえ携帯電話です 同じ卓囲むと太くなる絆 栄光も挫折も知 2 ている風 だ

せが過ぎて喧嘩をしています

恙無く

昨日と同じ今日がある

笑ったり怒ったりしてまた明日

出

雲市

佐

藤

治

代

出雲市

竹

治

ちかし

る

神議も賑わう古代大柱

昇る陽に今日の仕合せ見て貰う

金貯めるつもりはない 帽子買う夫が見せる恋ごころ

が減ってゆく

過疎すすむ村に咲いてる蕎麦の花	眼を凝らす香月泰男の絵の闇を	あの夏の日は忘れない冬の滝	引き潮よ亡母に伝言してほしい	楽しさが零れるポケット覗き込む	島根県	友達に尻を上手に叩かれる	うっかりと喋って火の粉浴びている	思い切り泣ける一人の部屋がある	長生きにもポックリ死にも憧れる	日帰りで大阪弁を聞いてくる	出雲市	種苗店からお祝い貰う誕生日	どんぐりの群れ強かに転げだす	大阪の駅で首筋だるくなる	新米のお礼は北の鮭二匹	大声を出し痩せぎすをカバーする	出雲市	いい雨だ枕を返し音をきく	箸箱に収まる箸はもういない	古本のページに小さい虫が這う	何年も口笛吹いたことがない	もくせいの香りをくれる風が好き	出雲市
					伊						城						岡						吉
					藤												あ						岡
					寿						多						き						きみえ
					美						喜						6						え
七回忌 和尚の読経朗々と	秋立てば駅員さんの長い袖	尊厳死耳かたむける歳となり	地図にない径を蜿蜒蟻の列	ひねくれた胡瓜が知らす秋の		少しずつ霧氷の精になる準備	自信がなくてくらげのように生きて	自信過剰川を渡って行ったきり	優しい人よ檸檬かじって下さるな	何事があっても少しわたしは眠ります		秋の天どこまで行っても秋の	便通のあった御機嫌茶話に	バスタオル嬉しい夫の湯気くる	戦盲の思い北支の寒の月	もう馴れた余震夫の手握りし		箸はこぶ幸ここにあり生きる道	失明の意地も知ってる髭そり器	詩の道夢は遙かに持ちつづけ	長い闇なにも分らぬ文化の世	気短になったと思う手の動き	
		ŋ		空	島根県森)/HI	生きている	ŋ	るな	眠ります	島根県松本	天		るむ		め	島根県堀江	道	吞				島根県堀江
		ŋ		空	根県)/HI	13	b	るな	眠ります	根県松	天		るむ		め	根県堀	道	吞				根県堀

引っ越しただけで生きてる死んだ人	深情け熟して落下つるし柿	ペット葬共感される未亡人	空バッグ必ず入れてあるティッシュ	目立たないことで目立った聞き上手	鳥取市 石	妻の手に乗るとお金が生きてくる	どうしても得する方と手を結ぶ	手の届く範囲に酒と本がある	手を抜いた若い時代が悔やまれる	むずかしいところで敵に手を渡す	鳥取市 春	球根の未来を決める笛を吹く	丁度いい固さになった無精髭	二階との落差に荒れる心電図	人情にとっても弱い計算機	挑戦をつづける一匹の蛙	鳥取市徳	無駄遣い家訓の敵という老舗	初挑戦へ古希の坂道這い上る	新聞の折り鶴斑彩に舞う	二重丸付けたい部下に背かれる	幸せな両手よ父母に手を引かれ	鳥取市杉
					上						木						田						本
					一悦						圭												孝
					子						三郎						ひろこ						男
遺伝子がやがて刺る	転ばんようにと言えば転	言い訳を聞け	長男は逃げる	立志伝 失		天秤棒が	折り返しでこぼ	すきま風	ハプニ	青春は		大輪	西の	運転	思慮公	跳ね返		カップ	歳月や	見栄だっ	曲がり	シャン	
子がやがて刺客となって来る	言えば転んで帰る妻	訳を聞けば疑惑が深くなる	道がない籠の鳥	失敗談が役に立つ	鳥取市	が折れそう老母と孫の守り	でこぼこ道の日が続く	風しっかり孫が繕って	プニング達磨が起きて来なかった	青春は今日だ今日だと言うポスト	鳥取市	の菊俗界を覗かせぬ	棟ピンチ東はご退院	の代盃妻は艶っぽい	分別なくして帰るお月さま	返す力温存して無冠	鳥取市	プルに虹は確かに見えたのだ	歳月やうろうろなどはもうできん	たって無けりゃこの世も味気ない	り角メモしっかりと確かめる	ンデリア淑女の姿勢くずせない	鳥取市
各となって来る	言えば転んで帰る妻	ば疑惑が深くなる	籍	敗談が役に立つ	取	と孫の守	こ道の日が続	しっかり孫が繕っ	が起きて来なかっ	ス	取市倉	#	棟ピンチ東はご退院	の代盃妻は艶っぽい	ガ別なくして帰るお月さま	存して	鳥取市 武	は確	うろうろなどはもうできん	て無けりゃこの世も味気な	メモしっかりと確かめ	淑女の	取
各となって来る	言えば転んで帰る妻	ば疑惑が深くなる	籍	敗談が役に立つ	取市	と孫の守	こ道の日が続	しっかり孫が繕っ	が起きて来なかっ	ス	取市	#	棟ピンチ東はご退院	の代盃妻は艶っぽい	ガ別なくして帰るお月さま	存して	市	は確	うろうろなどはもうできん	て無けりゃこの世も味気な	メモしっかりと確かめ	淑女の	取市
各となって来る	言えば転んで帰る妻	ば疑惑が深くなる	籍	敗談が役に立つ	取市美	と孫の守	こ道の日が続	しっかり孫が繕っ	が起きて来なかっ	ス	取市倉	#	棟ピンチ東はご退院	の代盃妻は艶っぽい	ガ別なくして帰るお月さま	存して	市武	は確	うろうろなどはもうできん	て無けりゃこの世も味気な	メモしっかりと確かめ	淑女の	取市植

乾いたバスタオルに残る青空飾らない言葉が香り放ちだすがらない言葉が香り放ちだすがらないでいる	最高では、 最下で、 最で、 はいて人のこころが見えてくる はいて人のこころが見えてくる はいて人のこころが見えてくる	二度の職安い首輪をはめられる 国債の付けの重さを子は知らず 焼き鳥のけむり商魂たくましい 円高は困る安いとなお困る 敵に塩送る度量がまだできぬ 鳥取市 万葉集熱く教えたひとは今	島取市 発つまでに疲れてしまう旅支度 弱そうなところが亡母に似た桔梗 が合よく忘れ上手で生きている を発力をといるが亡母に似た桔梗
	夏	近	岸岸
	目	藤	本
	健	佳	宏 孝
	_	子	章 子
父休焼達の座の	心思ブ	野あ 一楽こ大震	老荒こ物不
父ちゃんの友達みんな知っている休職のナース注射が恐くなる表の座に妻 大屋根はホッとする妻の座に妻 大屋根はホッとする	こ に は で	大地震頭の中に渦の巻く 大地震頭の中に渦の巻く これからは余震とうまく手を繋ぐ これからは余震とうまく手を繋ぐ 楽天家明日信じてお約束 一言がやたら気になる日記帳 米子市 あの道に悲しい笛を捨てにゆく あの道に悲しい笛を捨てにゆく	米子市 老いたなあ虫一匹がころせない たれるだけ荒れていいのよ反抗期 でいたなあ虫一匹がころせない 来子市と私の肚座る でいたなあ虫一匹がころせない
んナ老に明の一い妻力	に雨の温情思いつつ は何時も笑顔で追ってくる は何時も笑顔で追ってくる	御先祖様と共に居る 明日信じてお約束 明日信じてお約束 明日信じてお約束 明日信じてお約束	なあ虫一匹がころせなだけ荒れていいのよ反然では荒れていいのよ反性だこころの鍵もかけせだこころの鍵をかける夢見て体が宙に浮く
んナ老に明の一い妻力	に雨の温情思いつつ 米子市は何時も笑顔で追ってくる	御先祖様と共に居る 明の中に渦の巻く らは余震とうまく手を繋ぐ らは余震とうまく手を繋ぐ らは余震とうまく手を繋ぐ いい笛を捨てにゆく に悲しい笛を捨てにゆく	米子市なあ虫一匹がころせない だけ荒れていいのよ反抗期 だけ荒れていいのよ反抗期 であ虫一匹がころせない 米でやっと私の肚座る というでは、 米子市
んナ老に明の一い妻力	に雨の温情思いつつ と前の温情思いつつ と前の温情思いつつ と前の温情思いつつ	御先祖様と共に居る 明日信じてお約束 明日信じてお約束 明日信じてお約束 明日信じてお約束	米子市 木な夢見て体が宙に浮く 世だこころの鍵もかけておく 世だこころの鍵もかけておく 世だこころの鍵もかけておく
んナ老に明の一い妻力	に雨の温情思いつつ 米子市 鷲 見は何時も笑顔で追ってくる	御先祖様と共に居る 関の中に渦の巻く ちは余震とうまく手を繋ぐらは余震とうまく手を繋ぐらは余震とうまく手を繋ぐ 明日信じてお約束 米子市 茂 理 世話しい笛を捨てにゆく	**子市 木 村であ虫一匹がころせない**子市 木 村であ虫一匹がころせない**子市 木 村であ虫一匹がころせない

くる声野	薩 さ 音	草の露コロコロどこにころがるか子の家の暮し不満もあるだろう(፳を請ねて)百年の家傾いた知らせ受け	旅先のテレビ米子の地震言う有馬温泉 我を忘れた同窓会	てきの蚌薯がたったのか	いっぱきの段とが守ったのか地震雲のなか声を掛け合う茸採り涙拭くあなた成仏されるように	ħ	はのっ	ドンの音着のみ着のままねむられず地震から夢と希望が逃げてゆく 米子市 門 脇 晶
	き			鶴		木	支	子
山りれだの者笛て何	就職へ容姿端麗加速する	機関車が突っ込んできた震度六最下位当選トップに勝る働きだ定退へ残り火少し残しとく	青空へごめんね核は似合わない温暖化 氷河を食べる音がする	語で食べてこれ 言でえ	無礼講で飲んでこっそり論されるやみ討ちのように突然震度六	蛇口から今日一日が始動する生前の徳か葬儀の日が晴れる	ずわい蟹地震の港に上れない地震のあと菊はそのまま傾いて	命ある家ある余震とめどなく突然が頭の上に落ちてくる米子市
	淡			中			坤	白
	0.000			村				根
	路			1.1		B	廷	111
	W			金		175	诗	11X
						i	(T=6)	

握	なんとまあ賑やかいのは妻の客	お互いの短所を突いて仲がいい	試行錯誤まだまだお玉杓子です	夢多き余生たのしむ夏期講座	倉吉市 .	嫌な雨いいえ恵みの雨ですよ	じいちゃんに精力剤を買うたげる	勉強ができぬと言うて歎く親	満願の日にいただいた茶がうまい	寝たきりの姑へ一声かけて出る	倉吉市 :	吐きだしてそっと舞いたい秋日和	他人ごとと思う油断の大地震	もう少し甘えて欲しい孫の袖	新世紀 四捨五入でもされそうな	歴史もつ土台にのせる新世紀	倉吉市 .	古里の香を漂わす麦藁帽	投げられた藁が反旗を翻す	わからない絵が気の遠くなる値段	乳吞ます母に計算などは無い	水色を青だと言った事がある	倉吉市 1
					Щ						米						山						最
					本						田						中						上
					玲						幸						康						和
					子						子						子						枝
助	鈾	-dd-																					
かった命粗末には出来ぬ	鈍行が走る田舎の昼下り	菊花展 菊 菊 菊に迎えられ	鳥取県の知事さん若く頭冴え	ふる里は鳥取ですと胸を張り	鳥取県	仏壇に孫の好物欠かさない	ソプラノもアルトも混じる虫の声	一言で足りる言葉を出し惜しみ	老いの坂まだ翔べそうで羽繕い	追風もほどほどでよし転びそう	鳥取県	音もなく帰る隣の老夫婦	赤とんぼ藁葺屋根が好きらしい	荒れた田の涙を汽車の窓に見る	旧姓で呼び合う友と稲の出来	久しぶり肥えた痩せたとクラス会	鳥取県	一匹のペットに旅を縛られる	電話線熱い話も聞いている	ながながと聞いて実になるひと欠片	残されて荒野の風を諸に受け	証拠不問の雪しんしんとしんしんと	倉吉市
0	行が走る田舎の昼下り	展菊菊	鳥取県の知事さん若く頭冴え	ふる里は鳥取ですと胸を張り	取	仏壇に孫の好物欠かさない	0	一言で足りる言葉を出し惜しみ	の坂まだ翔べそうで羽繕	追風もほどほどでよし転びそう	取県	音もなく帰る隣の老夫婦	が好きらし	荒れた田の涙を汽車の窓に見る	旧姓で呼び合う友と稲の出来	久しぶり肥えた痩せたとクラス会	鳥取県石	一匹のペットに旅を縛られる	い話も聞いてい	ながながと聞いて実になるひと欠片	残されて荒野の風を諸に受け	拠不問	倉吉市 野
0	行が走る田舎の昼下り	展菊菊	鳥取県の知事さん若く頭冴え	ふる里は鳥取ですと胸を張り	取県	仏壇に孫の好物欠かさない	0	一言で足りる言葉を出し惜しみ	の坂まだ翔べそうで羽繕	追風もほどほどでよし転びそう	取	音もなく帰る隣の老夫婦	が好きらし	荒れた田の涙を汽車の窓に見る	旧姓で呼び合う友と稲の出来	久しぶり肥えた痩せたとクラス会	県	一匹のペットに旅を縛られる	い話も聞いてい	ながながと聞いて実になるひと欠片	残されて荒野の風を諸に受け	拠不問	
0	行が走る田舎の昼下り	展菊菊	鳥取県の知事さん若く頭冴え	ふる里は鳥取ですと胸を張り	取県 近	仏壇に孫の好物欠かさない	0	一言で足りる言葉を出し惜しみ	の坂まだ翔べそうで羽繕	追風もほどほどでよし転びそう	取県 羽津	音もなく帰る隣の老夫婦	が好きらし	荒れた田の涙を汽車の窓に見る	旧姓で呼び合う友と稲の出来	久しぶり肥えた痩せたとクラス会	界石尾か	一匹のペットに旅を縛られる	い話も聞いてい	ながながと聞いて実になるひと欠片	残されて荒野の風を諸に受け	拠不問	野
0	行が走る田舎の昼下り	展菊菊	鳥取県の知事さん若く頭冴え	ふる里は鳥取ですと胸を張り	取県 近 藤	仏壇に孫の好物欠かさない	0	一言で足りる言葉を出し惜しみ	の坂まだ翔べそうで羽繕	追風もほどほどでよし転びそう	取県 羽津川	音もなく帰る隣の老夫婦	が好きらし	荒れた田の涙を汽車の窓に見る	旧姓で呼び合う友と稲の出来	久しぶり肥えた痩せたとクラス会	県 石 尾	一匹のペットに旅を縛られる	い話も聞いてい	ながながと聞いて実になるひと欠片	残されて荒野の風を諸に受け	拠不問	野口

病後なり朝夕神仏おたよりに	宝石と同じ値となりかぶと虫	お地蔵にとっても好きな花を上げ	老いるほど家族の温さだきしめる	がんばって鳴いてくれたね鈴虫よ	鳥取県	訃報続き仮の世の荷がまた増える	生き下手な男転んでばかりいる	ひとり芝居の背中に負っている荷物	同窓の出世話で会終る	同窓会負け組は過去形が好き	鳥取県	わたくしのために釈尊座し給う	仏飯を入れたお粥に掌を合わす	猫なで声が墓場までついてくる	麦めしの反芻をする自在かぎ	冬すでに年金太郎やって来た	鳥取県	地に足がつかぬも宝甲子園	雑念を払うが如く天高し	続柄うっかり「毒」と書く夫	カラオケのとても上手なお坊さん	この芋はエリートなのか品がいい	鳥取県
					津						上						乾						谷
					村						田												口
					八重						俊						隆						次
					重子						路						風						男
神戸有珠三宅鳥取つぎは何処	妻忘れ逃げた余震は治まらず	ゆらゆらと金魚は知らぬ大地震	金魚鉢の水を揺らした震度六	震度六死者ゼロさすが田舎だね	十月六日鳥取県西部地震 鳥取県	四面楚歌我慢の刻はまだ少し	不等式男女の愛なのかも	愛を知る指の先まで愛を知る	おとなしい妻にも起こる液化現象	幸せ過ぎた絆時々切れたがり	鳥取県	誇るものひとついただくため動く	声かけて下さる方もある都会	年齢がわからないよう化けなさる	遠回りしてしあわせにめぐり逢い	ありがたい友だと思ううちのポチ	鳥取県	此の灯から鳥取県よぐっと来る	灯台のあかり私の顔よぎる	迎え火を焚く藁の香が盆招く	美人画だわかるきれいだ生きている	老いるとは欲一つずつ捨てること	鳥取県
					新						奥						西						国
					家						谷						原						森
					完						彩						艷						武
					司						子						子						子

座っても立っても痛い股関節	霧が晴れ癒えて来ました欠語症	居眠りがつくほど固いお話だ	笛吹けどまだ足並が揃わない	曲者の犬一匹を飼い馴らす	鳥取県	無駄ばなし霧晴れてくるかも知れぬ	男いっぴき枯れても母ははなさない	来年も満月へ逢うだろか老い	画廊ではせかせか歩くものでない	次の間に赤ちゃんねてるおしずかに	鳥取県	田舎町地震でトップニュースに出	二人目は大地と付けた男の子	華厳滝神秘あふれるものがあり	鬼怒川の水の流れに目がさえる	満月に姉はあの世に旅立った	鳥取県	大山がずれていないか今朝も見る	地震見舞声にきずながまたもどる	かみなり火事おやじ地震がいっちこわいなあ	余震が去ってまた汽車が着く汽車が出	菩薩さまごろり倒した大地震(鳥取県西部地震	鳥取県
					西						黒						権			いなな	る		さえき
					Щ						田						代			d		5句	き
					和						くに子						康						や
					子						子						女						え
うやむやにしても最後は華やかだ	正直なカメラ心をうつしだす	日の当たる家に住んでも住みにくい	橋かけて人の心を通わせる	片思いしてはリンゴの歌唄う	鳥取県 橋 本 多	ちょっと右向いて見てますコンパクト	家族という足音を聞く軽い息	ハエ一匹わたしの部屋に住んで冬	ハウスもう春です苺藁を敷く	どんぐりの仲間で意見花盛り	鳥取県 田 村 き	私にも遊びごころの詩がある	姉とふたりで都会の風に逢いに行く	計算はラップしておく旅帰り	ジェラシーか濃霧が紅葉隠し出す	フルートの音色に酔った虫がいる	鳥取県 土 橋 睦読	天下とった方が正しい世のさだめ	孫十七歳親よしっかり抱いてやれ	来た道を話して見たくなる車窓	地球儀がほしいと言って笑われる	二 三回着替えて秋の朝を出る	鳥取県 塔
					多哥由						きみ子						子						元 子

訓練をすればわたしも飛べるかな下心などは見せない髪を染め下心などは見せない髪を染めにないがありすぎ	見をでかな	老いらくのこころごころをそっと抱きを残の身に課す歩行靴を穿くを残の身に課す歩行靴を穿くをしまり風邪に居座られ	高取県 林 露 杖 では、 これでは、 これ	鳥取県原みさを
風呂にでも行こうか旧き友来たる青春がひからびている四丁目で人を喧嘩したのは三丁目人妻とひそかに笑う一丁目	神戸市 小 林 一 夫我泣けば君も悲しい顔になるでと暮す今も今もの体の夫婦なりであるたと暮す今も今もの体の夫婦なりである。	毎戸市 木 村 貴代子自販機の酒をカバンに定時制組んだ足引かずに少女達化粧組んだ足引かずに少女達化粧 せう一句出そう松茸めし待たせ な子大生いっちゃんええとき下校坂	神戸市 中 村 ゆきをもしももしもの話が咽にひっかかる を勝のバーゲンほしいものがない 像勝のバーゲンほしいものがない	神戸市 山 口 美 穂

			安心立命 和尚に布施は出している				ぬきの電話口	聞きなれた挨拶ぬきの電話口
			猫だくと何故か嫌味が様になり				いろはにほへと言ってみる	時々は いろはに
			辻を曲るとうちの灯がついている				突然噴火する	癌というマグマ突然噴火する
			好き嫌い言いに市場へついてくる				いが二階まで	味噌汁の朝の匂
			ばあさんをお披露目に行く運動会				さほどではないらしい	スタートの派手さほどではな
子	保	嵯峨根	宝塚市	子	能	黒田	芦屋市 田	
			これからで値打ちがきまる涅槃門				人間とヒトの継ぎ目を模索する	人間とヒトの継
			枡席は後の十番だけ埋まり				いらない地で通る	余所行きの顔はい
			倒産の後へサラ金店びらき				落ちついた秋だストンと日が暮れる	落ちついた秋だ
			今日もまた負けた頭の傾げよう				びこったミレニアム	貪欲な知恵はび
			青い空ついつい故郷忘れがち				素通り地震突きあげる	台風は素通り地
男	哲	北野	三田市	ただし		松本	川西市	
			応援旗静かにゆれる母の掌よ				痩せ我慢だと悟るまで	腕まくり痩せ我
			シドニーで亡母と一緒に表彰台				って笑われる	探し物手元にあって笑われ
			シドニーで流す涙の潔さ				び乗る時のスリル感	終電に飛び乗る
			ケータイで指図するのはお袋だ				が目新し	満月に街並までが目新し
			遠い日に母と歩いた掌の温み			げて	マスコミもっと盛り上げて	パラリンピック
子	郁	樫谷	伊丹市	子	雪	米原	川西市	
			屋台ラーメン茶髪に温い師走風				決算書つじつまだけは合わしとく	決算書つじつま
			強くなれ優しい医師のこわい顔				らない握り飯	戦争も飢えも知らない
			追伸に約束時間もう一度				切る裏の顔	縄の帯大見えを切る裏
			待ち惚け残暑こらえる花時計				りか名札の字	人権を守るつもり
			カラオケで歌っています赤トンボ				の寿命が眠るように逝き	点滴の寿命が眠
子	君	山崎	伊丹市	石	礎	中塚	相生市	

一本の指が病んでも手が狂い風当り明らか角を曲れない風当り明らか角を曲れない風が見いを一つ乗り越え遺る気出する。	自転車を下りて夕陽の中歩く 西宮市 林	た亡父がお腹を空かしてをしっかと摑むものがあつ何かが変る羊雲	対方	圏の深さ知らず育ってキレ易い 別越しへろくな本ない恥ずかしさ 別越しへろくな本ない恥ずかしさ がり の夜故郷は美男美女ばかり	西宮市 秋 元
	は			泰	て
	つ絵	富喜	1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	司	る
あこがれて住みついた町ビルだらけ出鍋出すひとりものにも神の加護仏さんをだしに松茸少し買う銀杏の実 小さな鍋で秋の色雪おんな出番にそなえエステ中	自立とは悲しいことよ飯を買う	桃色を着よと母の日敬老日タンゴ聞く雑巾がけに力込めトンボ切るバトントワラー秋の空トンボ切るバトントワラー秋の空	小型機が雲の間を縫って飛ぶ 小型機が雲の間を縫って飛ぶ	本本によさる蛇口の酔いざまし名水にまさる蛇口の酔いざました大事をの日記に多し頭文字大事をのしか仏そっちのけまり大事をいつしか仏そっちのけます大事をいつしか仏そっちのけます大事をいつしか仏そっちのけます大事をいつしか仏そっちのけます大事をいつしか仏そっちのけます大事をいつしか仏そっちのけます大事をいつしか仏そっちのけます大事をいつしか仏そっちのけます大事をいつしか仏をっちのけます大事をいつしか仏をっちのけます大事をいっしか仏をっちのけます大事をいっしか仏をっちのけます大事をいっしか仏をっちのけます大事をいっしか仏をっちのけます大事をいっしか仏をっちのけます大事をいっしか仏をっちのけます大事をいっしか仏をっちのけます大事をいっしか仏をっちのけます大事をいっしか仏をっちのけます大事をいっしか仏をっちのけます大事をいっしか仏をっちのけます大事をいっしか仏をっちのけます大事をいっしか仏をっちのけます大事をいっしか仏をっちのけます大事をいっしか仏をっちのけます大事をいっしか仏をっちのけます大事をいっしか仏をっちのけます大事をいっしか仏をっちのけます大事をいっしか仏をっちのけます大事をいっしかんをいっします大事をいっします大事をいっします大事をいっします大事をいっします大事をいっします大事をいっします大事をいっします大事をいっします大事をいっします大事をいっします大事をいっします大事をいっします大事をいっします大事をいっします大事をいっします大事をいっします大事をいっします大事をいっします大事をいっします大事をいっします大事をいっします大事をいっします大事をいっします大事をいっします大事をいっします大事をいっします大事をいっします大事をいっします大事をいっします大事をいっします大事をいっします大事をいっします大事をいっします大事をいっします大事をいっします大事をいっします大事をいっします大事をいっします大事をいっします大事をいっします大事をいっします大事をいっします大事をいっします大事をいっします大事をいっします大事をいっします大事をいっします大事をいっします大事をいっします大事をいっします大事をいっします大事をいっします大事をいっします大事をいっします大事をいっします大事をいっします大事をいっします大事をいっします大事をいっします大事をいっします大事をいっします大事をいっします大事をいっします大事をいっします大事をいっします大事をいっします大事をいっします大事をいっします大事をいっします大事をいっします大事をいっします大事をいっします大事をいっします<td>西宮市</td>	西宮市
	H	ſ		#	经
	山木	1	E .	井	緒士
	山本義	食 田 老	<u></u>	井 上 松	緒 方 美津子

びとかの知が山ぬ花れ	はい指輪黙って僕に付いて来い長生きの秘訣医者からたずねられ長生きの秘訣医者からたずねられ君に逢う町を一気に駆け抜ける	無邦人に治めてもらうかも未来 自販機をも通らぬお金通貨とや 世紀のゴミー掃せんや大晦日 世紀のゴミー掃せんや大晦日	東無口 明日へ我慢の陽が落ちる 専無口 明日へ我慢の陽が落ちる	和泉市
植		加	岡	西
村		島	井	岡
喜		由	やナ	洛
代		_	やすお	酔
歳にはかてぬ戸閉りガス 綾取りのプツンと切れて 大家第とんとん進む娶り 輪禍一瞬画布から友の影	電嘩にはならぬだん 素走るごとちちはは 雲走るごとちちはは	戦戸際で風向き変る強 瀬戸際で風向き変る強 親指で会話が続くEメ のように のき変る強	人を呼ぶ逸話が欲し人を呼ぶ逸話が欲し	
かてぬ戸閉りガス栓ひとり言のプツンと切れて母が逝くとんとん進む娶り唄とんとん進む娶り唄ばコスモス妹の三回忌ばコスモス妹の三回忌	にはならぬだんまり決め込まれるごとちちははの忌が巡るるごとちちははの忌が巡るるごとちちははの忌が巡る	を変る強い運 を変る強い運 を切り でに乗って風を切り	お逸話が欲しい天守閣 親の死角で燃えはじめ を持てば捨て身の宙返り を持てば捨て身の宙返り	河内長野市
別りガス栓ひとり言と切れて母が逝くと切れて母が逝く	たんまり決め込まればはの忌が巡るに世間並みなぜ咲かぬ	て風を切り の現を切り	身の宙返り と腹が出る と腹が出る	内長野
栓 明 が消え 回忌 羽曳野市	たんまり決め込まればはの忌が巡るに世間並みなぜ咲かぬ	て風を切り 羽曳野市	身の宙返り と腹が出る と腹が出る	内長野市
栓ひとり言 羽曳野市 吉	たんまり決め込まれなはの忌が巡るにはの忌が巡るというである。	マ風を切り 不風を切り 不風を切り 不見を切り	身の宙返り おの 対の 対し 対	内長野市 井

風は秋プラトニックな恋がよい	天使のように近づいてくるキンモクセイ	わたくしの予感で開く花がある	人間にしかない歓びだってある	男にも女にもある下心	藤井寺市 太	紅白にヒット無くても顔で出る	手の内は滅多に見せぬ京訛り	いよいよとなると父より強い母	年賀状やっと書いたら喪の通知	それなりに帳尻合わす年の暮れ	藤井寺市 中	二十一世紀 光の方へ向かいたし	二十一世紀のぞく命は足りそうだ	負けている方を応援してしまう	先生の一言跳箱を越える	銀杏ハラハラきょうの手紙は寂しがり	羽曳野市 徳	カタツムリー度は飛んで見たかろう	鮮烈なイメージ残る片エクボ	都合よく忘れる事も生きるコツ	ナースより注射の下手なお医者さん	教え子の女医に診察してもらう	羽曳野市 酒
					田						島						Щ						井
					扶美代						志						みつこ						_
					代						洋						٤						壺
米櫃のな	ライス	コスエ	名月1	虫藥		テ	写	奴	目	極		雯	灶	ブ	1	給		荒	新	半	7	鴨	
米櫃のないキッチンにパック飯	シャワーに照れる息子の幸祈る	コスモスの道花嫁の荷が通る	名月やアポロのことは忘れてる	虫籠にトンボ忘れて夏終る	岸和田市	テレビから地震のニュース続く秋	写経する父に手紙を書くように	祭り好き喧嘩も好きな顔ならぶ	見えすいた策だが一度聞いてみる	極楽は今より良いと限らない	富田林市	霧の町いつもと違う夢に逢う	結局は氷柱にする恋ひとつ	ブラックがおいしくなって恋終る	しぶちんの哲学借りをつくらない	絵ロウソク囁くように溶けてゆく	富田林市	荒む日は雷鳴さえも心地良し	新世紀産れ変れるものならば	半月に割れた大事な皿のこと	こおろぎに天は二物を与えない	鴨川が銀河になった星月夜	富田林市
いキッチンにパック飯	ライスシャワーに照れる息子の幸祈る	てスの道花嫁の荷が通る	やアポロのことは忘れてる	能にトンボ忘れて夏終る	岸和田市 宮	レビから地震のニュース続く秋	経する父に手紙を書くように	かり好き喧嘩も好きな顔ならぶ	元えすいた策だが一度聞いてみる	楽は今より良いと限らない	富田林市 片	物の町いつもと違う夢に逢う	和局は氷柱にする恋ひとつ	/ラックがおいしくなって恋終る	こぶちんの哲学借りをつくらない	ロウソク囁くように溶けてゆく	田林	む日は雷鳴さえも心地良し	世紀産れ変れるものならば	-月に割れた大事な皿のこと	おろぎに天は二物を与えない	川が銀河になった星月夜	富田林市 藤
いキッチンにパック飯	シャワーに照れる息子の幸祈る	てスの道花嫁の荷が通る	やアポロのことは忘れてる	能にトンボ忘れて夏終る	市	レビから地震のニュース続く秋	経する父に手紙を書くように	かり好き喧嘩も好きな顔ならぶ	元えすいた策だが一度聞いてみる	楽は今より良いと限らない	林市	物の町いつもと違う夢に逢う	和局は氷柱にする恋ひとつ	/ ラックがおいしくなって恋終る	しぶちんの哲学借りをつくらない	ロウソク囁くように溶けてゆく	田林市	む日は雷鳴さえも心地良し	世紀産れ変れるものならば	-月に割れた大事な皿のこと	おろぎに天は二物を与えない	川が銀河になった星月夜	田林市
いキッチンにパック飯	シャワーに照れる息子の幸祈る	てスの道花嫁の荷が通る	やアポロのことは忘れてる	能にトンボ忘れて夏終る	市宮	レビから地震のニュース続く秋	経する父に手紙を書くように	り好き喧嘩も好きな顔ならぶ	えすいた策だが一度聞いてみる	楽は今より良いと限らない	林市片	物の町いつもと違う夢に逢う	和局は氷柱にする恋ひとつ	/ ラックがおいしくなって恋終る	こぶちんの哲学借りをつくらない	ロウソク囁くように溶けてゆく	田林市 中	む日は雷鳴さえも心地良し	世紀産れ変れるものならば	-月に割れた大事な皿のこと	おろぎに天は二物を与えない	川が銀河になった星月夜	田林市 藤

パソコンにインプットされた孫の顔	おしゃれするこころ雑事でつい忘れ	鮮やかに身を引く舞台考える	花形のスマイルに酔う立見席	美しく歳とる人に憧れる	岸和田市 藪 野 けい子	前口上たっぷりあった旅みやげ	危ない橋渡ってみたくなる自信	花形と言われ稽古は怠れず	憧れるだけで終らす娘の結婚	初孫を抱いたかたみの濃紫	岸和田市 原 苑 子	般若心経唱え今年も無事 家族	文字か絵かわからない書が特選か	わたくしの朝が始まるテレビ欄	コンピューターになって紙面に情がない	東京のラッシュはまるでつむじ風	岸和田市 高須賀 金 太	コスモスの色とりどりで和む道	見送りに来た空港のあっけなさ	褒められた指輪イミテーションとも言えず	気どっても岸和田弁が出て困る	曼珠沙華咲き揃ってる散歩道	岸和田市 原 さよ子
生き生きと松茸めしを食べている	安物の靴に嚙まれる癖がある	トンボ君信号無視をしちゃいかん	結構なことに毎日目が覚める	虫めがねひとりになった時のため	松原市	前向きにわがまま通すあすの風	レンタルは宮詣りからお葬い	ハードルを越えるよろこび旅の味	十七歳雲の流れに善と悪	天災はどうしょうもなし無事感謝	貝塚市	猫十匹このトンネルから抜けられぬ	弱いとこ知っているからいばらせる	ほんそこと峠の茶屋はまだ遠い	見栄張っているがびくびくする財布	その溝を埋めるにやはり酒がいる	藤井寺市	天国へお供しますと添え書きし	たまご抱く鳩も体温上げている	ささくれて波立つものを遠ざける	身の奥に焚き火の跡がひとつでき	洗濯の場所を知らないこのいのち	藤井寺市
					小						池						楠						鴨
					池						田												谷
					しげお						寿美子						昭子						瑠美子

参観日先生の汗みえずとも	かべの図画あの子この子の夏休み	背中から母をみている参観日	参観日手をあげながらふりむく子	教室のにおいなつかし参観日	堺市	絵巻では引き目鈎鼻美男美女	塀のない家覗かれることはない	正解は二つあってもいいのです	浮き雲よ私はすがるものが要る	浮き雲よ私は水にも浮きゃしない	堺市	新世紀へ芽を出す秋の種を蒔く	晩秋のわたしへ紅葉まぶしすぎ	栗のいがはじけて秋がこぼれ落ち	人柄の滲んだ便り貰ろて秋	食欲を刺激してくる秋の色	堺市	無視された会釈小さな傷となる	しんどいが口癖だとは情ない	琴線に触れず戻ってきた言葉	美少女のああ歳月やクラス会	人間のエゴ害虫だ雑草だ	高石市
					近						志						宮						浅
					藤						田						本						野
					豊						千						か						房
					子						代						かりん						子
喪のたより書きつつおせちどうしよう	ツナ 納豆 海老マヨ 手巻き嫁のす	去年まで回転ずしですんだ甥	言訳はしないときめてせやけどな	墓参り帰りはぬくずし茶碗むし	大阪	にんげんに草臥れた日の雲疾し	もう長い間出合わぬ赤とんぼ	晩節という字が好きになってくる	六十路居場所捜しがまだ続く	キリトリ線上にときどき乗ってい	大阪	パソコンに頭も指も叩かれる	おどろきとすみれをくれた人とい	服を替え自分自身を確かめる	自分らしく生きたくおしゃれ味方にし	シドニーのうまい空気が画面から	堺	金の卵を隠しに芒ヶ原へ行こう	満洲の記憶ほのかに赤とんぼ	膝を抱き己の膝のにおい嗅ぐ	洞窟の中でわが名を呼ばれけり	紐のごとき涙流すや観世音	堺
よう	すし		d.		市			.0		る	市		3		だしし	•	市						市
					大						西						神						桑
					塚						出						原						原
					節						楓												道
					子						楽						文						夫

息を抜 曼珠沙 警告を色で示した彼岸花 根 0 毒 華あ 0 < 意 時 味を知 0 間 世この世を分ける花 が無く 0 てた彼岸 i 後 花 市 1 糸 昭 子 種類 見事ですシドニー 金メダル決め笑顔よりまず 多い 中から買うてくる豆 五 輪開 会シ 涙 3 大阪市 1 玉 置 英

子

念願 を過ぎて夫婦の 0 部 屋 かい 介 護 0 距離を知 栖 なり る 大阪 市 JII 端

余裕ある蛙は蛇と距離を置

還 欠点は見ない知らないままが 十年も前の正論 曆 褒めら ń 良 Va

スタイム勝利の女神惑わされ 弱 42 b たしを誘うすきま風

気

0

道

7

ン休みも四時に目が覚

口

秋 また欲に負けて苦しい の風ことばを少し飾らせる 食べ 放題

子

離

れに今度は犬か妻の愛

大阪

市

井

F.

白

峰

紙

風船

今も温みが手の

ひら

大阪

市

河

#

庸

佑

時

もあ

る

均 等 0 森で 個 性 が 眠 ってる

主義 べも 先で上手に捏ねる手前 我主張 秘 せ 82 羽根 め て流れに逆らわ を広げ て利 味噌 П

ず

に見た幸運

いまだ夢の

まま

3:

る

め 3

 \mathbb{H} 遠

大阪市

鶴

野

来年 ~ 飛躍のバ ネに油さす

隅隅 ジョー 金婚 に埃残してい 式敗者復活 クだと片付けられ 戦をする る会社 ぬ

ことことと根気よく煮る母 構を取 り違 えされ 困 0 7 0 味

結

方言で親子楽 子には子の言い分がある口答え に \$ 担がれ梯 んしげ電 7 記話する 外され

生涯を父は蟹断 ちを知らぬ手土産松 ち 鰻 断 葉蟹

断

歩

虫

0

大阪市 中 H

Va 子

こだわらぬ嫁でわが家は平和です ほらふきのうそがまともに交じっ 声 聞 か 12 間 K は や 神 無 月 たり

のびきった企業の足を不祥事 が

ニーで女性が出し た底

シド

大阪 市 神 夏 磯

典

子.

; ;	大阪市 本 間 まれいいかげんに飼うから犬もいい加減を入でした鏡見ないとつい忘れを入でした鏡見ないとつい忘れがなりのみな実らせて秋祭り	大阪市 渡 部 ないかいと がある と はく目立つ葦一本が枯れている はく目立つ葦一本が枯れている では点狙ってる	川 久保	大阪市 宮 本 つ
	満 津 子	さ と 美	睦 /	欣史子
争いの果てぬ恐い世紀末 大し振り亡母の小紋に触れてみる 久し振り亡母の小紋に触れてみる 本音建前両刀使いの鏡です	大阪市精一ぱい生きてるつもり萩の花台間自答今更急ぐ事はないを主き父母の面影浮かぶ秋の月でき父母の面影浮かぶ秋の天がからりない。	大阪市では、大阪市が、大阪市が、大阪市が、大阪市が、大阪市が、大阪市が、大阪市が、大阪市が	大阪市場は、大阪市の大阪が、大阪市の大阪では、大阪では、大阪では、大阪では、大阪では、大阪では、大阪では、大阪では、	大阪市
I	町	辻	稲	清
]	田	Щ	本	水
j	達	慶	凡	絹
	连	凌	74	

時とし 大海 妻逝 世 叩 新風を持参の嫁が始 母さんを変身させた試着室 謙 社会鍋いずこも同じ十二月 木綿物好きで一点豪華主義 携 地 思い出を新たに球根 卆寿まで生きた姿がこれかい 化 お役ごめ かげ口を拾うてから か が 虚 かれた杭も 張羅我慢を強 帯で喋る電 ける化ける女化 ŋ になっ かって七 さが心美人のお茶お花 んでやっ 夢を抱いてる蛙 火 て占い信じることもある 火 0 ん魂抜けて立 た主治 + お 神の戒めかも と自 能 話 D 6 减 に 器 つしか根が生える いるディナ のそば 医 粧に念入れて 分の 酔うた秋 0 た身 動する 春 0) に自分も世 偏頭 の夢 の子 年を知る 0 案 知 0 ーシ 山 痛 0 n 疲 月 ず な n 大阪 大阪 大阪 大阪市 3 話 K 市 市 市 故北 津 津 JII 守 原 村 志華子 章 柳 勝 久 伸 美 興凱 冬の陽 名曲 帆柱 どの 頑固 妻の目 抑 惜別の挽歌流れて秋深 秋彼岸友情偲ぶ一心寺 ささやかな抵抗妻 佳 真心を形に変えた年の 七人の敵へ自信が光る靴 いつまでも鳴け生きのびたキリギリ 海外で錆びた命を研いでい 七光りないが元気な父母がいる 球より野次がおもろい 留 H に迷っ 話 も介護をさせず逝 0 Ш だが父はやさしい目をし の聖しょくつつじ包み込む(商工会議所 湖どじょう飲み込む青蛙 へすこしオダマリ が少しやさしくなら 苦難を刻む の窓際僕の指定席 も神の姿となって雪 母は客間 た鳥が へ行ったきり 羽根 の塩加油 バイカル 休め 幕 秋 0 た父母 n 0 時がある 虫 る ない 湖 東大阪市 てたた 大阪市 大阪市 大阪市 か ス 北 安 出 達 村 井 本 はじめ 賢 久 東 峰 子

いちにちに二度も日記がつけてある	百合匂う画帳を開く冬の月	入浴もトイレも子機が離せない	はや師走エアコンスイッチ変えてある	昨日 今日 明日へつなぐナレーション	八尾市	お上手を言うから妻は不審がり	逃げ腰の私を笑う影法師	ハンサムな板さん目当ておんな客	仏だんの香りに嫁も慣れてくる	夫の背な軽く叩いて送り出す	八尾市	揺れている間も僧の読経は途切れない	叔母が逝く奇しくも母の命日に	ぼくの脚もう折りたたみできません	腕組みの中から転げでたチャンス	シャガールもユトリロも観て豊かなり	八尾市	強敵を迎えて肩の力抜く	減塩をすると誓った通夜帰り	出し抜けにぼくを貫く百舌の声	退院後誓いが重くのしかかる	明日こそ幸せになる靴を履く	八尾市
					高						井						村						村
					杉						尻						上						上
					千												= = = = = = = = = = = = = = = = = = = =						剛
					步						民						ミツ子						治
秋りんの夜ごと貧しきペンを執る	炎にも水にもなれず生き延びる	夫唱婦随がんじがらめに縛られて	秋風は単細胞に容赦なし	果物も籠も絵筆の秋になる	八尾市	赤とんぼが来る次は新米が届く	急がぬと秋駈け足で逃げてゆく	訪問看護が来るから夫病人だ	粋ぶって三味の爪弾きなど午後に	昔話の紐をしっかり結んどく	八尾市	謝罪して傷の深さをまだ知らず	あふるもの他人に与えて風は秋	月下美人暑さを越した彩で咲く	これからの生命に弾みかかる新居	おしゃべりに弾みをかけてくる秋だ	八尾市	介護の手花に水やるやさしい手	リストラのタクシー客に道をきき	桐箱の花瓶は花の香を知らぬ	お寺さん勝手に上がり経をよむ	あたたかくやんわり軽く秋を着る	八尾市
					高						宮						宮						吉
					高橋						宮崎						宮西						吉村

生

風

花

目を見はり変動の世の隅に生き目を見はり変動の世の隅に生き 目を見はり変動の世の隅に生き マロ市 井 上 桂脚 1 こと言っては世間狭くする 第二十 上 様 2 こと言っては世間狭くする 第二十 上 様 2 と	世渡りに甘辛ありて人の味 八尾市 長谷川 春
洋 子 作	蘭
定診の前に出来てる処方箋 微苦笑で隣へ譲る車内の蚊 アカンベへ孫もアカンベを返し アカンベへ孫もアカンベを返し 中画館出たらマイダーリンに添う 西へ西へ雲走り出す震度 6 ライバルは雲の動きを知っている 三宅島見守る雲は動かない 雲海をバックに妻を小さく撮り ちぎれ雲に声をかけたい弾む朝 大正星青く淋しく宇宙に漂う トリトンのいわれありそなうす赤さ 小倉遊亀「磨鉗峠」の絵に逢えず 木犀の香りと共に佳いたより どこの誰が癌という字を作ったの 目で耳で口で手で詠む五七五 埋草が隅できらりと光ってる	病状を聞いて見舞いが癌と決め枚方市
栗 森 前	宫
林 本	JII
た	TH-
光節も	珠

シドニーが静かになったさあ行くか	八十路過ぎ今でも貴公子待っている	筋肉はついたがひどい物忘れ	苦労性夢見る人になれぬまま	無理させず蝶よ花よで切れる子ら	市	よかったね無事に過ごせて今日終る	一本気を愛し遠くから目を注ぐ	花盛りのネットビジネス甘い罠	都市砂漠置き引き引ったくりに遭う	カラオケ喫茶持ち歌は二曲だけ	寝屋川市	エンピツをころがすように人事決め	病み上り達者な口が先ず戻る	腕組んでたまには散歩しよう妻	死に金を反省している日記帳	杖ついた背すじがピンと張っている	寝屋川市	くっきりと芒がにらむ高い天	早よ起きて昨日の雀待つことに	生きるとはこんなに嬉しい古字引	嫁がせて秋の夜長の影ぼうし	シドニーの選手育てたグリコ飴	寝屋川市
					酒						富						高						太
					井						山						田						田
					勇太朗						ルイ子						博泉						とし子
多端だが日本シリーズ愉しみに	首の骨が曲がっていますレントゲン	清楚には感じないロングスカート	いい顔をしている家族探検家	自然はいつも裏にきびしさ用意する	寝屋川市	買わぬ気の荷物がふえたバスツアー	王様がいつも放さぬ望遠鏡	わたくしの原点に在る冬の景	ジョークだと言うて済ませるタイミング	十二月来てそれなりの愚痴小言	寝屋川市	化粧などしたことのないねぎ坊主	ちらほらのうちは名所のノッポビル	浴びる程飲んで一つが効くのかも	結局はまとめて捨てることになる	卵割るピヨピヨピヨが聞えぬか	寝屋川市	暗算で計算してます消費税	貧しい日忘れぬ老いの御飯つぶ	金メダルよりも輝くあの笑顔	憧れた人も私も杖をつき	パソコンで顔見ぬ友がたんと出来	寝屋川市
					柴				グ		岸						江						坂
					田						野												上

高

栄

度

老人に使え使えと誘う旅を入に使え使えと誘う旅をかけて下さるお買い時お誘いをかけて下さるお買い時がではパワー全開ままならず	石焼きいも宣伝カーに咳も入れ 石焼きいも宣伝カーに咳も入れ のホースは蛇になりうねる ではたちの顔で告げにくる ではなるマグマ ではなるマグマ	寝屋川市 のを嚙む思いですわと恐妻家 のを嚙む思いですわと恐妻家 のを嚙む思いですわと恐妻家 のを嚙む思いですわと恐妻の知恵借りる のを嚙む思いですわと恐妻の知恵借りる	寝屋川市 日紅の赤さ娘を越えぬよう 口紅の赤さ娘を越えぬよう ない男をひっくり返すフライパン でるい男をひっくり返すフライパン でるい男をひっくり返すフライパン	
	平	森	北 籠	
	松		周 島	
	かった		波恵	
	かすみ	茜	留	
真夜中にひらめきのメモ枕元名言の初恋メダルやわらちゃん名言の初恋メダルやわらちゃんの子さん楽しく走り金メダル	を ただただ無 ただただ無 を がかれ ただれ だ 無 で 野市	四条畷市 ・ でではなせぬ引立て役をする眼鏡 でででは、 ではいき出されて急ぐ足 ではなせぬ引立て役をする眼鏡 ではなせぬ引立て役をする眼鏡	東大阪市 安フィヨルドの静けさもある地球ですアンデルセンの国でお昼を食べてますアンデルセンの国でお昼を食べてますアンデルセンの国でお昼を食べてますの名がハーゲンは遠足日和リュックの子のでは、	
	Ш	古	女 拍	
	JIJ	岡	永	1
	71	ļμJ	千 枝 春	

世 紀 男 0 椅 子 がきし み 出 吹田 市 Ш 本 魂 嘘 0 10 T か ま b n たい 日も あ る 箕面 孤 独 市 出

秋 0 旅命 P 2 くり遊ば せ る

眼帯の 中はっきりと君の像 (角膜炎患う)

私の一マグマ 眠 って山ひっそりと夕焼ける

歩一歩女という 実 吹

市 大 谷 篤

田

子

秋の風女ひとりはメランコ 1)

寂

しさを包む今年の

秋 秋

0 0

風

指先でちぎっ

た紙

^

風

别 濃 n い味も薄味となりおつきあい 道もうお会いする人でなし

岡 本 吉太郎

池

田 市

歌う

k.

介 センター ドングリ j D 7 D

しまれて転勤の日をなつかし の過去仔 細 に調べ飯 0 種

t

過去現代未来と続く中に生く

喜 一寿初孫嬉しく重く抱けずに

池

H 市 栗 田

久

子

お悔 好き嫌い 友人を皆 すらすらと真 が子の癖遺伝のせい みの 手紙 言うこともなし金婚 こきおろし悦 かい か嘘か偉 書けた鱗 と目をつぶり Va 0 雲

H

そば処振る舞

Vi

酒も添えら

n

独

な赤ポ

インセチアの赤が好き

殺戮の世紀葬る鐘を撞

激 鐘

動

の二十世紀

の鎮

魂

歌

ひとつ

打って見送る世

紀末

タイムスリッ 0 触れ る温みよ酒 プさせるアルバ 一交わす ム整

理

する

新世紀夢見る過 夢死に終りたくない 疎の村の 星 世 紀

金婚を芋で育てた子 が 祝

箕面

市

椎

江

清

芳

言い負けておこう相手は金が 幻の城を男は建てて死 X ある

学歴は学士異色の 火 の色に命吹き込む刀 ラー メン 鍛 冶 屋

クタースト " プ飲酒 0 夢 は よろしい 箕面 か 岩

猛暑去るさあこおろぎと枯

エコノミックアニマルの国神 0 る 玉

金出さぬご本家口は出 L たが

義弟逝く棺に菊正

一合瓶

豊中 市

井 E

直 次 津

ようじ

三度目のオキナワ今日も日本晴 二泊三日二九八で行くツアー (沖縄の旅) この秋の紅葉さがす日本地図 この秋の紅葉さがす日本地図 単中市 田 中 正 坊 一 一	万日 ロード	賞でも出い出は	居を覚まし元気元気と言ってみる ・ すず潮の上を飛天の舞うことも ・ すず潮の上を飛天の舞うことも ・ すず潮の上を飛天の舞うことも	1. 1. 1. 1. 1. 1. 1. 1. 1. 1. 1. 1. 1. 1
可も不可もない人生の狭い地図 月光に包まれ五欲を恥じており 雨降れば雨月と言って酒を酌み 願けゴマ ティッシュを配る青年よ 開けゴマ ティッシュを配る青年よ 服 田 無本市 永 田	c	金婚は走りつづけた通過駅(金麝を迎えて)金婚は走りつづけた通過駅(金麝を迎えて)	大阪府 籾 山時折は魚眼レンズで見る世間をきめきを作る時どき赤い服をきめきを作る時どき赤い服がはりに動かぬ子	大阪府 米 澤
俊	È	宣	隆	俶

盛

子

司

子

右折中のボク追越した警察車水戸泉辞めて塩笊さみしがり	高橋が巨人を食ったスポーツ紙	統一旗二人で持って念を入れ	マップ見て旅行気分の老い二人	唐津市 樋 口 輝 夫	お立ち酒酌んで見上げるいわし雲	信号のたびに仕上げた娘の化粧	草原に時空を超えた兵馬俑	核ボタン押したその手は腐るだろう	書き溜めた日記そろそろ捨てる時	唐津市 市 丸 晴 翠	しぐれゆく肌の寒さを思いやり	この腰にあかざの杖を作ろうか	繰返すリハビリ時計とにらめっこ	深草を除けば秋の芽が揃い	頂いた薬草和えてこわごわと	熊本県 岩 切 康 子	浴槽で出来たいい句をもう忘れ	訊き込みの犯人候補にされている	仏さまこれ高僧の読経です	雑草描けば神の摂理を畏敬する	介護する立場の幸と優越と	熊本県 高 野 宵 草	
有難う世にミジンコもジャコもいて終章だトゲ抜き地蔵信じよう	しかっただか	老医師は愚痴もしっかり診てくれる	おおらかな大津絵の世に戻りたい	唐津市 井 上 勝 視	あるとこは有るな脱税桁はずれ	小父さんと呼ばれ慌てた我が齢	プレミアム付くかも知れぬ守礼門	不況など知らぬ葬儀屋町医殿	列島の民は何時から去勢され	唐津市 山 口 高 明	紫の君は青年紫香さん	秋雨に冬はそこまで羽づくろい	靴がある二階は今日は居るらしい	親戚に九官鳥が一人居る	稲たわわ現世よさらば彼岸花	唐津市 山 門 タ ミ	第六回まつりの賑い哀しくて	世紀末総集編は混血祭	透明な人生だった有難う	九十六歳涙々の恩師の掌	月下美人上弦の月これぞ恋	唐津市 山 門 幸 夫	

還暦へ父は卆寿の先を行く	おでん鍋娘が話しかけてくる	菊日和父は介護の手を借りて	性善説白髪が増えてきて困る	二十一世紀へ残す私の五七五	和歌山市 牛 尾 緑 良	飛行雲を渡っていきたい秋の空	足音も吸ってしまった青い月	ジンジャーの香りを運ぶ秋の風	食欲の秋へ媚びると胃が怒る	言うことをきかない足に灸をする	和歌山市 岩 本 美智子	図書館で黙礼交わす仲になり	山彦も友達作り下手らしい	残業のバイクに乗せる十三夜	油断など決してしないねむり猫	幾何学に刈り残されて夕暮れる	和歌山市 古久保 和 子	手花火の先に命の一雫	キョロキョロとしてたらあがん撥ねられる	鍋料理妻の手抜きも堂に入る	肌の色こえて五輪のカーニバル	一切空まっ赤な夢を彼岸花	和歌山市 山 根 めぐみ
パチンコへ行く足どりはまだ軽い	待合室一人喋ると皆しゃべり	もう誰も貰ってくれぬイヤリング	世紀末宴の始末まだつかず	日めくりの薄さヘテープ巻きもどす	和歌山市	味覚の秋この食欲を何としよ	川柳三昧けさは東へ明日は西	ドア蹴ってセールス残す捨て台詞	健康を宝に明日へ生きのびる	いつかまた何処かで会えるそう思う	和歌山市	一匹になればピラニアおとなしい	ちらほらの客に揺れてる老舗の灯	シュレッダー貰って刻む何も彼も	左から右へ素通りする新語	退屈で心の襞を折り返す	和歌山市	冬嵐のように噂が翔んでくる	思い出を少し磨いて届けよう	朱の薔薇もいじめの刺を隠してる	いくさの風避け切れぬまま歩を重ね	不適切などと大きな蓋をされ	和歌山市
					細						田						福						松
					JII						中						本						原
					稚						み						英						寿

子

子

ね

代

史

男

昌

梢

じゃんけんぽんいつも私は負けてやる	鴨川の流れが早くなる師走	十二月歩いて町に出かけよう	世紀末何かすることありそうだ	あの人と歩いた街に雨似合う	京都市 山 海 友	行雲流水夫唱婦随で恙なく	菊の香よ誰の祈りか道祖神	言い訳を聞いてやろうと女郎花	頑としてベッドを嫌う喜寿の父	もみじ降る秋有終の箕面往く	大和郡山市 坊 農 柳	悩みごと言うには勿体ない日の出	一病が二病になっても息災に	モデルハウス書斎にしたい南向き	彼岸すぎ庭畑に屋根の影のびる	ひがん花コスモス猛暑を忘れさせ	大和高田市 岸 本 曲	あるがまま生きて胸張る境地なり	シングルを豊かに生きている自信	未練まだ嵯峨野の秋はひと恋し	外面へ華を咲かせてひとり住む	朝ごとにハッピーメイクして生きる	香芝市 大 内 朝
																	豊平次						
					熙						弘						次						子
孫の日が	ベラ	がた	知っ	知		占	-			cwsc.											Ligar	-tr	
が出来たと孫が言って来る	ベランダの花入れ替えて秋の風	がなり行く軍歌に今も口ずさむ	ていて知らぬと渦を避けておく	知らぬ間の脳梗塞に寒くなる	大宮市	自分史に世紀跨いで生きたこと	面白い生き方はあるきっとある	松茸の香は馥郁と自己暗示	大方は満願未だ秋の寺	老いの母日増しにうとうとねむり猫	亀岡市	子を産んで美人ますます透き通り	段ボール潰す相撲をとるように	安心が溶けてる午後のミルクティー	ローカルの待合で聞く医者談義	往診の医者もお歳で忘れもの	京都市	自画像はどこか違って落ち着けぬ	いつか測れるか亡母の湯呑の深さ	十三夜小さな秘密は照らさずに	濡れようと乾こうと泣かぬ浜の砂	青くさい正論周りが黒すぎる	京都市
が出来たと孫が言って来る	0	り行く軍歌に今も口ずさむ	ていて知らぬと渦を避けて	ぬ間	大宮市 八	日分史に世紀跨いで生きたこと	13	の香は馥郁と自己暗	大方は満願未だ秋の寺	母日増しにうとうとね	亀岡市 井	子を産んで美人ますます透き通り	ール潰す	が溶けてる午後のミルクティ	カルの待合で聞く医者談	の医者もお歳で忘れ	都	画	いつか測れるか亡母の湯呑の深さ	十三夜小さな秘密は照らさずに	かぬ浜の	育くさい正論周りが黒すぎる	京都市 都
が出来たと孫が言って来る	0	り行く軍歌に今も口ずさむ	ていて知らぬと渦を避けて	ぬ間		日分史に世紀跨いで生きたこと	13	の香は馥郁と自己暗	大方は満願未だ秋の寺	母日増しにうとうとね	市	子を産んで美人ますます透き通り	ール潰す	が溶けてる午後のミルクティ	カルの待合で聞く医者談	の医者もお歳で忘れ	都市	画	いつか測れるか亡母の湯呑の深さ	十三夜小さな秘密は照らさずに	かぬ浜の	育くさい正論周りが黒すぎる	市
が出来たと孫が言って来る	0	り行く軍歌に今も口ずさむ	ていて知らぬと渦を避けて	ぬ間	八	日分史に世紀跨いで生きたこと	13	の香は馥郁と自己暗	大方は満願未だ秋の寺	母日増しにうとうとね	市井	子を産んで美人ますます透き通り	ール潰す	が溶けてる午後のミルクティ	カルの待合で聞く医者談	の医者もお歳で忘れ	都市高	画	いつか測れるか亡母の湯吞の深さ	十三夜小さな秘密は照らさずに	かぬ浜の	育くさい正論周りが黒すぎる	市都
が出来たと孫が言って来る	0	り行く軍歌に今も口ずさむ	ていて知らぬと渦を避けて	ぬ間	八	5分史に世紀跨いで生きたこと	13	の香は馥郁と自己暗	大方は満願未だ秋の寺	母日増しにうとうとね	市井上	子を産んで美人ますます透き通り	ール潰す	が溶けてる午後のミルクティ	カルの待合で聞く医者談	の医者もお歳で忘れ	都市 高 島	画	いつか測れるか亡母の湯呑の深さ	十三夜小さな秘密は照らさずに	かぬ浜の	育くさい正論問りが黒すぎる	市都倉

恋人未満だから笑いがよく続くで人未満だから笑いがよく続く平凡に満期通知の来た保険平凡に満期通知の来た保険でいる。	富山県 増 田 紗 弓断層が動いています十二月 塩しくて飲み悲しくたって飲むお酒嬉しくて飲み悲しくたって飲むお酒雲が呼ぶ峰へ吐息を弾ませる	病歴も命もわかる診察券 富山市 島 ひかる 高田 の かる で と と で	を霽れて富士は再び視野の中 ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・	富士宮市 渥 美 弧 秀
太棹の三味に酔い痴れ津軽衆どんぐりも栗も同じに子のポッケどんぐりも栗も同じに子のポッケとなるというと乗りではいかならに描いたなら	出前市 今 愁 女悟しまれて果てる願いの雪月花観漢のいずこにおわす父母の星観漢のいずこにおわす父母の星のようした。	水流すだけの川です詩がない 弘前市 岡 本 花 匠 水流すだけの川です詩がない 水流すだけの川です詩がない	砂川市 大 橋 政 良 大根が高くて秋刀魚明日にする 大根が高くて秋刀魚明日にする 友のガン伝わる受話器握りしめ 縫い物も下手のよこ好き布の山	可児市 板 山 まみ子

くちなしの花は私の胸で咲くちくちくと朝の胡瓜が口を刺す追憶の中で人形笑ってる。おはようございます散歩にも似た朝帰り	秋冬風の絡みと地蔵さ	(こん)ない リオの台詞が割けて北に傾く水向く星の流れに	捨てますひ	おずおずと生徒の顔を見る自信わくわくと見た水星に憧れる再会を果たした赤いボジョレーヌ解やかに白寿の描くテレマーク	弘前市 櫻 庭 順 風値下りは地価も米価も過疎の村借財を小さく砕いている師走年賀状師走の街は雪と雪	
	傘		1		風	次
荒れる世の海 犬掻きで泳ぐ日々約束通り母に捧げる金メダル事故ゼロは私のほこり願いです。	ンネルの出口に置い	の蒲団に癒されるいた宛名も味気ない	かなる道で明かりが見え隠	的東へ駄目押しをする雨の午後始めから疑っている目は喜劇はっとして見る岩木嶺の美しさ秋風に孫の手紙を読んでやる	起承転々ドングリの旅続く 対に対なの誰かに似てるひき蛙 政治家の誰かに似てるひき蛙 を発けを食べて男は生き返る	
	<u>Kinj</u>		福		宮	高
	部		士		崎	瀬
			慕		ヒサ	霜

石

情

進

輸入米増えて日本の土地が枯れ	均等法男のメダル少ないよ	私の釘が錆びたか物忘れ	年金に爆撃かける介護法	弘前市 須 郷 井	モーリス・グリーン金の靴履き金メダル	ビーチバレー負けて口惜しい砂を喰む	ドーピング メダルが欲しい欲しくない	ソフトボール三敗しても金メダル	弘前市 中 山 雅	或る色と恋するような使い分け	高僧の顔なり莢を出る大豆	森の奥で暑さを知らぬ水の味	僕と蝶花野めぐりがことおさめ	弘前市 蒔 苗 果	ベレー帽善人そうに見えてくる	さじ加減程よくなって共に老い	脱線の子がふるさとに舞い戻る	未来図を描く相手が遠すぎる	高知県 小 澤 幸	逆境に耐えた親父の厚い胸	長寿国持て余してるのが本音	長き夜を二合の酒の浅き夢	来ぬ人にくるくる回る風車	香川県神保持
				井蛙					雅 城					木林					辛泉					坊太郎
退職日心のけじめ句点打つ	今日もまたチラシのトップ安玉子	地蔵さんのよだれ掛け替え密やかに	焦っても糸口見えぬ妥協案	鳥取市	すばらしいニュースが欲しい耳掃除	独り立ちすれば取ります鎹を	古鏡磨くと亡母の安来節	天職の匠の技が華となる	鳥取市	接待を受けてもいない席だった	手を引いた孫の手を借り寺まいり	生き残り死ぬより辛い思いする	古ノート所どころに隠し文字	鳥取市	真夏日が癒えぬ病いを置いて去り	問診に隠さず言えるかかり付け	知らぬ振りする根回しが難しい	やる気失せそうで落とせぬ不精髭	富山市	落語家の下戸うまそうに芸で飲み	コンビニのにぎり一人の秋の愁	はがされた写真の跡に痛む胸	秋の彩女一人を旅に出す	横浜市
				Щ					冨					前					酒					小
				本					Щ					田					井					野
				益					檳榔					_										句多留

藁一本すがる思いの手術台	磯釣りのキス一匹が病みつきで	口固い人と信じて裏切られ	車座になって方言丸出しに	鳥取県太	天命のままに奉じた職である	干涸びた虫一匹に群れた蟻	敬老に送り迎えの一騒ぎ	鍛え足りない頭のせいか惚けてきた	鳥取県 乾	夫偲ぶ断てぬ未練の万歩計	おめでたい席に出たいと菊が泣き	地蔵札余風も思慕も貼り重ね	支えなど要らぬいらぬと亡夫を恋い	米子市 永	原っぱに日暮れを惜しむ風の子ら	風鈴を仕舞い忘れて萩も散る	自問自答倖せのため小石積む	豊かさに身の程知らぬ世の怖さ	鳥取市福	嫁ぐ娘に頰の涙が止まらない	死んでから惜しむ話の種にされ	長生きが荷物にならぬうちに死ぬ	老化した脳も穴場は覚えてる	鳥取市 岩
									+4															
				田					喜					井					田					原
				幸					与					三津子					登					喬
				枝					志					子					美					水
ゴビ砂漠人間なんて知れたもの	ベルリンの壁跡しっかり踏んで自由っ	艶つやの新米あすへの力こぶ	太陽に恥じない汗が醸すゆめ	出雲市	隠居役庭の掃除は欠かさない	一心にお寺めぐりは雨の中	くさっても鯛と明治が前に出る	花言葉選びあらあらかしことす	出雲市	日の丸のデザイン今更に誇る	葛藤をつと和らげる無欲な眼	久遠の愛汚濁の身でも焦がれてる	不協和音矛先かえて吼えている	松江市	はにかんで小さく座る母白寿	千灯の供養が揺れる摩仁の寺	貝になる熱い本音を抱いたまま	こころまで正座反省しています	鳥取県	次の間もあたたかくする中障子	検診のフィルムチェックに息を詰め	目的の駅の停車を寝てしまう	青いわらで干した鰈は良く売れた	鳥取県
	(東欧旅行して)			富					小					安					石					吉
	17			田					玉					食					谷					田
	5													及										111
	2			蘭					満					友友					美恵子					孔美子

添い金婚祝 も入れて席 も入れて席 も入れて席	ジムに来てオリンピックだけ見て帰り 都市砂漠になっても帰省する祭 酸性の長雨ちらほら百日紅 神戸市 酸での長雨ないの無い大人達	二ミルクの匂う 一三に初春を持っ でけば同期の花 でが魚信 とがきっと有 ででいて震
的	池	垂 石 井
場	田	井 原 上
+	善	千 淑 富
四郎	守	寿 子 子 子
心まで豊かになれ 長る舞い酒に色よ その時は鳴門の渦 秋の暮れ歩きつか がんじりの屋根で だんじりの屋根で	朝刊に包む松茸おすそわけ明子者本音かくして派手に生明ストラで世代交代ふり返るのそっと根回し効き入い。	か の つ る 日 人 世 六 人 道 も 里 和 が 紀 時 ゆ
に色よい返事してしまう 門の渦に抱かれたし きつかれた靴の底 をつかれた靴の底 をで踊っている自信	おすそわけ にしの手に負えぬ だしの手に負えぬ 京都府 京都府	り り腰 た 楽 歩 に 暇 込む まけん は ば ば と で ストール と か まれる また
れる旬の味れる旬の味た阪市 清で踊っている自信で踊っている自信	京都府稲	花 西宮市 砂円 市 水 菊根 長谷
れる旬の味れる旬の味た阪市 清 水がれた靴の底大阪市 清 水かれた世紀末で踊っている自信	京都府稲葉	花 西宮市 T 西宮市 長谷川 熊 池
れる旬の味 渦に抱かれたし 大阪市 で踊っている自信 で踊っている自信	京都府稲	花 西宮市 砂円 市 水 菊根 長谷

文化勲章ノーベル賞へ出遅れのブラウン管で見る程赤い羽根を見ず鼻唄で自律神経眠らせる笑うしか知恵ない年だから笑う	予 庭 化	市	ト伝わるぬくもりよけ伝わるぬくもりよ	大阪市 円の○○年大事に師走送りましょ 二○○○年大事に師走送りましょ 二○○○年大事に師走送りましょ	大阪市
т П		藤	鈴	田	松口
本		井	木	中	尾
蛙		計 光	ト ョ 子	節 子	柳右子
立片一散ち隅時り	鈍 歳 捨 妥	tn 1 ## n			
止まりそれから運に逃げられで鮮やかに咲く花の悦を野バラにうつを持ってかれ際の桜鮮やか喝采す	足の家系か孫の運動会一つ積んだ憂いの誕生日て切れぬ女心へ紅を引く	羽曳野朝昼晩きっちり食べて老い達者大夕焼明日の策を決心し 大夕焼明日の策を決心し	要銭に一円五円提げて旅要銭に一円五円提げて旅すンス塾両手に花に前うしろコンサート苦手の僕を美女誘う	実る穂と土塀に心癒やされる 町名がハッピの背に踊ってる 町名がハッピの背に踊ってる	岸和田
止まりそれから運に逃げられるで鮮やかに咲く花の悦を野バラにうつを持ってかれ際の桜鮮やか喝采す	の家系か孫の運動会の家系か孫の運動会切れぬ女心へ紅を引く切れぬ女心へ紅を引く	日晩きっちり食べて老い達者 夕焼明日の策を決心し 帯で軽い約束すぐ忘れ 表婦やっと河口にたどり着き	場に まに では まの 指図が増えてきた はは まの 指図が増えてきた はは まの はの はの はの はの はの はの はの はの はの は	を を を を を を と 生塀に 心癒や される の 背に がハッピの背に 踊ってる の は に がいっピの背に いってる の に がれる	和田市
止まりそれから運に逃げられるで鮮やかに咲く花の悦を野バラにうつを持ってかれ際の桜鮮やか喝采す	の家系か孫の運動会の家系か孫の運動会切れぬ女心へ紅を引く切れぬ女心へ紅を引く	日晩きっちり食べて老い達者を焼明日の策を決心し帯で軽い約束すぐ忘れ	サート苦手の僕を美女誘う との指図が増えてきた との指図が増えてきた。 はけば妻の指図が増えてきた。	を を を き を 生 は に ず ルフや 旅の 誘い 増え の し て る を と れ に ず ルフや よ の き れ る う り し て る る り し る り し る り し る り し る り し る り し る り し る り し る り る り	和田市井
止まりそれから運に逃げられるで鮮やかに咲く花の悦を野バラにうつを持ってかれ際の桜鮮やか喝采す	の家系か孫の運動会の家系か孫の運動会切れぬ女心へ紅を引く切れぬ女心へ紅を引く	母晩きっちり食べて老い達者夕焼明日の策を決心し帯で軽い約束すぐ忘れ	サート苦手の僕を美女誘う 以けば妻の指図が増えてきた はけば妻の指図が増えてきた	を を を を は に ず ルフや 旅の 誘い 増え の り して 秋だと 気付く 金木犀	和田市 井 伊
止まりそれから運に逃げられるで鮮やかに咲く花の悦を野バラにうつを持ってかれ際の桜鮮やか喝采す	の家系か孫の運動会の家系か孫の運動会切れぬ女心へ紅を引く切れぬ女心へ紅を引く	日晩きっちり食べて老い達者を焼明日の策を決心し帯で軽い約束すぐ忘れ	サート苦手の僕を美女誘う との指図が増えてきた との指図が増えてきた。 はけば妻の指図が増えてきた。	を を を き を 生 は に ず ルフや 旅の 誘い 増え の し て る を と れ に ず ルフや よ の き れ る う り し て る る り し る り し る り し る り し る り し る り し る り し る り し る り る り	和田市井

という Ш 12 紅 Ш 葉 E 0 覗 頃 を言 か n う 天 風 か 7 箕 面 市 唐 住 実 ふ結婚 里 式 0 お えてて 味 覚 が我 届 が身 < 宅 0 年 枚方市 宮

大 橋 造 定年を意識 ま だ帰宅 L してます は L な Vi 趣 味 妻 0

溶 け て 10 1 野 43 Ħ 林 市

肘肩

<u>ک</u>

緒

をつ

きマ

+ E

ĺ

0

講

義

聞

7

43

3

本

ない

0

1

ŋ

0 0

市

議

候

補

腕山夏

時

計は

80

7

ただだけ

午

前

時

かつがた がれ 配も乗 7 0 るとは てはくれ 知 3 ぬ僕 ぬ 0 神 興舟 です

尾 市 篠 Va 0 3

行

倒

n

4

前

思

b

ぬ救急

冗打ち 解け 0 中で忠告くれ て秋 茄 子の た友 味 嫁 姑

先

生

0

多さ句

会で蹴

躓

80 た 頃に撒き餌 が 効いてくる 八尾市 袖

原

諦

ス テテコは好きだと藪 L 振 ŋ 嬉 L Va 記 事 だ 奴蚊よっ ノー ~ てくる 12 賞

神様 も 酒 かい 頭 吞 かかえるエ 2 たくなっ ールサレ て秋 を知 4 3

方市 木 政

子

街台十 纏紅高 月だ紅 足を知 入ら イク歩 葉求 X めて 中 国 道 旅 女子選手 E 止 プラン 80 雑 談

タバ コ 前 後 K 児乗せチャリ シコ 7 7

> 病信 ľ 7 た友 か浮 気 0 相

打別
ちれ h 0 で 日色あざやかな服を着 みて夫

明 け るチ + > ス無 10 まま老 13 7 P き

墓 新始 幹 め ての 京思 乗 最 0 て都 後 b E 2 発熱引 内を救 L たい 急車 救急 返 車

鈍 万 歩 計 浄 土 1 続 < 彼 岸 花

道 行きで心変わ 行 で心の 0 トッ 余白 プが 頭 埋 0 ためる 下げてい は 旅 女 3

Ш 柳 何 JII 柳 の作り方と味

43

方

◇お申し込みは川柳塔社事務所 麻生 路郎の幻の 名 価 1000 $\widetilde{\mathbb{H}}$

- 50 -

の便 居秋 間 豊中 市 松

Ш

久

の愛 0 深 深 うとは

豊中 岸

知

渡

奈良

県

辺 富 7

柳友の 坪し懐い い元 枯ふ 幸 1 戸より 草 の気 6 43 1 庭 S: 0 0 な 0 か 舞う ち ち ちんがト 深さに包まれてる火 が 0 3 V 5 見舞 ススキ 陰干し気ままなそんな秋 0 43 お 重 か がけなどと軽 ちょっ と出 なり 自 静 強 火 b 燃や いうれ 13 か 10 出 な 死 震 約 " に先ず る 東忘 は を 秋 者 度 す プに出てる義 力は 顔 老 と聞 出 0 火事も れない 見 12 B す 夜を揺する V K 頭 しい 持 と酒 0 揺れ < 悩 n 下 物思 2 ず 2 持っ る中 なし 2 てい 揺 10 捐 V n 0 7 る ス 3 金 ち ま ま小 西 西 林 \mathbb{H} 村 柳 由 早 宏 多 子 苗 香 一 名 月 久老い もう死 我 先 宵 時硝 歌 姬 祖 雨 子 P 耕 H Ш 振り では濡 を詩 0 引 笠 声 卆 か 田 を磨 知恵忘れ な引退 世紀 寿 水会議行 かい 鎖 んでいるのにゴキブリ叩 17 老人 世 良 0 0 友は 7 綴 話 n ま 抜 宇宙 12 走 と案内 会の意気盛 好 る勇気も出ぬ二人 晦 ま 0 男また上げ て初春 0 き 日 n 味 てた亡父の 0 上手になってゆく へどかんマイホ ば は たり戻ったり 犬 ましたと金メダ 覚が変わ を連 かり素 状を書 其処に居 を 待 ってた 寒 自 3 貧 負 か れる ル 4 石 堀 田 JII

口

虹

汀

侃

流

洞

端

男

余震七百 鳴動 神 リストラで帰郷し消えた森を知 内助とい 悪 天災が多く地球 1 老夫婦趣 自 ことわりや脆きものより倒壊す 知恵の 完全武装 無月六日 深 ってても風よけになる父の 友に会う楽しみ大会の笑顔 ス 画 雪ちらちら せに感謝 いては子に い傷を妻が覚えていて困る るま湯で迷路の出口見当らず は E 白 む羅漢も膚を温めあう 墓 ス 賛 0 標 う杖に歩調を合わせとく 味 賽の つく年齢 空転してたなと気付き の底と覚えたり 恋 二〇〇〇年も暮れ の違いも愚痴になる 家族と寝るも久しぶり 午 紅 0 されども治らない 河 後 葉の 語 の怒りかも 原 に法 0 りを今日 0 大震い 散 石積んで り急ぐ 0 ズ \$ 背 聞 る < 頑 固 八 舟 Sp 木 木 井 萬 与 T 明 萬 根 代 的 朗 臨死体験 しあ 窓を開 携帯 約束を果した秋が置 こころください幸福をあげるから 真心とちがう涙はこぼさな 二〇〇〇年納 聞 水引 津 冬の絵を飾ると雪が降ってくる 留守番で誰はば まだ 霧深し茶苑小路というところ 1 き役 軽 n シト 孤独 中とわ は便利 紀 b い旅を始 草 何年生きら せ 17 0 0 口 問 母 イメ 椅子 0 n 0 題 雪に恨みはないけれ 0 渡れぬ川が一つある 端を摑 ば聳 窓か やなア に かっています吞んでます 涙 で歯 なる世 1 8 める塔の 0) る灯が 一える塔 ら洩 ジ描くひたむきに からぬ酒を酌 n 静 痒 んで離さな ようが入歯替え かなり ・と思 れて来る孤 43 0 てあ 点 0 窓開ける 言 乱 う時 3 灯 葉 る 輝 尻 43 42 < 愁 土 野 波 宮 多 村 橋 \Box 野 太 Ŧi. 笛 茂 楽

庵

生

津

螢

老 一希 気 縁 後 秋 才 あっさり 人生だ急ぐことな U Vi 望 遺 報 深 々の 身上 0 1) くばくの たすらに 生を学び 8 b 痴 結 b 10 10 はず 付 か するように展 0 症 U レクロ n X 歳 0 てみ 家族見 2 の都合の訳 か 0 ゴ な夕日に 13 て た話は ーキブリ ٤ 質で 神 2 " 醜 れてさわ とお n スワ 7 余命ぞ好きな事 H 顔 Va 夜 1 ば 終 步 てい でサ 欲 1 向 更 ち 詣 今年も最下位タイガ 如 1 よそう燗が冷 を b がきに it 聞 は 開 1 8 1. V 明 7 3 る n か 一歩も譲 生 か 百 \$ 7 治 Vi 0 か 知 # 7 静 な運 夜が 失語 風を吸 を無視される あなどら 命 のう n X ル 日 WD か バドラマ 4 n b な 0 紅 0 す たり くり 1 動 更 秋 しよう 0 水 3 症 とく it 80 12 なり ٤ 3 景多 恒 1 野 藤 金 ス H 松 井 村 素 III. 文 郎 秋 紅 女 敬老の ちぎれ 潔く よい 金婚 力 老眼 酔 尻 美 お 白 E 贈 うるさくてかけ ふるさとを恋う じさまと言 L るとこにあって和めるベンチです ま X 思案浮ば 振 出 でも力んでも手 0 n 1 n しようと思う曼珠 を 12 忘れ 花一 n る は 7 たまるみにぬ 雲答は期待せ 額 結 涙 ル も踏 る男 球 男 流 2 父 な美 輪 に誰 てあ 1 力 あ L は ず 1) にくすぐら たシド を ま 畑 ぬ b げ 信 U 蜥 倖 がえなくて妻と言う n ザ 17 n = まわ る愛が 寄 なるほ 1 じよう ても 孫 蜴 せ V 才 里 を褒 < か 0 お だと思う ŋ ル 0 と言 よう 内 ŋ な 61 沙 前 0 あ お野 か 風 ておこう 1 羽 n 華 知 to どおじさま 3 X 根 か コ 対なり n スモスも ぶとん う 月 遠 玉 斉 置 原 Ш 宵 重 III

劦

住

明

結び目 歩は歩 ちっ もう 通 瞑 すぐ行け おつり銭 本の 僧汁 想 道 長 V 年 時 替 関 n カ 稿 ぼけ と威 間 に x 0 0 43 てもド 0 を越えた声 紙 少なり 女税 0 ラ 抜 中 待 お 3 0 な庭 世 计 ほ -でつぶ 3 中で お ちら 張 0 0 どけぬ てや 話 吏 毛 寄 顔 + コ くらとすぐに浮 図 n しく x 0 0 × 書 n なが ゆが で楽 b II かい り頼 打ち 聞 ント やく n 旅 42 出 価 館 ば 5 カ B か があ 話 6 北 0 会った待 1 値を比べ合う ように褒めておく h 1 第 も子に 80 F 欲 n 不 だ文字ば む 電 かい む 四季 ある しさ · 覚聞 つきも ウ は 0 話 n 朝 便 ル 持ってい 本 り来る 歩 渦 0 口 0 す 冷 ムチに 合室 かさ 0 虫 せず 花 頭 かい n n n (西安 る 3 芳 小 黒 5句 宗 JII 地 西 狸 雄 吟 村 平 17 ひとす 快眠 年 新 曼珠沙華敵 虫たちは嘘をつかずに鳴く 川 輸入米食うなと案 金 筋 人類 10 走 向 0 相 取 # りに 快食 17 0 ほどのことではないと靴をはく 撲 で恋して死など考えず n を持たずに生きる渡り鳥 道山 じの 7 あ 君に仕 U が が 7 出雲に頼らず結びつく なっ 歩け 孫だけ # Ŧi. 人だとり 眼 通 Щ ンズ て此 る北 + が のようにみなうた 0 て女にうそがな と歌 色変えて駈けてゆ に 年 えて今日の あり谷があ には イ偏も少しい Ė ふるさと思 の世も安泰だ 風 に ンゴ 不山子の が容赦 だっ に手を握 負 おしえら む 计 た 列 なく 6 n 10 b 7 n 続 ば る H n n n か Vi (南北朝鮮 る る n IE. 越 木 T. 村 藤 本 あ 水 吟 ŧ

水

笑

	****	****	**********	5485485485485485485485485	****
妻よりも先に逝きたし秋の風禁煙を解き節煙に切り替える禁煙を解き節煙に切り替えるがいまる。	口下手と言わせぬ妻の長電話禁煙を毎日誓うあしたから	昔から我が家は婦唱夫随なり売り言葉買ってむなしい風を抱くノラになる勇気がなくて振る尻尾	新世紀開き直って生きてやる脳すこし休めて秋の野を歩く	ー きている ウンター をとこの もている	散り惜しむバラの香りの中の人
	榎		JII	両	森
	本		島	Л	下
	吐		諷 云	洋	愛
	来		児	R	論
歯を削る音心臓によくひびき妻に押し切られることが増えてきた妻に押し切られることが増えてきたったりないがった。	食べたいと思う乳房が置いてある枯れている花の悩みを聞いてやる	死ぬことを考えながら桃の花十二月すらすら源氏物語捨てきれぬ宝を持っている乳房	老人会懐かしの歌が次々と年度末ここも道路工事中まな板の音から朝が明けて行き	む歌は軍歌大正子む歌は軍歌大正子	再入院お里帰りをしたみたい(前月分)
削る音心臓によくひびき室お喋りさんにつかまった押し切られることが増えてクロを真似たら風呂で筋違は大金持に憧れる		ぬことを考えながら桃の花二月すらすら源氏物語てきれぬ宝を持っている乳	懐かしの歌が次々とここも道路工事中の音から朝が明けて行	と退院仲よく手をつなぎと退院仲よく手をつなぎと退院仲よく手をつなぎなむ歌は軍歌大正子	入院お里帰りをしたみたい (前月分) 西
削る音心臓なった。	いてある	ぬことを考えながら桃の花二月すらすら源氏物語てきれぬ宝を持っている乳	懐かしの歌が次々とここも道路工事中	と退院仲よく手をつなぎいお喋り尻尾つかまれる四時点滴元気に手術待つ四時点滴元気に手術待つとお化粧されて棺の中くお化粧されて棺の中	入院お里帰りをしたみたい(前月分)
削る音心臓なった。	いてある	ぬことを考えながら桃の花二月すらすら源氏物語てきれぬ宝を持っている乳	懐かしの歌が次々との音から朝が明けて行き	と退院仲よく手をつなぎと退院仲よく手をつなぎと退院仲よく手をつなぎなむ歌は軍歌大正子	入院お里帰りをしたみたい (前月分) 西田

Ш 柳太平記 (271) Ш 柳 の 群 像 東

本名益田与一別号愛鄰。中国山陽道では著名な文筆家と知られ、郷土広島県の先人に関名な文筆家と知られ、郷土広島県の先人に関名な文筆家と知られ、郷土広島県の先人に関名。「ふあうすと」の相元紋太主幹が昭和32年初の来広を機に、同志十名と共に同誌同人に参加したが、折から四十台とあって川柳名を"意気旺盛"をもじって伊木篤生と名付けた事は、地元柳人間では誰知らぬものもないた事は、地元柳人間では誰知らぬものもないた事は、地元柳人間では誰知らぬものもないだ事は、地元柳人間では難知らぬものもないで、『ふあうすと5周年記念号』(昭5・5刊)誌上に"広島とのつながり"と題し次5刊)誌上に"広島とのつながり"と題し次5刊)誌上に"広島とのつながり"と題し次5刊)誌上に"広島とのつながり"と題し次の様に記している。

つまり彼は、紋太の人柄から仏徳を感得しの利いた方とみた。世に僧侶らしからぬ僧侶の利いた方とみた。世に僧侶らしからぬ僧侶の利いた方とみた。世に僧侶らしからぬ僧侶の利いた方とみた。世に僧侶らしからぬ僧侶の利いた方とみた。世に僧侶らしからぬ僧侶の利いた方とみた。世に僧侶らしからぬ僧侶の利いた方とみた。

信心を本としますと正信偈・クラもって不断煩悩正信偈・クートの一に信偈・クートの一に信偈・クートの一に言偈・クートの一に言偈・クートの一に言偈・クートの一に言偈・クートの一に言偈教えてくれた父恋し・紋太

藍の大和尚くらいに私の眼に映じた。風貌だして残った。法衣を纏わせたらひとかどの伽

紋太さんの風貌は、私に仏教者の風格と

変らないわが声続く正信偈 正信偈先祖代々ふとい地声

こころを徹底凝視した魂が、言葉となってがしみじみと私の間近な人に見えてきた。がしみじみと私の間近な人に見えてきた。がしみじみと私の間近な人に見えてきた。

ほとばしり出た和文の歎異抄。漢学の正信偈。

信心することの悲痛なまでの響きがこもって、誦む者の心を揺がさずにはおかぬ正信偈。 な知ったとき、急に新たな親近感を覚え、あの軽く、大きく何気ないように詠まれた紋太川柳が正信偈の世界から生まれたことに限りない懐かしざを覚えた。…以下略」

「広島は奇しくも"夢"の字のつく川柳家「広島は奇しくも"夢"の字のつく川柳家「屋夢村」である―との書き出しで、伊木鴬生屋夢村」である―との書き出しで、伊木鴬生屋夢村」である―との書き出して、伊木鴬生屋夢村」である―との書き出して、伊木賞を関いている。

したものである。
したものである。
になり、前著第四章の「芸備発刊されることになり、前著第四章の「芸備発刊されることになり、前著第四章の「芸備発刊されることになり、前著第四章の「芸備を刊きれることになり、前著第四章の「芸術を対したものである。

第生さんは我が広島川柳会の相談役であ 第生さんは我が広島川柳会の相談役であ 句眼と、独得のユーモラスな披講ぶりは有名。 いま拙宅の床の間に一幅の掛軸が懸けてあ る。列伯峯雅台碑除幕式記念として 古聖遥かに伝う川のほとりのおどろきを 長く万葉に遺す流れを欺くの歌を 神に刻す 見水 澄心の境

七秩の経途一幾たびの切磋ぞ

の漢詩七言絶句で益田愛鄰の署名がある。の漢詩七言絶句で益田愛鄰の署名がある。これは平成四年七月十一日、私の句碑除幕上で「賀誌装幅敬呈」の儀として賜ったものである。私には何よりの宝物であり、九十のである。私には何よりの宝物であり、九十のである。

小学生になられた鴬生さんの曾孫俊ちゃん 小学生になられた鴬生さんを呼んでいられる さん、一説のころから、べんきょうのおじいち は、三歳のころから、巻生さんを呼んでいられるとか、微笑ましい愛称と言えよう。この人ことが、微笑ましい愛称と言えよう。この曾孫俊ちゃん である。…以下略」

伊木鴬生は、平成5年3月16日肺梗塞で急 正の故人を追慕して、『川柳ひろしま』誌 正の故人を追慕して、『川柳ひろしま』誌 平成六年6月号は、伊木鴬生句碑建立記念特 集、を全巻いっぱいに賑やかにくり展げて る。開催日は同年4月16日で会場はしあわせ る。開催日は同年4月16日で会場はしあわせ る。開催日は同年4月16日で会場はしあわせ る。開催日は同年4月16日で会場はしあわせ る。開催日は同年4月16日で会場はしあわせ る。開催日は同年4月16日で会場はしあわせ を主が同誌の表紙は句碑紹介の大写真だ。 宇宙無限ならばとレンズ磨さます 鴬生 その本で伯峯主幹は次の建設余話を掲載—。 「鴬生さんの句碑裏面の建設者名は、広島 川柳会、ふあうすと広島ぐるうぷ、益田愛郷

> た▼清興として曾根鷺夕氏に漢詩朗詠をお願 重桜も七分咲きで初夏を思わせる好天であっ ス二台にガイドさん付で、他の自家用車組も は九二名。湯来句碑の山の往復は貸し切りバ を広島グランドホテルで開催されたのは同年 ことによる▲鴬生さんが急逝された平成5年 さんから賀詩装幅を祝賀大会の席上拝受した が鴬生句碑建立をひそかに心に誓ったのは平 城に石原伯峯が参列者を代表して行った。 カットは、小嫁夫人(故人代表)に去来川巨 加わり賑やかであった。▼句碑除幕のテープ 回の句碑協賛者数は二七一名で当日の参加者 具体化したのはこの日である▼以下要約一今 6月22日で当日の出席者は一七五名、建碑を 教養課が主唱して「益田与一先生を偲ぶ会 3月16日、この時決心した。広島県警察本部 成4年7月11日伯峯句碑除幕式に参列の鴬生

▼次号は「波部 白洋」

男の益田虔之氏のお礼の言葉が三頁にわたり

詳細な文、伊木鴬生生涯のエピソードを語り

た。今回の盛儀は益田家御寄贈のテレホンカで伴奏も呼吸のあったコンビで圧巻であっ

なお、この伊木鴬生句碑建立記念号には長ドの配布に盛られ祭事は万事好調だった。

いした。生前鴬生さんが絶賛されていた美声

先生を偲ぶ会の三団体名が彫刻してある▲私

誹風柳多留二四篇研究 24

清

177 くれの文口やくそくをはたるなり

はたる【徴る・債る】請求する。

博 佐

求める。また、取り立てる。徴収する(『大 場の限定までは不必要と思う。 くれの文四五百両も書って出し 同。しかし一般句(客観句)として、 安五仁5

清やはり吉原句

若女形實悪を妾つとめ

記」の武智光秀など。(『国語大辞典』) もの。「伽羅先代萩」の仁木弾正、「絵本太功 ることがない、終始一貫悪の気持に徹底する 敵役のうち、残忍で意志強く、後悔や変心す **粕谷** じつあく【実悪】は、歌舞伎の役柄で、

くれ(と無心している)文」即ち「呉れの文」

の洒落にもなっている。

くれのふみいやなきみだとふうを切り

くれのふみどうそく かぬけにあり

とを、妾も同じようにしている。

①若女形の扮する実悪のしているようなこ

本句の情景は、客が遊女からの無心状を見て

の口約束などを、文に盛り込み無心をする。

遊女も年の暮には金がいる。そこで、客と

用を何とか捻出しようとして、客へ送る無心 辞泉』)。「暮れの文」は、遊女が年越しの費

いるところ。また「くれのふみ」は、「(金を)

妾のことである。 ②若女形の扮する実悪とは、(役としての)

ていた。 ③妾になる前の商売は、若女形の実悪をし

女形しかも実悪である、と言うのだろうか。 ④素人芝居で妾に割り当てられた役は、若 礎稿としては、④説と考えている。

実悪を兼任する」とある。 乗っ取りをたくむ妾、美しい若女形のくせに 橋本 この句、『考証江戸歌舞伎』に、「お家 実あくをしあて、後の女房来る 天八麗?

しい娘や高貴な姫君に扮する役者であり、実 「扮する」といえば役者であり、若女形は美 ①「若女形の扮する実悪」には異論がある。

みをする」という意味。 のような美しい女だが、実悪のような悪だく 若女形」もありえない。この場合、「若女形 悪は演じない。当然男であり③「妾になる前、

清·佐藤 同右。

179 鼻からけぶを出しながらふいて出し

そのとき「鼻からも煙が出る」とは細かい観 後に雁首の掃除を兼ねて、逆方向に吹き出す。 粕谷 喫煙の光景。煙管を使う時は、一番最

58

さあ上ヶやしやうと鼻からけぶを出シ

着物の袖口で拭いて出した、というのであろ山田 「ふいて出し」は「拭いて出し」で、

、そ 這でしたよう。をできずらしたう。本当は拭かずにほしいのに……。

すのは、もてぬ客に対する態度。 ら煙を出しながら、しかもわざわざ拭いて出 り煙を出しながら、しかもわざわざ拭いて出

橋本 同右。吹くは、江戸語では、喫煙の場 き殻とは吸い殻である。

清 同。小栗説賛。

佐藤山田説賛。遊里句と判断できぬ。

18 ころしたもよこせバ薮医よい仕事

杜事をする、というような物騒な句か。が、殺しても構わないのだったら薮医もよいが、殺しても構わないのだったら薮医もよい

「寄越す」は、①先方から送ってくる。

182

一本の木立ヶ屋しきの名をひろめ

半ころしにしよ人ンへとやぶいにげ

安八義7

清・佐藤

②こちらへ渡す。(『小学館国語辞典』)
②こちらへ渡す。(『小学館国語辞典』)
は、治療費(薬代)は取らなかったのだろうは、治療費(薬代)は取らなかったのだろうか。そんなことはないと思う。

繁昌するだろうに、の意。 果は同じなので) 薮医の方へ回してくれれば、 果は同じなので) 薮医の方へ回してくれれば、 駄労解。普通の医者(薮医ではない)が診

清 橋本説のようなことかと思う。 数医の句は、患者を殺すのと貧乏が多い。

佐藤 大野説賛。

181 花てつき合て置たとそ引出し

場所方面である。と悪友が誘い出す。遊びとはむろん吉原・岡ってやるから、ちょっと遊びに行かないか」

いつ迄見てももみぢだとそ引くなり気ハありやなしやとす引角田川 明三二

安九仁2

粕谷 「一本の木立ち」とは「椎木」即ち 竹である。 「松浦家」よりも「椎木屋敷」の呼称が ら、「松浦家」よりも「椎木屋敷」の呼称が ら、「松浦家」よりも「椎木屋敷」の呼称が ら、「松浦家」よりも「椎木屋敷」の呼称が には「肝腎の屋敷が何様のであるか、 知らなかったろうと思われる」とあることか はである。

おれがしいの木ハきつう名高ひげな

しいの木の殿さまよりも名か高ししいの木壱本小だてに取た松浦、天三智し

安七叶ー

清·佐藤 賛。

窓長つぼね腹にたまらぬものを喰っ

粕谷 食べて腹に溜まらぬものは張形。「腹に溜まらぬ」を妊娠しないとまで考える「腹に溜まらぬ」とは「松茸もどき」の代用品に溜まらぬ」とは「松茸もどき」の代用品のは行き過ぎであろう。

伊吹説を懸ける。 標本 同。腹に溜まらぬは、満足感がないに、 と思う。

清·佐藤 同。

清·

秀句鑑賞

み上げる選者が多いように思います。 み上げる選者が多いように思います。 かし披講に際しての指導書は見当たらず、 しかし披講に際しての指導書は見当たらず、 場合も変格として定形に認められています。 場合も変格として定形に認められています。 場合も変格として定形に認められています。

#1.3f.17gまー票售店とも、 用させていただきますと 用させていただきますと

牛が眼をつむると=大平正芳かぽんぽんの嫁は=標準語を使い

等は、いずれも八・九のリズムで読むべきだ猪口を持つ手つき=恩師に似て来たり

共同作業であると考えています。 位置が変わると意味までかわってしまうこと 位置が変わると意味までかわってしまうこと す努力をしていると聞きます。アクセントの するからです。句は作者と披講する選者の があるからです。句は作者と でいると聞います。 でしていると

心を養いたいものです。

に接し自然に社会に接して、大きな響き合う

作句も鑑賞も心の出会いです。人に接し句

→11月号から 一以月号から 年尾緑良

地図にない山で遭難してしまう

少年の挑戦はいつも予想もできない形で始り当然のように失敗もあります。「若いかまり当然のように失敗もあります。「若いかまの当然のように失敗もあります。「若いかまのが戦はいつも予想もできない形で始まり当然のように

正論を背筋を伸ばし聞いている

信がつきました。 中居 善信

少子化が物干竿で揺れている

親の誇らしさが感じられます。出生率の低下で日本の百年後の人口は六千出生率の低下で日本の百年後の人口は六千出生率の低下で日本の百年後の人口は六千出生率の低下で日本の百年後の人口は六千出生率の低下で日本の百年後の人口は六千

検診でマルをもらってバラを買う

異常ありませんとの言葉に「今の健康な私にすが、結果が出るまでは少々不安もあります。大腸ガン・胃ガン・乳ガン等の検診がありまが行われています。基本検診のほか肺ガン・が行われています。基本検診の早期発見にと検診生活習慣病(成人病)の早期発見にと検診・生活習慣病(成人病)の早期発見にと検診・

七十の内緒ばなしは可愛らし

おめでとう

は、川 慶 子のれません。
立い耳は少し遠くなったが毎朝の情報交換が をしみです。内緒のはなしもあるようですが、 楽しみです。内緒のはなしもあるようですが、 楽しみです。内緒のはなしもあるようですが、 な構いなしの大声に、周囲の人々も思わずに お構いなしの大声に、周囲の人々も思わずに とがらずには居

点字打つ独りよがりの寂しさに

堀江正

ようか。寂しいと言わず楽しんでください。なりできます。今は朗読してテープに録音することが多いそうですが、点字には独特な温いでしょうか。座禅をして孤独の中で修行をか味があります。打つのは川柳でしょうか日か味があります。打つのは川柳でしょうか日か味があります。今は朗読してテープに録音すともできます。今は朗読してテープに録音すともできます。

家族ですおかしき祖母を咎めない

戸まさよ

高齢化社会に対応するために介護保険制度に冷たさは見せられません。

病院の屋上にある車椅子

田

能子

先ほどまで家族と静かな時を過ごしたので、先ほどまで家族と静かな時を過ごしたので

なりゆきで夜明けの海を眺めてる

ひとときでしょう。 で親は男の子と夜を徹して歩け」とありま 「父親は男の子と夜を徹して歩け」とありま が親は男の子と夜を徹して歩け」とありま

着想はあるが書けない私小説

どかしさがさらに思いをつのらせるのです。机に向かうと文章は何行も進まない。そのもったと誰もが思っていることでしょう。さてど自分が歩んできた道は決して平坦ではなかど自分史がブームだそうです。家族・会社な自分史がブームだそうです。家族・会社な事分史がブームだそうです。家族・会社な事ができた。

立ち食いの目の端におく時刻表

でなく、人生の時間表かもしれません。時間に追われながらの現代人にはあたりま

母の名は花子 ハ十六で逝く

政 岡 日枝子

でしょう。
でしょう。

鏡の中の他人が指示をして困る

る自分に苦笑。 澤田 千春 ではからまった顔をしながらほっとしていまわせる。困った顔をしながらほっとしていいながらもう一人の自分に都合の良い答えをいながらもう一人の自分に都合の良い答えを、 田 千春

この椅子もけってはならぬ宮仕え

福原 悦子 和織の中にいると自分を主張出来る機会は 組織の中にいると自分を主張出来る機会は 気楽に割り切っていても、自分が管理職にな 気楽に割り切っていても、自分が管理職にな ればさらに上からも命令が来るもの。宮仕え にはそれなりの苦労があります。 たとえ窓際 にはそれなりの苦労があります。 たとえ窓際 であれ大切に大切に

集団の鳩の統率力のなさ

をするのでしょうか。とするのでしょうか。ノーベル化学賞の白川英樹筑波大学名誉か。ノーベル化学賞の白川英樹筑波大学名誉か。ノーベル化学賞の白川英樹筑波大学名誉が。ノーベル化学賞の白川英樹筑波大学名誉が

心機一転万年筆を買いました

筆に憧れた訳を知りたいものです。 なく細く心を表現してくれます。 万年色を変えることで感情も表現できます。 アクす。 太く細く心を表現してくれます。 インクす。 本く細く心を表現してくれます。 インク

ぶらぶらと錦市場で秋を買う

りゆく季節を感じることができます。

市場には京野菜が揃っていて、旅人でさえ移

ことさら色合いが深いような気がします。錦

別府から母の携帯切れたまま

すぐ元気な声が聞こえてきます。か、しばらくそっとしておきましょう。もうほっと出来る湯の宿を見つけたのでしょう



河 内 選

今治 市 塩 路 よしみ

お月さん花火で火傷せぬように 10 せ Vi な犬はべ B 8 冷気さ ンツで美容院 b や か 秋 や秋

散 幸 石を抱く 影髪屋 の句 苔は夫婦 いに睡魔さそわれ 0 絆かも る

この 本 眠 りぐ すりが塗 0 てある 知

高

県

百

 \mathbb{H}

幸

嬉しく 栄光の過去は語 て自分で噂流 6 ぬ苦労人

聴 をかすめ めて通る良い話分で噂流したい

判 が 良すぎて仮面 はずせな V 浜

市

秋

元

和

口

十ジ 月の + > ス ケンを負けてやる î " に赤い羽根とまる 0 Ł

招 14 待をされ憤懣を聞 E 円しみじみ見られ仕舞わ 出会うと小銭減っていく かされ 3 れる

たる軍人恩給またとどく

自立心 介護保険払うが世話にならぬ気 民生委員が吹き込んだ 0

人生の余白か無為の昨日住民と不法駐車が急増中 昨日今日

梗 塞かとぼけ てるのか わか B 京都市 ない

脳

人間 年に 0 来ない なった松ぼっく ところで生む 的に なっ 卵 た

真定

0

お

尻 四角に座る男は重すぎる か 6 火の 出ることのないように

たら 10 から波 重 10 **扉がそっと開** に富んだ旅でした

鳥取

市

H

賀

八千代

出 笑

会

0

繋ぐ手がやっ この 旅の ながらやっと虹 終り花園だと信 瀾 と馴 染 んで夫婦 捆 む 元です

豊中 市 2

3

わきみ

Ш 本

礫

— 62 —

ヨーロッパ トイレ騒動して帰り花のパリみそラーメンの列につくやむを得ず妻と腕組むシャンゼリゼイタリヤの八十八ヶ所詣でかな十二時間 全日空の捕虜となり	半世紀 苦しいことも遠くなり 一畳もあればいいのに欲が出る 一畳もあればいいのに欲が出る がきなことさせてあげてと医者が言う好きなことさせてあげてと医者が言う	心の病と断罪されちゃ浮かばれぬ 弱点が見えて親近感を持ち ごめんねが言えれば別れずに済んだ であれるが言えれば別れずに済んだ である。 である。 の病と断罪されちゃ浮かばれぬ になれば、 になれ	紅葉も裸一貫から始め が心まるめるように餅をもみ が心まるめるように餅をもみ 孫の無理音痴の僕を歌わせる	奈良県
	桑	福	猪	古手川
	名	永	Щ	Щ
	孝	ひか	由 美 子	
	雄	ŋ	字	光
跳ぶべきか踏み入るべきか水溜り展まの砂を抉って潮が引く足裏の砂を抉って潮が引く足裏の砂を抉って潮が引く	大感の思い島を去る人残る人 今治市 渡 邊所の思い島を去る人残る人 ではないが女将はチャーミング がったいかがないがないががある人	楷書から行書になって来た私 を	大阪市 中 井河の大阪市 中 井でまくらになって出てきた人間味 リストラで静かになった労働歌 リストラで静かになった労働歌	北九州市 岡 田

津軽三味弾く現代っ子の茶髪リストラを思うと子供など産めぬ負の連鎖構図が社会狂わせる負の連鎖構図が社会狂わせる	手の平へ人を静かに書いてのむ 赤い服喜寿を明るく暮らそうよ 赤い服喜寿を明るく暮らそうよ 赤い服喜寿を明るく暮らそうよ	シドニーの夢をアテネにバトンする字宙から見れば国境線がない手がら見れば国境線がないが温かいがいがらいが温がないがないがられば国境線がないが高がないがある。	でっしりの実り待ってるコンバイン 生涯の実りの時と思う古希 生涯の実りの時と思う古希 ・ でしい仕事幸せとも思う	今治市
	黒	野	越	中
	田	村	智	村
	茂	清	青	好
	代	美	囊	恵
看護婦に叱られている温かさやく末を思うて親は馬鹿になるやく末を思うて親は馬鹿になるので、を思うて親は馬鹿になる。	音も無く零れる花に秋深む 香川県 瀧 井 勝るの陰の汗に応えてくれた菊 香川県 瀧 井 勝	常識の思考回路が断ち切れぬ常識の思考回路が断ち切れぬ	を桜の紅一点となった過疎 特たされる灰皿のない応接間 紫が好きな女の情の濃さ ブランコがゆれなくなった幼友	高知県 近 森 功

中かで美人ぶらないとこが好きやかで美人ぶらないとこが好きやかで美人ぶらないとこが好きやかで美人ぶらないとこが好きされる新語往き交う通学路で、スまで残り火消さず待っているがられて浮きたつ足を掬われるを取ったリンゴがぶりとポーズ取りが知ったリンゴがぶりとポーズ取りがカイスまで残り火消さず待っているがいり出来ぬべルの音目の歯車朝の笑顔からがコ切れ灰皿あさる朝の父当の私に見えぬ厚化粧野田市粉ではすかくし紅生を巻きもどしたい古ビデオ生を巻きもどしたい古ビデオ	が落ち着かず宇部市中
島 見 山	H
雅た清	忠
子 之 子	夫
強情な奴だと笑う影法師 善人がいつもサカナになるのれん アツアツの旬のサンマで酌むのれん アツアツの旬のサンマで酌むのれん アツアツの旬のサンマで酌むのれん アツアツの旬のサンマで酌むのれん アツアツの旬のサンマで酌むのれん アツアツの旬のサンマで酌むのれん 一票となれば俺でも役に立つ 第の一人が欠けて酒淋し 忘れものするまい傘も持たず出る だールかけ勿体ないがおもしろい だールかけの体ないがおもしろい だールかけの体ないがおもしろい を存寿えらいこっちゃと思うてます 様でもいられる夏がまた恋し 仏壇の前が落ち着く歳になり 目の前の御馳走眺め祝辞聞く	名月やむかし話をする夫婦 日立市
福 湊 高	加
士	藤
ト 修 不	権
* 水 二	悟

記念品だから使えぬ物も持ち	ラッパ飲み時代に合った味がする	適量は気分次第で変えられる	孫自慢する友人がまた増える	お互いに罪ほろぼしのフルムーン	横浜市 長	ピカソの絵モデルは私だったとは	炊き込みの中で松茸いばってる	誉めながら醬油かけてる夫と居る	死ぬ覚悟ないが備えもない私	手話講座終えて主婦連姦しい	横浜市 巖	宝石に女の吐息考古展	うまそうなレシピ張られたままの壁	孫ならば呼ばれてもいいおばあちゃん	不揃いの実り見せ合う有機農	スーパーで鉢合わせするあっぱっぱ	横浜市 保	屍を並べ国境線を引く	リストラの辻に首欠け地蔵さん	葬式は陽気にやれと遺言書	句の浮かぶトイレ風呂場にメモを置く	テロップも揺れてるテレビ震度6	札幌市 三
					島						田						田						浦
					亜希子						かず						絹						強
					子						ず枝						子						-
ねじ式の時計を探す電池切れ	夏バテに効くかも知れぬ風邪薬	アテネまでまた頑張ろう老い二人	二千円以上買います駐車券	援助好き国の福祉は後回し	横浜市	愛誓う心の年齢を老けさせず	タクシーで娘の演奏に間に合わせ	先着の何名様にすべり込み	年寄りはトイレタイムが待ち遠し	御先祖のルーツしばらくきかされる	横浜市	集まれば介護の話 知恵もらう	お見舞は軽く便利なのし袋	カタカナ語 子には聞けずに電子辞書	飾らない友になんでも打ち明ける	末の子の妻 隅っこが指定席	横浜市	慣らされて行方も追わぬ消費税	常識をお人好しだと娘の尺度	父と子の言葉少ない月見酒	夏越えた少年の目と力瘤	遠い日はなぞられかすむのは昨日	横浜市
					金						豊						Ш						Ξ
					森						田						梨						村
					徳						羊						雅						八重子
					三						子						子						子
										-	- 6	66 -	-										

朝市でお国訛りも買って来る優きなれた靴が気楽な旅にする一病が禁煙させてくれました人の猫は福笑い	タイトルは何にしようか懺悔録 タイトルは何にしようか懺悔録 タイトルは何にしようか懺悔録	円の化粧ひきたつ笑顔もつれどりは介助の根気試されるハビリは介助の根気試されるオリンピッの音に杖つく足が弾みだすの音に杖つく足が弾みだすの音に杖つく足が弾みだすの音に杖つく足が弾みだすの音に杖つく足が弾みだす	市福田田由	横浜市 川 島 良
	子	子	美	子
用書きに 一番きんが おもんが	履褒可脳妻 きめ愛のの	善お着薬借しせ飾だ金	目参体一冷	
用件が終ってからが長電話書きにくい予定 暦にマークだけ定年後のさばり出した山の神定年後のさばり出した山の神	では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、	悪しを言った噂に羽が生えった服に少食強いられるった服に少食強いられると思って励む万歩計と思ってのないが生え	北	横浜市 田 中
終ってかれるながります。	浜 義	悪しを言った噂に羽が生えった服に少食強いられるった服に少食強いられると思って励む万歩計	着かず 横浜市 北 沢	浜市 田 中
終ってかれるながります。	浜 義	悪しを言った噂に羽が生えった服に少食強いられるった服に少食強いられると思って励む万歩計と思ってのないが生え	着かず着かず 北 沢 街	浜市 田

百日紅咲いて侘びしい無住寺朝焼けの裏切りにあう旱続き	意地張って未練心を抱く女	干拓中止 鯊がようやく喋りだす	もう一度生きたいバイオテクノロジー	安来市 原 煩 悩 児	おやこんな奥に駄菓子屋貸本屋	ワープロをやめて自筆で頼みごと	長考の扇子しじまを刻む音	ただ駆けるために生まれた血統馬	大陸の孤児に日本は遠い国	八王子市 井 上 京一郎	ヒット曲急に観客騒ぎ出す	肉づいて貫禄だけがついている	頼られても一度夢を見たくなり	苦労した人なの質素で美しい	へそくりの底が抜けてる旅仕度	東京都 清 原 悦 子	どこからか金木犀だ深呼吸	憧れの庭つき買って悩む草	コスモスの自由自在の秋の詩	剣花坊慕う集いの建長寺	家の前クシャミ二つが通り過ぎ	横浜市伊藤ふみ
従順に老いて流れの中にいる 秋本番予定あふれるカレンダー	満月へ虫集まってコンサート	人前は声を落して子を叱る	鼻歌で煮しめぐつぐつ秋の音	島根県 多々納 テル子	髭剃って老斑の顔日に当てる	両隣に挾まれ息が抜かれない	怒ったら嚙みついてくる家の犬	伴侶との歩幅が少しずつ狂う	竹すだれいつ外すかで妻と揉め	益田市 岡 田 たけを	夕焼けに酔っぱらい雲 千鳥足	惜しいことピチピチ肌がガングロだ	大ホール長口上に咳もなし	野菜料理嫁の工夫がうれしい日	新妻がもう始めてる調教語	松江市 小 川 注 湖	掛け違いボタンが一つ淋しそう	母の鍋飢えた心も温める	指切りで小さな愛を確かめる	衝動買い今日は眺めるだけにする	不安ですさっぱりよめぬ地の怒り	出雲市 伊 藤 玲 子

ともかくも正論だから挙手をする	おみやげが一つ余って誤解され	冗談に包み本音を言ってみる	鮮やかな語りで嘘に気付かない	大敗で自信がもとに戻らない	鳥取市 田 村	屋根の棟総なめ崩す大地震	新米が友から届く生かされる	淋しさを忘れたいから文をかく	食べて寝るただそれだけがむつかしい	七十だまだ七十と言いきかす	米子市 小 塩	年の功なんて言われていい気分	出欠は連れの顔ぶれ聞いてから	子の為に下げる頭の軽いこと	以心伝心会いたい時にやって来る	夫婦だなあまさかの時は肩を持ち	島根県武島	落葉焚く無風の空へ無に還る	水道管よおまえも脆くなったのか	本棚に他人の自分史積んである	公園で仕入れた話風に乗り	ケイタイが孫子の数ほどあるという	島根県福間
					邦						智						ち						博
					昭						加恵						ちよえ						利
恋人のように柳誌を待った日々	りんどうと萩を手向けて墓洗う	惰眠して感性少し鈍くなる	街角に落ちた火種が拡がった	太鼓判押され心音確かめる	鳥取市 録 沢 風 花	ばあちゃんにそっと話した僕の恋	そっとしておけば良いのに口滑る	倦怠期言葉尖らす情けなさ	酔っ払う夫を愛しむ年となり	大地揺れ自然の重さ嚙み締める	鳥取市 横 田 春 名	保育器を父だ母似だ覗かれる	食欲にブレーキかける皮下脂肪	味噌汁と御飯のこころ忘れてる	引越しに本の重さを小分けする	風邪癒えて子もわがままを叱られる	鳥取市 有 沢 せつ子	オリンピックが済んでテレビもホッとする	目標の色とは違う銅メダル	シンクロも負けてはいない銀メダル	めちゃ悔しがることなんかない銀メダル	やわらちゃんやったね遂に金メダル	鳥取市 近 藤 秋 星

涼しさが早くも炬燵ほしい夜霜が降りおでんが美味い夕の膳霜が降りおでんが美味い夕の膳まく晴れて栗飯美味い十三夜	はいれば はい はい はい はい はい はい はい に 戻る 勇気 が とい に 戻る 勇気 が がい 過ぎて かい 過ぎて かい 過ぎて かい はい はい かい	かとう三回言うて床につがとう三回言うて床についたが通う垣根越し	窓を開すうきうき払う身のまこり窓を開すうきうき払う身のまこり高販市 山 宮 愛 恵気を楽に人生野暮で送ろうか点を楽に人生野暮で送ろうか点を楽に人生野暮で送ろうかごめんねで済まぬ世間の風当り	鳥取市 岡 田 信 恵
近の音が透明になる忌の流れお届先を忘れてる昏れ頭脳石垣に華を咲かせた城古び	園虫と鬼ごっこ がらがる露天畑にいやされが り香る花が	への 嫁 する	不用品売って以たもの買って来る 鳥取県 鳥 羽 玲 子奈碗持ち蠅一匹と睨みあう 奈えをこっそり知らす万歩計 生祖から同じ星見て田を守る 鳥取県 鳥 羽 玲 子 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一	鳥取県平井栄翁

特養で延長戦を生きる祖母	もう恋はめんどうくさい筈だった	右に同じホントにそれでいいのかい	信号に全部かかった日が暮れる	電池チェッカー二人の仲はどうかしら	岡山市 大	他人から見れば小さな悩み事	親も子も悩んでこえた反抗期	名前負けしたのか少年Aとなり	審判も人がするから面白い	長生きへ付いてはなれぬ悩み事	岡山市 清	二〇〇〇年最後に鳥取大地震	仏前に紫式部の花供え	時代げきテレビ遺影の方に向け	新リンゴ名前 紅夏と可愛らし	梨の木の親木百年無事という	鳥取県高	いい思い閂をして閉じ籠める	誘われるうちが華だと輪の中に	火の車作らず乗らず暮す老い	貧しいがポケットに愛溢れてる	意地頑固捨てれば僕になにもない	鳥取県西
					森						水						尾						沖
					純純						金						, ,						彰
					子						太郎						京						雄
人間の所為	審判は神	銀メダ	感涙	シド		坪	117																
所為だと熊が里に出る	仲ではないと銀は知り	グル方言も出る舌も出る	のメダルに本音迸る	- ニーに見せた女の美と力	尼崎市	一庭の土も近頃秋の色	愛憎の行きつくところ炎立つ	男ならはいさよならといきにくい	銀婚金婚 愛はだんだん薄味に	省略の利いた手紙に味がある	尼崎市	繕った笑い袋で二○○○年	太陽のいたずら晴雨片寄らせ	忘れたい想いと独り苦い酒	あなたとの恋の行方を月に問う	小面から炎える想いの溢れでる	岡山県	おみやげ屋円は強気で通ります	電話するにも時差があり葉書書く	みやげものまだかとバスが店につく	修道院へ歩く遍路のような群	メモ用紙忘れ手に書き汗で消え	倉敷市 #
が里に出	ではないと銀は知	ル方言も出る舌も出	メダルに本音迸	ニーに見せた女の	崎市 軸	庭の土も近頃秋	の行きつくところ炎立	男ならはいさよならといきにくい	婚金婚 愛はだんだん薄味	略の利い	崎市 松	った笑い袋で二〇〇	片寄ら	たい想いと独り苦い	なたとの恋の行方を月に問	面から炎える想いの溢れ	山県国	おみやげ屋円は強気で通ります	話するにも時差があり葉書書	のまだかとバスが店に	へ歩く遍路の	モ用紙忘れ手に書き汗で消	倉敷市 撰
が里に出	ではないと銀は知	ル方言も出る舌も出	メダルに本音迸	ニーに見せた女の	崎市 軸 丸	庭の土も近頃秋	の行きつくところ炎立	男ならはいさよならといきにくい	婚金婚 愛はだんだん薄味	略の利い	崎市 松 下	った笑い袋で二〇〇	片寄ら	たい想いと独り苦い	なたとの恋の行方を月に問	面から炎える想いの溢れ	山県国米	おみやげ屋円は強気で通ります	話するにも時差があり葉書書	のまだかとバスが店に	へ歩く遍路の	モ用紙忘れ手に書き汗で消	推
が里に出	ではないと銀は知	ル方言も出る舌も出	メダルに本音迸	ニーに見せた女の	崎市 軸	庭の土も近頃秋	の行きつくところ炎立	男ならはいさよならといきにくい	婚金婚 愛はだんだん薄味	略の利い	崎市 松	った笑い袋で二〇〇	片寄ら	たい想いと独り苦い	なたとの恋の行方を月に問	面から炎える想いの溢れ	山県国	おみやげ屋円は強気で通ります	話するにも時差があり葉書書	のまだかとバスが店に	へ歩く遍路の	モ用紙忘れ手に書き汗で消	市

白い髪ピンクの似合うご年配 朝に計画昼実が出の宿肩のこらない女といる 好きだよと書が固さをまるうつつんでいきている 耐えて今笑顔にお欲しい哲学もったおえら方 老いの身に大!国のつけ小さい肩も担ってる 喜寿すぎて古	O (関) にしてナース 子狐 O (関) にしてナース 子狐 O (関) 国の大学 子狐 A (関) にしてナース 子狐 A (関) にしてナース 子狐 A (関) にしてナース ・	での打つ白装束がちぎれそう での打つ白装束がちぎれそう 一番星夕陽の空は眩しかろ 一番星夕陽の空は眩しかろ 変したりき幽いでは眩しかろ 変したりき幽いでは眩しかろ 変したりき幽いではないる鼓動 変したりき幽いではあたった。 変したりき幽いではない。 変したりき幽いではない。 変したりき幽いではない。 変したりき幽いではない。 変したりき幽いではない。 変したりき幽いではない。 変したりき幽いではない。 変したりき幽いではない。 変したりきぬいではない。	事からのスローカーブを打ち倦む子のかりと口が滑ってから孤独軽くした指切の軽に多弁にさせる小豆粥軽くした指切の軽屋のラッパ夕闇連れてくる
朝に計画昼実行で夜反省耐えて今笑顔ほころぶ喜寿の秋村きだよと書けず敬具でしめくくりがきだよと書けず敬具でしめくくりをいの身に大河の望み胸に秘め老いの身に大河の望み胸に秘め	歌する古	眠ってた酒蔵起こす楽器の音をひちりき幽明分ける音を出すをひちりき幽明分ける音を出すをしば見て非常袋を改める	ころんでも転んでも立つ一歳児軽くした指切り針を飲まされる時にの丸貼って応援歌ほったに日の丸貼って応援歌
7	市	木	福
	広	村	重

そこまでやるか郵便局が米を売る	秋茄子の漬物嫁が出しに来る	ぼけ防止などと子供等こき使い	足腰が弱く徘徊出来ません	長生きの手相子等には言うてない	和歌山県 坂 東 和	実るまで守ってくれる栗の毬	祭の火消え束の間の恋終わる	人脈の川に私も流される	幅広の私 小さく生きる日も	孫の掌がふんわり川の字になって	和歌山県 杉 山 精	新しい世紀十年手帳買う	躍る虫 働く虫も消える冬	父ははに同じ小言を聞く息子	おまじない母には医療ミスがない	深層水涸れたハートに注いでる	和歌山市 土 屋 起	会心の笑みを見せてる赤い薔薇	夜を徹し月下美人へ吞み明かす	スパイスを効かし噂が舞っている	アロマセラピー静かにブーム香り立つ	生きている限り他山の石とする	和歌山市 武 本
					代						子						世子						碧
無雑作に飲むストローの曲げた首	おしゃべりを乗せて田舎のバスがゆく	オクターブ上げて電話を受ける妻	モーニングコールを聞いた夢うつつ	合いの手が祭りばやしを弾ませる	高槻市 左右田 泰 雄	虫嫌い夢で蛾を食べうなされる	写真の背 私に老いを認めさせ	告げ口は夫の耳のみ平和なり	フムフムと聞くだけの夫それで良し	食べ物も医療も不信でも長寿	高槻市 大 崎 侑 子	うるう年オリンピックに堪能し	短命という占いも還暦に	保険屋もグルと当て逃げ知らされる	反抗も一つのエール伸び盛り	風の精 君もいたずら好きだなあ	和歌山県 中 村 君 枝	殺されるわけではないと耐えている	おはぎ大好きがっちり肥えた孫である	村捨てる勇気もなくて長い道	死んだ日のためにそこそこ準備する	曼珠沙華あっというまに消えている	和歌山県 森 下 順 子

温もりの声が支えのボランティア	暖房の部屋で家計簿冷えてます	電話口元気よと言う風邪の声	着ぶくれて回転ドア肩で押す	どの顔で行くか鏡と相談す	八尾市	弱点を認めて肩の荷を下ろす	触っても造花に見えぬ造花です	お互いに貸し借りのあるいいご縁	灯籠がガーデニングに異を唱え	一ランク上の願いで良しとする	豊中市	がまぐちに縁起の五円母くれる	十七歳命の尊さ語り合う	可愛らし祖母は素直に惚けてゆく	蓋とれば夢が弾ける五色豆	母の愛いっぱい詰めた花小鉢	吹田市	独りゆくうまいグルメに出合う旅	パチンコ屋お絞り配り機嫌とり	奇麗事言う奴裏で手を汚し	早起きの秘訣は早寝する事さ	百歳の語録人生重味あり	高槻市
					田						江						後						乙
					中						見						藤						倉
					トシ												志津						武
					エ						清						香						史
心ブラは疲れ	マニキュア	カレンダー	吾が生家住	蒟蒻の味		旧交を八	似んでもい	漱石も鈴	母の肩	孫が来		不況何	衣着で	風鈴も	米余り	家々の		赤ちゃ	一寸いつ	秋ふかん	乗り物も	スポーツ	
心ブラは疲れますねと老い二人	マニキュアとメダルが光る表彰台	-後三枚も恙無く	吾が生家住む人もなく柿熟れる	みる顔でつまみ食い	東大阪市	交を八十円で温める	いい頑固だけが親ゆずり	石も諭吉もみんな孫が好き	肩ほぐす言葉はありがとう	が来て体の螺子を外される	八尾市	不況何処空港駅の列長し	て坊さんバイク鉄カブト	風鈴もそろそろ家に入りたし	米余りみずほの稲も牛のえさ	家々のともしび消えて十三夜	八尾市	赤ちゃんの爪は小さな桜貝	一寸いっぱい木綿豆腐がおどってる	秋ふかく案山子ふて寝の畔枕	乗り物も窓際いやなお父さん	-ツの秋 国会綱引きばかりして	八尾市
ますねと老い二人	とメダルが光る表彰台	後三枚も恙無	丘む人もなく柿熟れる		大阪	十円で温める	い頑固だけが親ゆ	調吉もみんな孫が好き	ほぐす言葉はありがとう	て体の螺子を外される	八尾市 山	四処空港駅の列長し	坊さんバイク鉄カブト	そろそろ家に入りたし	みずほの稲も牛のえさ	ともしび消えて十三夜	八尾市 高	んの爪は小さな桜貝	ぱい木綿豆腐がおどってる	〜案山子ふて寝の畔枕	の窓際いやなお父さん	国会綱引きばかりし	八尾市 中
ますねと老い二人	とメダルが光る表彰台	後三枚も恙無	丘む人もなく柿熟れる		大阪市	十円で温める	い頑固だけが親ゆ	調吉もみんな孫が好き	ほぐす言葉はありがとう	て体の螺子を外される	市	四処空港駅の列長し	坊さんバイク鉄カブト	そろそろ家に入りたし	みずほの稲も牛のえさ	ともしび消えて十三夜		んの爪は小さな桜貝	ぱい木綿豆腐がおどってる	〜案山子ふて寝の畔枕	窓際いやなお父さん	国会綱引きばかりし	
ますねと老い二人	とメダルが光る表彰台	後三枚も恙無	立む人もなく柿熟れる		大阪市 笠	十円で温める	い頑固だけが親ゆ	調吉もみんな孫が好き	はぐす言葉はありがとう	て体の螺子を外される	市山	『処空港駅の列長し	坊さんバイク鉄カブト	そろそろ家に入りたし	みずほの稲も牛のえさ	ともしび消えて十三夜	高	んの爪は小さな桜貝	ぱい木綿豆腐がおどってる	〜案山子ふて寝の畔枕	窓際いやなお父さん	国会綱引きばかりし	中

朝起きて花に挨拶気をもらういいことはそっと心の片隅に繰ちょうが行き先案内してくれる蝶ちょうが行き先案内してくれる	一言で一喜一憂する事もが一ゲンの茶碗かためて買うめし屋が一ゲンの茶碗かためて買うめし屋がらもの言う人のお節介まの時の傷まだ癒えず深む秋	七彩の夢を大事に老いている 生のひらのくすりが増えてゆく恐さずのひらのくすりが増えてゆく恐さずのと気軽に言える他人ごと	大前は幸せそうな顔をして ときめいてはんなり彩をとりもどす ときめいてはんなり彩をとりもどす ときめいてはんなり彩をとりもどす	東大阪市
岸		Щ	Щ	田
本		本	П	中
寿		た け し	信	美弥子
他 O 親 だんぷ	豊 終 両 流 うっ 作 電 手		子 ストレ を表行の	-
極暑去り地震列島秋深しのNの対決 景気ウェーブに親分に見せたいV2鷹の舞だんじりの茶髪テンション盛り上げれたりの茶をテンション盛り上げれた。	豊作も不作も困る米事情終電でうっかり慌て途中下車両手より口も動かす手内職両手より口も動かす手内職	河内長野市 を登えて美味しい晩ご飯 大根煮て腹の具合を整える 大根煮て腹の具合を整える 大根煮で腹の具合を整える	河内長野市ストレスを溜めないように行く花月南京豆 薬のように日に十粒 に十七 なるいしょうにがらなる	富田林市
-ブにの舞っているギャル御り上るギャル御	情中内楽手下職だ錠	長るる	で で 日とみかん狩り で 日とみかん狩り 本のように日に十粒 薬のように日に十粒 本のように日に十粒 で は かいように行く なる で は かいように の たいかん かん か	H
一河内長野市の舞の舞の	情中内楽手下職だ錠	長るるる	で母とみかん符り を留めないように行く花月 本のように日に十粒 本のように日に十粒 本のように日に十粒	田林市
一ブに 河内長野市 水るギャル御輿	情中内楽手下職だ錠	長るるる	河内長野市 木太久とからりで母とみかん狩り で母とみかん狩り	田林市 山

老いてから姉鮮やかな衣替え 科書引いて発見多し長き夜 辞書引いて発見多し長き夜 かの雨 信号待ちにあり余り	幸せの笑顔のままや彼岸花 かどけない少女に酷なドーピング あどけない少女に酷なドーピング あどけない少女に酷なドーピング	不器用に渡り歩いて根無し草 不器用に渡り歩いて根無し草	女性パワー オリンピックで花開く 女性パワー オリンピックで花開く 歌髪になったら赤い服着よう	河内長野市 印
	後	破	村	藤
	Ξ	仁	正	智
	三 代 子	緑	剛	子
拙宅を敬遠している二千円悪気無し供えてる間に期限切れ二十世紀梨に譲って暮れて行く不住が立ったが何もなかった日本なが立ったが何もなかった日	大阪市 伊 藤 博 仁 転んだ子一人の時は起きあがる な情は言葉の裏も読んでくれ なんだ子一人の時は起きあがる	大阪市 一 本 勇 太四色の歯ブラシ家にある平和四色の歯ブラシ家にある平和写をそっと飲んでる毒舌家質薬をそっと飲んでる毒舌家	大阪府 澤 田 和 重めほども年の離れた姉が逝き 大阪府 澤 田 和 重めほども年の離れた姉が逝き よく聞けば結局二人とも悪い	大阪狭山市 矢 野 梓

を近し大地は呼吸整える を近し大地は呼吸整える を近し大地は呼吸整える を近し大地は呼吸整える	大阪市を開いている。大阪市を開いている。大阪市を存に乗り換えカルチャーの梯子をは見せてやりたい渦の道をしまれる。大阪市が大変では、大阪市が大変では、大阪市が大変では、大阪市が大変では、大阪市が大変では、大阪市	次天へ冷茶召しませ盆の墓 山の家風を肴に友と酌む スーパーの蜆が湖を恋しがり 公衆電話睨みつけてる長ばなし 来年も着られますよう衣替え	大阪市では、大阪市であり、大阪市であり、 大阪市であり、 大阪市であり、 大阪市であり、 大阪市であり、 大阪市であり、 大阪市であり、 大阪市であり、 大阪市であり、 大阪市であり、 大阪市では、 大阪・大阪市では、 大阪市では、 大阪市では、 大阪市では、 大阪市では、 大阪市では、 大阪・大阪・大阪市では、 大阪市では、 大阪市では、 大阪市では、 大阪市では、 大阪・大阪・大阪・大阪・大阪・大阪・大阪・大阪・大阪・大阪・大阪・大阪・大阪・大	大阪市
	三	熊	星	中
	浦	代	野	澤
	千 津	菜	きらり	伽
	子	月	ŋ	羅
タクシーを仏と思う俄雨待つ事に慣らされディズニーランド出る特の事に慣らされディズニーランド出る特がき割り込んでくるバイキングではからいい。	大阪市 は かい は かい は かい は な は な は な は な は な は な は な な は な	大阪市・大阪市・大阪市・大阪市・大阪市・工人の芝居 妻の黒子は死ぬ日まで二人の芝居 妻の黒子は死ぬ日までは、はまだ今日のアクション見ておくない。	大阪市を表を呼ぶとかわりに猫が返事する。 様双子性格全然違います がアイコンを脱げば血流蘇る	大阪市・
\$	津	中れ	亀	中
	priling.	++	井	村
	守	村	#	
	なぎさ	叡 子	円女	忠敬

まいす と意見され ままりそう	りも過ぎれば息がついた出して失敗繰り返が当いと母の荷が届を眺めて友と長電話がラスかけて表情見には互いに触れぬ思を出して失敗繰り返ががいたとしては互いに触れぬ思いながらいと母の荷が届	紅	黄 公	崎崎	尾岩	大阪市 二歳のチンチン電車元気です(上町線百年)1歳のチンチン電車元気です(上町線百年)1歳のチンチン電車元気です(上町線百年)1歳のチンチン電車元気です(上町線百年)1歳一ル巴里もシスコもすぐ隣1メール巴里もシスコもすぐ隣1メール巴里もシスコもすぐ隣1メール巴里もシスコもすぐ隣1が高またも景気が揺れてきた大阪市 1、一大阪市 1、1、1、1、1、1、1、1、1、1、1、1、1、1、1、1、1、1、1、
しまな燗 りば高な欲 まいすせつ とすごさい まいす ぬか 意 はん まい で は な	とし風た いてりさ がぬり情お 電て乾走が つ思返見が かった 気が かった ままれる ままれる ままれる ままれる ままれる ままれる ままれる ままれ	新米が旨いと母の荷が届き ささやかに秋の御馳走栗ごはん 優勝のホークス祝い乾杯す 母さんもおしゃれしてよと意見さ 母さんもおしゃれしてよと意見さ 母さんもおしゃれしてよと意見さ 母さんもおしゃれしてよと意見さ 母さんもおしゃれしてよと意見さ 母さんもおしゃれしてよと意見さ お月を眺めて友と長電話 男気を出して失敗繰り返す 男気を出して失敗繰り返す 男気を出して失敗繰り返す ましよしと聞く気軽さが欲しくな おすましの味かしめり気ない慕情 国後は指呼の間なりて波高し 繁康の吊るされ無念いかばかり 早朝の勤行 下座にひとり趺坐 早朝の勤行 下座にひとり趺坐 ない訳がうまくいったか燗がつき お屋敷も長屋も秋の風になり お屋敷も長屋も秋の風になり		月 雪 紅 誠	五 深 黄 公 月 雪 紅 誠	矢 中 尾 岩 倉 崎 崎 崎 五 深 黄 公 月 雪 紅 誠

忘控病冷乗 て淋人やよ 神水煙た満 原E新百猫

大川 晩 翠 健康が私の趣味と妻が言う 学部市 藤 本 一 健康が私の趣味と妻が言う と	浦 田 本 江 き 扶 ま 和 ぬ 美 ち 代
・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・	き 扶 ま 和 A A A A A A A A A A A A A A A A A A
翠 学部市 藤 本 学部市 藤 本 健康が私の趣味と妻が言う 禁煙し社会の毒を一つ消す	ぬ美ち代
学部市 藤本学郎市 八田 (東河湾にて 2句) を関係であるというのでは、1000 を見せるのでは、1000 を見せる。 1000 を見せるのでは、1000 を見せる。 1000 を見むる。 1000 を見むる。 1000 を見むる。 1000 を見むる。 1	
(歴し社会の毒を一つ消す グリスト担けば議席付いてくる グリスト担けば議席付いてくる グリスト担けば議席付いてくる グリスト担けば議席付いてくる グリスト担けば議席付いてくる がしてを残暑見舞いで元気づけ 色より人人人の上高地 罪を不遜にさせるカタカナ語 罪を不遜にさせるカタカナ語 戦の遺影微笑む日章旗(シドニーオリンピック 2句) ンクロの他人同士であの呼吸 上山がちょっとだけよと顔を見せ 横浜市 生 坂 横浜市 生 坂 横浜市 生 坂 横浜市 生 坂 横浜市 生 坂 で長ボトル空けさす虫の声 を長ボトル空けさす虫の声 を長ボトル空けさす虫の声 を長ボトル空けさす虫の声 を長ボトル空けさす虫の声 を長ボトル空けさす虫の声	
世 信 子 和 規	原が私の趣味と妻が言う 人の制限越える歳となる 人の制限越える歳となる 様はてを残暑見舞いで元気づけ 色より人人人の上高地 事を不遜にさせるカタカナ語 戦の遺影微笑む日章旗(シドニーオリンピック 上山がちょっとだけよと顔を見せ を長ボトル空けさす虫の声 を長ボトル空けさす虫の声 を長ボトル空けさす虫の声 を長ボトル空けさす虫の声 をくれる夜毎の夢まくら

約束を受話器置くまで覚えてる花形の葛菓子守る三代目したの子でも私達の自信作	しつ思語には	曽まれてすくすく育つ肖費兇受付の笑顔に惹かれ物尋ね受僧は座敷狭しと経唱え	磨きかけまんなは私に勝負する	て薄い頭髪子に詫びる	口答え言いそうになり深呼吸百円の老眼鏡をあちこちに	柏原市	と真面目がけない本気のダイエ	目立たない場所へと移る貯金箱振り向きそうなので笑顔を用意する	二重県	刈田見る農婦の姿満足げ 本替えしたのに夏日舞い戻り 地震 豪雨 手加減せずにやってくる	
	上		田			永			尾		Ξ
	村		中			浜			崎		宅
	季世		賢			加油					満
	恵		治			津子			勤		子
土曜日も日曜もない洗濯機御酌してくれたりしない下戸の相酌してくれたりしない下戸の	こうここと 人族えるまでとこと 人族え	尽きるまでとことん然えた單した赤いタスキに絣が似合う城下町親しみが心に触れるくに訛内気な子仲間外れになる怖さ	まちれひた雨 電を先導に 松山	定 知ったかぶりが口も	深悩み妻には軽くいなされる若い母バス見送って長話	和歌山	に無我その	人類の未来宇宙で月見酒 微笑かえして仏の思想真似てみた	田辺	初だった二十の愛の恋懺悔秋空へ児童の歌に心澄む、と斑の増えてく母の手は宝	
妻	娘 /	'n	帯			匪			市		
妻		ì	市			県村			市大		市
妻	安	ì	市山			村			大		市堂
妻		ì	市								市

たぎれ雲 明日はどこの空に浮く 特つ人が居るからたい焼き買ってくる 何となくインスタントが胃にこたえ 何となくインスタントが胃にこたえ 再生を信じて抜毛いとおしむ 向日葵は天下をとったように咲き 友来たる新宗教の勧誘に		を達とゆっくり眺める青い海島根県 持田 の は は は は は は は は は は は は は は は は は は	出雲市 栂 に震度五にごちそう喉を逆流し 無年の毛染めブームに乗りおくれ 無年の毛染めブームに乗りおくれ れ 浦 田満は平等ですと米を研ぐ
みち	かつ	多輝	ミ ツ
ち 子	子	子	エーテ
敬老と言いつつ税の重い事 心配性次つぎとねた湧いてくる さいころが運命線を転びおつ 経あげて心のすきま埋めている 信頼が二人の熱を冷まさない 急浮上ITの風騒がしい おみやげのことも忘れて気楽旅 おみやげのことも忘れて気楽旅	大き目の鞄に詰めた旅日記 関染めてやがて大山雪化粧 原染めてやがて大山雪化粧 点滴の窓へひょっこり伯耆富士	・・ボン玉口とがらせてそっと吹き竜の年マグマ竜巻また地震 噴霧器を使用してない自然食 一匹の金魚すくって五匹買う	健康に感謝をしたい虫歯なし 旅に出て口がとってもよく動く 旅に出て口がとってもよく動く
福	谷	猪	西 大
島	岡	森	脇 下
庸	清	スミヱ	日 出
			H1

類づえをついて家計簿見つめてる 熱烈なファン諭吉を首にかけ 中座した後の会話が気にかかり 中座した後の会話が気にかかり 鳥取県	衣替えお礼言いつつしまい込む 老夫婦夫が手をひく散歩道 十五夜の月を拝めば夫に見え 傘寿過ぎ米寿へ欲の夢を持ち 傘寿過ぎ米寿へ欲の夢を持ち 幸福を実感できる実る秋 ・なしめてうれしい実感金メダル	孫盾に親不孝者金せぶる 孫たちの勧進元は爺と婆 好た宮ご利益授くと思われず	原取市 無礼講酒に手足が踊らされ 無礼講酒に手足が踊らされ が城は強気な妻の意のままだ をできるといの意気	Z
Ш	宮	山	西	可
下	脇	П	尾田	H
節	道	千	敬 之 介	り
子	子	代子	之介代	t
を	表いて知る笛の音色の強 送いて知る笛の音色の強 逆らえぬ大河の一滴の命 がいて知る笛の音色の強 が次し 新円の水にも自我が欲し が次し	真後ろのうるさい人が気晴らしに出てストレ気晴らしに出てストレ	あの席で喋っていたに嚙まれがよう	
月うれし 別の とい と に と に と に と に と に と に と に と に と に	主来を歩きながらも電話する主来を歩きながらも電話する主来を歩きながらも電話する	のうるさい人が賞受ける ーを見れば全没やむを得ぬ とく知らず発起人 全く知らず発起人	に関する。 に傷は見せられぬ を傷は見せられぬ ならぬ犬がいる 鳥取県	急又是
月うれしテレビ越し、小遣い決められる小遣い決められる	音色の強弱よ音色の強弱よる () おが欲しかろう () の店が幕を引めた () の店が幕を引めた () の店が幕を引めた () では () で	賞受ける倉敷	葉がみつからた傷は見せらいおんなと距	
良い農婦です。八幡市内では、八幡市では、大路では、八幡市では、八幡市のでは、10~1~1~1~1~1~1~1~1~1~1~1~1~1~1~1~1~1~1~	音色の強弱よ音色の強弱よ 音色の強弱よ 一滴の命 の焦秋の旬 の店が幕を引く	賞受ける (責要ける (重要ける)	に 東がみつからぬ 葉がみつからぬ ならぬ犬がいる 鳥取県	下
月うれしテレビ越し 八幡市 粂 八遣い決められる	音色の強弱よ音色の強弱よ 音色の強弱よ 一滴の命 和が欲しかろう の魚秋の旬 の店が幕を引く	賞受ける 賞受ける 企敷市 森	に関する 生物の 生物の 生物の 生物の 生物の 生物の 生物の は見せられぬ ならぬ犬がいる 鳥取県 河 は見せられぬ	日田

夕焼けにトンボも真っ赤っ赤に燃えて秋なのに積ん読ばかり淋しいな	追伸のひとこと胸に消化不良	青春に戻る気がする朝のバス	宝塚市 飯 西 ミサヲ	ご馳走がしょげてる長い挨拶よ	汗をかくうまいビールが飲みたくて	不況時に本当ですかいい話	解体と響きが違う建てる音	神戸市 木 村 忠 義	傷の跡 戦傷と孫へ伝えとく	六ヶ月たって花咲く拾い物	妻病んでワイン仲間と憂さとばす	病妻に買う牛乳は低脂肪	姫路市 服 部 一 典	老いてなおセンスのよさにおどろいた	秋の山画布をひろげて呼んでいる	同居して嫁のやさしさ感謝する	同窓会話しながらも名を忘れ	川西市 田 中 喜 俊	お湯割りに素朴な梅がだす旨味	代替り卒塔婆に丸字かく御坊	天国を見たかのように説く御坊	立読みの横でつぶやく邪魔な客	川西市 井 本 清 山
友の通夜それから妻がやさしなるくり返す歴史に生きる老いの知恵	見とれてるこれもセクハラ言うのんか	人くったような顔すな屋根鴉	兵庫県 安 達 厚	みそ汁を作り一人の昼御飯	日本海岩に砕ける音が好き	すすきの穂おいでおいでと秋を呼ぶ	夕焼に夢ふくらまし感謝する	兵庫県 山 本 泰 子	刃物研ぎ切れ味見事催し場	賞もらい喜びあふれでるしぐさ	前の席人目気にせず顔つくる	講演の中味うなずき聞きほれる	兵庫県 黒 崎 美紗子	自惚れが強くストレス溜めている	水いらずの親子で一杯縄のれん	花作り僕より妻が優れてる	あれこれの目盛りに弱い老眼鏡	尼崎市 森 安 夢之助	豪傑笑いすると落ちそう総入れ歯	老いたとて素顔は見せぬ女です	独身を謡う独りの負け惜しみ	老妻の手は握れない惚れてても	尼崎市 尾 宮 弘 治

教育勅語命大事と書いてない天皇制元号新世紀には似合わない天皇制元号新世紀には似合わない謝罪せず内外迷惑掛けたまま	i i	てい冬どう越しましょうキリギリス を別花ひと枝挿してちさい秋 を別花ひと枝挿してちさい秋	引っ越した孫の温みが手に残り 外田市 須織の子のぶらんこ揺れて夕焼ける 無鈴が頑張る夜はよく眠る	もかも思	兵庫県 徳
月		吹	磨	宫	平
遊		尚	活	栄	毬
美		±	恵	子	子
蹴り 一匹な おいら	美一難安 し坪問住	茶コ友秋 髪スが暑	ま金凡い	イコ祝結	
のげてきちきちばった草の中2項固に残る金魚鉢 2項固に残る金魚鉢 から上の恋実る	い汗より勝るものはないが天にも地にも溢れだすが天にも地にも溢れだすの地は何処にあるはぐれ雲	来髪にも今はすっかり馴れさされ カスモスの園で一日話したい で 日話したい	大東市まっすぐに歩くことにも力要る金メダルそれから沁みる日章旗兄な家系 美人賢人出ず静かいい人は根が優しくて腰軽いいい人は根が優しくて腰軽い	ベストスと生み	枚方市
げてきちきちばった草の人の首から上の恋実るくの首から上の恋実る	汗より勝るものはない天にも地にも溢れだす、地は何処にあるはぐれ雲	も今はすっかり馴れる人工草カユを待たない人工草カユを待たない	大のすぐに歩くことにも力要るメダルそれから沁みる日章旗な家系 美人賢人出ず静かい人は根が優しくて腰軽い	ベントが大好き 夫は酒が好スモスが揺れて初恋想い出い花生けて我が家もあやか	枚方市 二
げてきちきちばった草の中頑固に残る金魚鉢くの首から上の恋実る八尾市	汗より勝るものはない天にも地にも溢れだす地は何処にあるはぐれ雲	も今はすっかり馴れる人工草カユを待たない人工草カユを待たない	大東市ですぐに歩くことにも力要るな家系 美人賢人出ず静かな家系 美人賢人出ず静か	ベントが大好き 夫は酒が好きスモスが揺れて初恋想い出すい花生けて我が家もあやかろう	枚方市 二 宮
げてきちきちばった草の中頑固に残る金魚鉢 (の首から上の恋実る	汗より勝るものはない天にも地にも溢れだす地は何処にあるはぐれ雲	も今はすっかり馴れさされく七草カユを待たないでく日話したいで 日話したい	大東市 井 上 すっすぐに歩くことにも力要るな家系 美人賢人出ず静かい人は根が優しくて腰軽い	ベントが大好き 夫は酒が好きい花生けて我が家もあやかろういだ生けて我が家もあやかろう	方市 二
げてきちきちばった草の中 頑固に残る金魚鉢 くの首から上の恋実る	汗より勝るものはない これ これ これにも地にも溢れだす 地は何処にあるはぐれ雲	も今はすっかり馴れさされく七草カユを待たないでくれずっかり馴れさされ	大東市 井 上っすぐに歩くことにも力要るな家系 美人賢人出ず静かい人は根が優しくて腰軽い	ベントが大好き 夫は酒が好きい花生けて我が家もあやかろういだ生けて我が家もあやかろう	方市 二 宮

枯山水に時々蛙鳴きに来る	ラピートで私一人九十歳	敬老に市長と写す裾模様	小婆と添書嬉し敬老日	泉佐野市	世紀末老いにさほどの変りなし	答でぬ時仏壇に問うてみる	相応という生き方と老い方と	修身で大人になった倫理観	泉佐野市	恋はすれど恋愛のこと知らぬまま	勝ち運を強くなったと自惚れる	遺言の仕方新聞のご親切	ふつふつと滾るものあり星仰ぐ	和泉市	大臣も靖国参拝気兼ねして	掃除機に叩き起こされ定休日	車椅子押す手も疾うに古稀を過ぎ	何度読んでも理解の出来ぬ介護法	羽曳野市	後が無い自民くり出す選挙法	昼ご飯チンのメニューがぐんと増え	ドーピング五輪旗に吹くつむじ風	へそくりが欠伸している株不況	羽曳野市
				大					稲					小					森					永
				工					葉					坂					田					田
				静										凡					四三郎					章
				子					洋					英					郎					司
いの	L																							
のちと酒 秤にかけて少し飲む	上げた拳 孫の笑顔に下ろせない	留守電に芋を送ると母の声	老いた耳冬に激しい蟬しぐれ	大阪市 奥 廿	またひとり儚く消えるアドレス帳	ぴったりと合う筈がなしもと他人	ひまわりが屋根を見守るように咲き	紅葉の明日を見ている石仏	大阪市 小 点	故郷の今は無き川夢に見る	白衣見て心安らぐ日々になれ	岩山を沁みて流れる美味い水(小豆島にて)	幼き日覚えし母の味恋し	大阪市 筒 自	愛し合う夫婦ですけどグチ多し	異常なしの再検胸をなで下ろす	うちに嫁 運よくいい娘来てくれた	孫とする指切り嘘は言えません	大阪府 東	ITの時代と言えど易に凝り	松喰い虫あの大木も立ち枯れて	身の丈を詰めて年金マイペース	ロボット犬第九を歌うミレニアム	大阪府 前 日
	上げた拳 孫の笑顔に下ろせない	留守電に芋を送ると母の声	老いた耳冬に激しい蟬しぐれ	市奥村	またひとり儚く消えるアドレス帳	ぴったりと合う筈がなしもと他人	ひまわりが屋根を見守るように咲き	の明日を見ている石	小泉	の今は無き川夢に見	白衣見て心安らぐ日々になれ	れる美味い水の	幼き日覚えし母の味恋し	筒島	愛し合う夫婦ですけどグチ多し	異常なしの再検胸をなで下ろす		孫とする指切り嘘は言えません	東	ITの時代と言えど易に凝り	虫あの大木も立ち枯れ	めて年金マイペ	ボ	前田
	上げた拳 孫の笑顔に下ろせない	留守電に芋を送ると母の声	老いた耳冬に激しい蟬しぐれ	市奥	またひとり儚く消えるアドレス帳	ぴったりと合う筈がなしもと他人	ひまわりが屋根を見守るように咲き	の明日を見ている石	小	の今は無き川夢に見	白衣見て心安らぐ日々になれ	れる美味い水の	幼き日覚えし母の味恋し	筒	愛し合う夫婦ですけどグチ多し	異常なしの再検胸をなで下ろす		孫とする指切り嘘は言えません		ŋ	虫あの大木も立ち枯れ	めて年金マイペ	ボ	前

意地悪な風が奇麗な花落し 中間入りするなら少し派手も良い 中間入りするなら少し派手も良い 中間入りするなら少し派手も良い 中間入りするなら少し派手も良い 中間入りするなら少し派手も良い を磨き十月の空迎え入れ 手ごたえが摑めぬ体が軽くなり はびこってしまう せいたかあわだち草 松山市 高 橋
末 順 宏 一
賢 子 子 臣 實 進

飼い犬が明るい家の潤滑油未来図にどんな夢描くフリーターこの暑さ私を覗く窓の月	柿の木がだんだん秋に染まってる 栗おこわ手間ひまかけた母の味	親切も世話を焼くのも相手見て 生駒市 飛 永 ふりここれからを大切にする友がある	この被害 妻にも娘にもかかるお人好し逃げきれられぬ保証人 橿原市 西 本 保 夫	陽やけした鼻にピアスは丑年か 亡夫が好きな紫色の朝顔咲く ほどほどでよい酒かわす友がいる	静岡市 中 西 偏屈も頑固も歳も父を越え シドニーも我が家も女性たのもしい	横浜市 芦 田 鈴 美
新世紀頑固だけでは渡れない生きがいでつくった南瓜行き場ない裏話注がれた酒が喋り出す	鳥取県 鳥 羽 直 市とりあえず土産話で酒を飲むただいまの声ある今日を幸せに	打ち明けた悩み誤解の種になり 鳥取市 田 中 憧 子いち抜けて取り残される木偶の坊	嘘をつく喉がだんだん嗄れてくる 単轢はあれど洗濯機は回る 倉吉市 牧 野 芳 光	台風が雨をお供にやって来る大波も小波も今は怖くない米余り新米の味ほろ苦い	銀杏舞い散る境内に秋深む 島根県 毛 利 幸暑かった言葉残して夏が逝く	出雲市 加 藤 スズコ

バーゲン品隣合わせて目を背け	おすそ分け持って新調見せに来る	一人旅あれは下見と妻に言い	吹田市 太 田	不勉強悔いて夜長を読書する	塵芥の日に来ない鳥が気にかかる	老いの身はラッシュアワーを遠慮する	吹田市 木 村	健康を確かめに行く寺の坂	木犀が香って万歩計はずむ	引き際がとても綺麗な西の空	吹田市 木 下	妻の愚痴どれも納得正論だ	義理果たし孤独な鬼を演じてる	油断したばかりに長くなる話	和歌山市 前 岡	想い出があって古着がすてられず	祈りたい気持にさせる丸い月	老い忘れ立てた予定が多すぎる	鳥取県 橋 谷	何事も重く感じる古希なかば	知恵の輪がとけてやさしい風になる	古傷に触れぬ対話の思いやり	鳥取県 西 垣
							無				敏				健二				静				美知
			昭				禄				子				郎				江				子
地獄から抜けて地獄を恋しがり	冷蔵庫開けるたんびにかくれんぼ	娘の晴れ着縫ってた頃が母の華	大阪市	不眠症バスの中ではよく寝てる	ケイタイは止めてハートが狂うから	若いつもりが手のしみ顔のしみ	大阪市	自由満喫六十代の深呼吸	自分には過ぎた息子は先に逝き	老化よけ笑い笑われ笑わせる	大阪府	留守ですと本人が出るインターホン	勝って負けくやし涙の銀メダル	外は雨妻とのんびり渋茶飲む	高槻市	阿呆ではなかなか踊れぬ阿波踊り	趣味多忙少しリストラしてみよう	風通し良すぎ寒かろホームレス	寝屋川市	電話代ちょっぴり値下げ倍しゃべる	雪印雪崩になって牛怒る	大人にはなりきれぬまま七十歳	高槻市
			大				平				野				生				岡				西
			Щ				井				田				田				本				谷
			道				露路				栄				義								治三
			子				芳				呼				-				勲				郎

人間を続けたいから戦する美辞麗句並べて個性なにもない	秋田県 秋 野 宏	朝と夕 念仏の鐘たたき役	月の国行ってもどったすばらしさ	鳥取県 岡 嶋 金 子	金とって不安いっぱいドーピング	リフォームはロングドレスで若く見せ	堺 市 大 橋 錦	かいらしい顔して冗談よう言うわ	秋夜長みな留守読書つつがなし	堺 市 田 中 紫	イメージで姉を美人に描くいもと	憎らしい蚊一匹に遊ばれる	おだてても音痴と知っているマイク	河内長野市 杉 谷 カズエ	父だけで防ぎきれない母出番	手作りを誉めてリュックが重くなる	紅引いてイメチェンしても同じ妻	和泉市 横 山 捷 也	朝市でひとめ惚れした茄子の色	呆けたとは思いたくない物忘れ	妻の夢果してやれず悔い残る	八尾市 與 田 明
電熱器にこっと笑うようにつき	L	ぬぎすててうちが一番よいといふ	五月かなもの皆天をこころざす	二合では多いと二合飲んで寝る	基督のやうな顔して鰻ゐる	六大家作品		紙細工コスモスの花美しく	植木鉢廊下に並び花盛り	八尾市 鷲	釉薬の渋さが嬉し備前焼	木漏れ陽の恵みでやがて蕾抱く	高槻市 執	未成年 罪が甘くて悪事呼ぶ	村を出た人の心を見た峠	岸和田市 亀	鳩胸で何時も健康管理する	胸張って天まで上がる奴凧	香川県 松	パソコンが出来て分数わからない	抜き捨てた枯朝顔が花咲かせ	東京都井・
相元	麻生	岸本	前田	村田	川上					見			行			井			村			上
紋太	路郎	水府	雀郎	周魚	二太郎					章			稲子			皎月			輝夫			つよし

一水 煙 抄



時苗果林

わたくしの磁石の北は狂わない

光らない釘が要所を締めている

別光らなくても、安心して何事も大船に乗っ別光らなくても、安心して何事も大船に乗っまとでしょうか。これから寒くなる冬にも格ことでしょうか、それともお宅のて居られることでしょうか、それともお宅のでしょうか

三世代洗濯物が嬉しそう

と、見る人達も楽しくなります。
の洗濯物が仲よくベランダなどでゆれている
こちらの田舎でさえ核家族の時代。三世代

いくつもの顔持つ海に泣かされる

田 賀 八千代田、東の道を引ましょう。 田来ないかも知れません。海の心を心としても、泣いてばかりでは海の本心を知ることがも、泣いてばかりでは海の本心を知ることがおらかな海も、時には台風や津波を呼ぶ。 田 賀 八千代

太陽は太陽らしく照るがいい

青務なのだからと… 村 中 悦 男 青務なのだからと…

わたくしを裸にさせた聞き上手

内容にあったのでしょう。 横 本 日の出来が一枚上だったのでしょうか。いや、相手が一枚上だったのでしょうか。いや、

膨らむと人間臭くなる財布

特に不時のお孕みともなればですがね。だって、血管が通うているのかも知れません。おねだり品がちらちらしたり、まあ、お財布となればですがね。

人は皆どこへ行くのか前を向き

朝から小生も真似ようと思いました。を見たきり、さっさっと歩いている。あくるを見たきり、さっさっと歩いている。あくるがまたま大都市に出ると、みんながみんな前をでしょうか、生きるためにでしょうか。

盆の入り女の僧のオートバイ

那賀島 雅

くなりました。宗派の相違でしょうか?立する時節。しかしその反面住職様が学校の教職につき、奥様が僧位をいただき、お通夜教職につき、奥様が僧位をいただき、お通夜のいる。というできる。

一言が足りぬ夫で損ばかり

「訥弁が金、達弁は銀」古来から男性についてのいいならわしです。愛するあなたの夫いてのいいならわしです。愛するあなたの夫の奥の奥のとのまた奥をしっかりと見詰めなのとの情がわかるはずです。と同時に、これまでの損も別のかたちでプラスになっていることに気がつくことでしょう。

この古希を誰の物でもなく生きる

(皆様からのよい勉強有難うございます)

愛

波多野五楽庵選

ドリンクを飲み黄昏れてゆく背中 心もとなく別れてからの萩の雨 和歌山市 松原市 玉置 福井 重人 柱香

人間になるのがとてもむつかしい 一匹も佳しのほほんとして暮らす 米子市 野坂 なみ

プラスプラス私へ呪文かけておく

遅い芽にいつも暗示をかけてやる 枚方市 海老池

洋

生き甲斐が時どきよそみして困る そっとしておこうバランスとれている

結論を急ぐと痛む足の裏 弘前市 相馬 銀波

助走時は夢の続きの靴になる 松原市 小池しげお

追伸の文字が楷書になっている 日の丸に笑い話をしてやろう

西宮市 門谷たず子

虚も実も呑み込み自動ドア閉る

鈴一つ小さく鳴らしてまだ女 いる人が居なくて時計進まない ふたつ捨て一つ拾っていく命 大和高田市

鍛原

シミーつ頬に残した夏の乱 色即是空美味しい水を買いにゆく 高橋

夕花

鬼になり仏にもなる母の愛 反論へ今だと動くのど仏

甘くみちゃいかんアイツは水母だよ

深海魚友達なんか欲しくない 和歌山市

触れないで下さいニトロ抱いてます 噂話にやはりわたしはロバの耳 日立市

いつまでも平行線でいたい貌 貝塚市

吹田市 石原

十二月ためらい疵は見せられぬ 沸点で燃えぬ男が一人いる 藤井寺市 高田美代子

草書体になりきれないでいるわたし 寝屋川市

猫じゃらし猫もおみなもじゃらされて 砂川市 大橋

和歌山市 青枝 鉄治

弘前市 高潮 霜石

和歌山市 川上 大輪

吉村さち子 権悟

池田寿美子

靖巳

西宮市奥田みつ子

きりとり線の上で浮いたり沈んだり 政良

千里 影は今夜も頬杖ばかりついている 和歌山市

西山

幸

強がりはやめとけ敵は女だぞ 池田市 高知県 桑名 栗田

久子

孝雄

まだ妻を卒業できぬ水の音 今年も終わりすべて流した川に来る 出雲市 石倉美佐子

沈黙が怖くて喋る風ぐるま 弘前市 高橋 岳水

種なしの柿よお前も寂しかろ 弘前市 斉藤 杂

主人公はわたしドラマは終わらせぬ 和歌山市 桜井 千秀 虹汀

お供日が済まにゃ唐津は年越せぬ 唐津市 田口

もうあかんいやまだいけるおんななり 河内長野市 香芝市 大内 由

まつり済み夫婦はひとつ年をとる

一十世紀の最後はせめて男結び 京都市 都倉

ボールペン命の果てるまで稼ぐ 八尾市 生嶋ますみ

今治市 越智 一水

男らしくないと女のエゴイズム

策尽きてにっこり笑う負け戦 岸本 孝子

大阪市 本 勇太

今にして微笑の奥読めなんだ

唇の怪我髭となりこそはゆい	弘前市 櫻庭 順風	薬焼きの煙が村を閉じ込める	青森県 西谷 大吾	脱皮して口の減らない娘に育ち	鳥取県 小西 雄々	饒舌に負けて酒瓶眠りこけ	唐津市 樋口 輝夫	ここに来て大きな穴に落ちこんだ	米子市 青戸 田鶴	双六の中途で止まる水呑み場	米子市 林 瑞枝	泣きませぬ大阪弁で立ち向かう	大阪市 三浦千津子	無欲なら奸計すぐに見抜けたが	唐津市 仁部 四郎	鶴千羽折ってひとりのいのち乞い	鳥取県西原艶子	蛇口から滴で洩れて出る秘密	横浜市 菱田 満秋	わたくしを泣かせた人の紙オムツ	東大阪市 北村 賢子	ステーキの皿が冷めてる夫婦仲	鳥取県 土橋 睦子	ふかぶかのお辞儀只者ではないぞ	羽曳野市 吉川 寿美	小銭貯めたらひょいひょい人が来る	鳥取市 武田 帆雀	日めくりが痩せて今年もあと少し	横浜市 吉田 裕峰
ボコポコと漫画のような雲にあう		義理欠いた穴を繕う糸がない	和歌山県 中後 清史	二匹目の泥鰌すんなり摑まらぬ	尼崎市 長浜 澄子	仏壇に親父の吹いた笛がある	へ 鳥取県 土橋はるお	善人にからい点数ばかり付く	倉敷市 小野 克枝	川の水溢れ出したら逢いに行く	松江市 川本	ふりむくと妻と影とがついて来る	尼崎市 春城武庫坊	ドミノ倒しの後は北の高気圧	堺市 和田つづや	水切りの悪さ話がまとまらぬ	弘前市 宮崎ヒサ子	慎重に飛ぼう都会の水たまり	寝屋川市 江口	時々は忘れることも処世術	横浜市 田中 笑子	コンビニの夕餉で洗う物もない	唐津市 山口 高明	天高く妻も夫も痩せている	河内長野市 水谷 正子	葉牡丹も俺も正月待つばかり		致死量の目盛りいっぱい後指	弘前市 一戸 ツネ
善人の仮面この頃ずれてくる	八尾市	あの人から頑固を引くと貝になる	八尾市	ワープロとFAXまでは付合うた	豊中市	再会の握手がいまだ果せない	鳥取市	一匹になった金魚と冬ごもり	富田林市	縋りつく藁一本も痩せていた	畔 倉吉市 野	少年がひとりよがりをする月夜	藤井寺市	誘惑という名の椅子が多過ぎる	和歌山市	忘れ傘乗せた電車は行ったあと	高槻市	躓いた石に頭を叩かれる	度 鳥取市 岩	癌告知ひらき直って生きてやる	大阪府	自画像に瞳を入れてから眠る	鳥取市	ちょっとでも動くと石が飛んでくる	愛知県	正念場妻の性根が頼もしい	高槻市	逃げ隠れせぬよ門なぞはせぬ	鳥取県
	詩 一風		山本 宏至		田中 正坊		録沢 風花		藤田 泰子		野口 節子		太田扶美代		池永 正匍		左右田泰雄		岸本 宏章		澤田 和重		夏日 健一	~	早川 盛夫		江原 秀夫		西沖 彰雄

軍手軍足洗う思想は持ってない 秋日和こころの彩が出しきれず 大空も一緒に回る逆上り エレベータたったひとりでほっとする 横糸の強さに自負をためている さよならの小石だろうか積んである 助産婦の小指が決めるお湯加減 落款を押せば私が歩き出す 時どきはポカをやるから生きられる おどり食いエビの頭が取りかねる バイパスに橋が架かって眠れない 男一匹守ってこその女です さよならの裏の心を見て欲しい むかし話を手繰る相手がいてくれる 肩の荷を下ろした母の老い給う 和歌山市 上地登美代 岸和田市 岡山県 矢内寿恵子 唐津市 尼崎市 春城 唐津市 市丸 唐津市 井上 鳥取市 八尾市 大阪市 松尾柳右子 倉吉市 山中 米子市 和泉あかり 久保 徳田ひろこ 鷲見 井尻 村上ミッ子 宮野みつ江 正子 康子 正剣 勝視 年代 晴翠 一典 民 新世紀へ生きる荷物を選っている ひっそりと友の死ふるさと秋祭り 四捨五入されて順番まだ来ない 父の釘錆びてはいるがたまに効く 幸せも不幸も不意に訪れる 郷愁がどっと稲穂の垂れる里 足して二で割っても夫婦また一つ 身だしなみ程の化粧は欠かさない ひょっとして孫は天才かもしれぬ 節目には酒と涙の跡がある 木枯らしに心の窓を叩かれる コスモスが首を振り出す風の波 負け犬の後ろ姿が淋しそう 虫干しの度に思案の形見品 石を投じ射止めた玉の輿 寝屋川市 和歌山市 藤井寺市 鳥取市 吹田市 鳥取市 池田市 大阪市 枚方市 今治市 茨木市 愛媛県 高槻市 横浜市 八尾市 保田 月原 藤井 村上 山本希久子 植田 武本 藤井 中島 川原 黒田 乙倉 美田 たもつ 旋風 計光 章人 絹子 宵明 志洋 正雄 武史 剛治 一京 茂代 碧 茜 亡夫の影しっかり号令かけてくる 囮とも知らずのこのこついて来る 男と女シーソーゲームにも似たり 始めから打算なかったミニトマト 任せると言うて口だすのもおんな もの忘れはげしくなって夫婦です 老班に軽く軟膏塗ってみる 三回忌燻っているのが一人 地震後の墓のようすを見てこよう あの白い花が蕎麦かと旅の窓 香焚いて南無の姿になってゆく 朝まだき修業の僧の素足かな したくない体験談をまた聞かれ ヘルパーの他は訪ねる人はない 日中ハミングしてる淋しがり 和歌山県 岡山市 鳥取県 尼崎市 倉吉市 米田 出雲市 出雲市 西宮市 鳥取県 吉田孔美子 米子市 堺市 村中 園山多賀子 中井 板垣 矢倉 志田 林 澤田 樫谷 西口いわゑ 土橋 井上柳五郎 松下比ろ志 郁子 悦男 千代 夢酔 五月 露杖 アキ

螢

麻生路郎の作品とその周辺

...

(119)

橘 高 薫

風

甚だ心もとないが、来月号で百二十回となる 路郎先生の辿られた道の何が伝えられたか、 付けば今世紀も最後の月、 のを区切りとして、この欄を擱くことにする。 長長と『川柳雑誌』時代の記事を紹介して この欄を書き始めてはや十年になる。 の思いと同じだ。

路郎門作家抄(合同句集『私達』から)

福寿草松にしたがいそろかしこ

麻生

税務署と聞いて蠅取紙を踏み 売ると言う家に油絵裸婦の像 足立

けだものの争うごとき恋やせん 本棚へ衣食削ったのを並べ 人間ドック合間~~に妓が訪ね 代で仕上げ遠慮のない鼾 市場没食子 石川侃流洞

めったにくく女女をほめず 初孫のミルクの匂いまで愛し 元祖元祖本家本家土産物 車窓暖かチルチルミチル顔並べ 政見を聴いて一票引込める 迷窓 方正 丹路

晩酌の猪口にも春の舌ざわり

大森娯句楽

市場籠持つひとときを女医愛し 参政権女は藷の方がよし パンの耳好きなのも居る子沢山 立読みの間に止んで傘忘れ 労働歌重役室の窓閉まる 春雨へ女房と濡れるあほらしさ 年賀状女将の書いたものでなし 重鎮と言われ目方は十二貫

春日遅々として仁王さんねむくなり 精神一到酒は欠かさず 直された癖で謡っている謡 みんな寝てしもうて母のいい月見 年上の女とくぐるてっちり屋 未亡人主人の箸で食べてみる 人間の慾でたまった古道具 黒川 菊沢小松園

神経を抜けば地獄の面白さ 重役になり人間になり損ね 胸をやむ人とは見えぬ大獅子吼 金貯めて冷たい夫婦とはなりぬ 骨立てたまま二次会へついて行き 一人ずつ二人ずつ居る中之島 田垣 直原七面山 方大 白柳 豆秋 古方 香林

女なる悲しみおんな酌をする 義理がたい人に元日起される 母と往く心斎橋の片日照り

帰化しても唄は二上り三下り

内藤草一

生々庵

突撃のニュースに兄は見当らず 駅長を一人残した春の汽車 夫婦だろ女がうどん代払う 橋本 浜田

久米雄

もう一人のぼくを殺して子と遊び 暇な事受付嬢のかんぜより 福田 弘津

立話どっちも煙草きらして居 並木道母校へ続くなつかしさ 三流館夫婦仔犬を抱いて来る 不二田 正本 本田恵二朗

アルバムに母も十九の春を持ち しなびても土筆袴はつけて居た 松江

雨降れば降るとて二階仲がよー

喰べながら喰べる話がまだ続き とやかくを言わずいっしょにしてやりな 十二月誰か故郷を思わざる 森下 水谷 谷水

民主主義俺の老後は寂しかろ 男皆阿呆に見えて売れ残り 花道は相合傘の幅に出来 六角堂幾何学的に暮れて行き 数珠持ってするパチンコの高野 Ш 若本多久志 高橋かほる 八木摩天郎

長襦袢女は風邪をひかぬもの きんぎょやに雛妓袂を教えられ 柳秀

茶碗の丸さたのしみに満つ

福田山雨楼

— 95

女性コーナー

前者のた

西 出 楓 楽

選

青空を

掴んでみた

10

肩

車

12

弾

to K

n

乗るな

策を持たぬ

ま

ま

生

今日

は

别

43

自 花 ハングリー 惚れ の名を まれ クセ いのはみんな私 きて サリ 釦がひとつ取れま ・を知っ í つ覚えた今日 心に花 一緒 で恙 ているのも幸せ の鈴 な あればこそ を持つ 0 た だ

大袈裟 押し花 美 口 人人薄 下手 に言ったら少し気が晴 0 が 命うちの義母さん八十二 栞 犬の尻尾にあこがれ 道標だったかも n 3 3

今 自 飽きて来ぬ人でごはんの温かさ 地つ だから ーせはい 画 と漫 張りここー つジョ つも花屋 画 の距 1 クで済 番 生の店先 離が近す の意地持 います練 グぎて いり芥子 たず

大和高田 富田林 寝屋川 和歌山市 東大阪市 并寺 #井寺市 尼崎市 大阪 大阪市 浜 市 太 高 JII 榎 鍛 長 志 久保睦子 澤 田 H 原 原 浜 H 美代子 扶美代 T 千里 賢子 アキ 津千代 公子 能 可

東大阪市 鳥取 取 田 中 ひろこ

8

て六

十これ

か

でら先

えも女傘

と書

Va

たメ

E

が

鏡

0

前

あ

3

<

0

渡

ŋ

少年期を終

辺でストッ

プおとな対おとな

ワー 七い 淋しさは大人になっ 飾らない 家中の鏡も歳をとっ 坂 つどこでマグマ を越えたあ 口と温度差 ことば時 たりの風 の刑に合う 0 17 たせ ある金 誤 7 解さ 10 0 42 でし 釘 n 0) 流 やら しょう

H

2

0

有 野 私 だけ 頂 菊 天 43 ダー 0 探してほしい 鏡見るのを忘れ ぽん摘んで私 畑で癒すかすり かく 0 れてた 秋ま n L 傷 ほ n

絵 秋霖に 間 秋 プ 眼 82 が D 手紙は味覚 0 けやなあ 来たさあ 底に亡夫と泳いだ広い の欲は持たずアマチュ 一しお寒き喪の とキ スポ 0 秋を盛っ 、ズテ 1 -ツだダイ í 1 プはっ てく ガ 丰 T 工 てくれ " H

よそごとの 中ら ŋ から ふり 青 の向 い毛布をかけ 60 返 シー < 匹の蛇を ŋ ま L 5ま書 1 7

かい

我

町 居

11 流 餇

7 が

n

幻想の

中で男になる

恋をして

Ш

n

池田 H 香芝市 林 市 町田 栗田 大内 和泉 村上 Ш 本 久保 田 村 島 モッツ あ ŋ つえ 玉 達子 朝 か 恵 n

寝屋川 尼崎 歌山 曳 尾 田 市 市 内田 太田 徳山 高 林 Ш 楠 橋 本希久子 見 美也 とし子 いみつこ 夕 瑞 章 子 花 枝

岸 米子 和田 大阪 京 市 宮野 本間 野 藤 みつ 満津 早 子 智

1 本

米子市 伊丹 松江 鷲見 本 みさ江 千

温もり 喜怒哀 歯車が 幸せでな おっとっ 土: 嘘少しまぜ 玉子焼入れ 網棚にうかと忘れてきた記 指 b 警戒警報 去形 歩下 紅をく 笛 びの唄がこ 突を重 してる内に表と裏が見 い女 たくし 里 折 月 b する笑顔 た近近 に遠 n 0 って秋の七 0 がればその先までが見通 狂 の愚痴ばかり出る老姉 るうちは花 空気が足りぬ妻の留 伝わるお茶と巡 61 と頭上で揺 0 0 63 ねて太くなる 0 つ 2 涙壺から溢れます 生命線が乱れ気味 きり ふる里 に耐 暦 0 7 てほんのりやわらか て弁当らしくなる き風が温くなる 男とうまく添 悲観的 か語 かえして欲 ぼれる水引草 が決める衣替え 10 引いてい 草口ずさむ えた父の肩 よと頷 毘が荒 王谺する 7 です飛んで出 明け れる栗 に になり れて る主 L 幕 り合う た 12 n 0 妹 3 か 張 毬 せ B る る る

和歌山 和歌山 和歌山 和歌山 富田 東大阪市 倉吉市 鳥取 倉吉市 大阪市 横浜市 東京都 西宮市 西宮市 横浜市 八尾市 倉敷市 浜 駒市 宮市 本県 前市 浜市 林 植 板 乃 Ш 福 安 清 門 岩切 松本よしえ 牧 宮 Ш 東 JII 井 岡 永 本 谷 重 永 渕 田 F ふりこ いわゑ たず子 富喜子 智 H 千子 恵子 稚代 桂香 潮華 充子 鈴美 五月 サ子

> 旅の途 これ 夕焼けに から ふる 今までを白紙 身と心 Va 火 0 たち 以 里は気取 すぎ父の 加 恋 中ふと米びつを思い Ĩ 世紀曽祖 减 せ 胸 枯れ なわ 誘惑され 0 のまろさと響き合う んさく II U に戻す ては たし らぬ風が タクト む かない 母 なら うきな へ効 る赤とんぼ に が炎えてくる がまだが なる深呼 難 で母の 如 温 か 薄 か 化 熱 10 文 秋

都合よい 1 はちょっと酷なようだ。 作者の並 ずにかえって嫌味になることがあり、 n 栄さんの句―一読. る一といささか教訓的 時だけ プにいただくのに迷わなかった。 つ子さんの句 折々に垣 歳を意識する T

鳥取

大阪

夏

磯

鳥取県 曳 奈良 取 Th 西原 さえ 福 Ш 田 JII 辺 JI] き H 登美 出

うちで大きくなってきているであろうことは、想像に難くない。 だものであるが、年齢と共に母と一緒という鈴の存在が、 うらやましい境地だと思う 人生を達観した作者の静かなたたずまい ほんの些細なものに幸せ 恙なし」がやさしい響きで迫ってくる。 々ならぬ思い入れが読み取れる。もちろん心象を詠ん 間見る作者の人柄から察すると、 した時は、投げやりで棘がある句ととれた。 ただ表面だけを飾り立てても、 す唐辛子 出 何度も身を入れて読んでみると、 でありながら、 L とをみつ 思 けることが出来るという、 大切なのは心の中の 能子さんの句 素直に心に入ってくる。 が目に浮かんでくる。 歌山 愛媛 倉 和 取 敷 可さんの句 市 市 市 岸本 野村 家守 黒田 7 - 7 桜沢 身にそぐわ その 村 さちち子 解釈 孝子 下五 花 茂代 千 K 美 で

史

音

あなたには心の音が解らない マイク手に音痴を自覚せぬ男 音痴でも歌う心が晴れるまで チンコの音が待ってる給料 い音で煎餅齧る母がいる 選

セツ子

郎郎 雄

母が逝く山の崩れる音させて

扶美代

たず子

駅伝のタスキに責任ぶらさがる 責任はウヤムヤにして民主主義 甘くないサクランボまで妻のせい 鏡拭く今日の責任果たすため

責任を言うても死者は還らない

さち子

当確が届く小豆の煮える音 音のする方へ向いてく鯉の口 音無しの構えで妻は切ってくる 父さんは音で機械の機嫌みる どうしても大きい音の方を見る

早尚

雄 智

音のない秒針虚し独り部屋 補聴器を外して老妻の小言聞く 音のする方へ動いて救われる 新世紀微かな音で忍び寄る 舌打ちと同じ音でも舌鼓 モラルハザート平成の文字朽ちる音 裏舞台札束動く音がする 勝 睦 慕 IE 瑩 男 子

熟睡に音を絞っているラジオ

多賀子

よしみ ヒサ子 四三郎 信頼の崩れる音よ嘘ひとつ 地

風鈴も音色を変える秋の風 音沙汰のないまま余震なお続く 線香花火ポトリといのち落ちる音

葉の影に確かな冬の音 葉が北から運ぶ秋の音

いいことがあって弾んだ靴の音

雷の音に逃げ込む蚊帳が無い ランダムな音から朝が動きだす 冬近い気配が水の音にある 金貨してそれから音のないポスト 正直者を叩けば澄んだ音がする 木枯しの音に馴染んでいく背骨

水の音今朝は御機嫌良いらしい 騒音もほどよく同居させる耳 せせらぎが濁流になる怖い音 靴音で妻が悟った今日の首尾 潮騒がひびく別れがいつかくる

ご祝儀のセリ値がひびく初リンゴ キッチンの音から愛が深くなる 草笛の音色が過去を呼び寄せる

凡々子 治

責任を果たすと腹が減ってくる 饒舌が責任とらず走り去る 責任を持つ顔になる子も五十

聞き慣れぬ音で目覚める旅の宿 柱時計に昔々の音がする クレーン巻く音先端に天がある 風紋を産み出す音を砂に聞く

> 大俊 政

失敗の城明け渡す無責任

責任がないので好きな時に寝る 責任を自分に課して日々を生き 目覚ましの責任感の音で鳴り 責任を取れないくせに啖呵切る

新鮮な茄子がキュッと鳴る畠

城

責任者出て来い年金目減りする

責任があって嫌われ役受ける 責任の所在有耶無耶社はピンチ

一味の音に若き無頼の悔いを聞く H 村邦昭 朝

子

聞き役に徹するという無責任

責任をとらす腹心飼っておく

山分けにした責任で手を握る

良縁と引かせた神の無責任

さち子

自らは減俸にして部下を斬り 責任は軽いが俺も名を惜しむ

責

任

倫 子 選

東

あやめ 智加恵

(川) 靖 睦 重高洛 郎 酔

とし子 俊武

扶美代 水 隻

賞味期限もつ責任は持ちません

足跡が見えないように拭いておく 責任へ眼鏡かけたり外したり 長男の嫁に介護と言う重荷

螢

多数決責任の無い手をあげる

イルカでも木戸銭分は芸をする 責任はとります今は金が無い 責任をとるとは辞めることですか 責任は楷書で記名保証印 右手左手互いの責任で動く 責任を感じすぎてる自己嫌悪 責任のない放言を縄のれん 責任をあまり突つくと火傷する 責任は地球が取れと神の声 かぬ種に責任転嫁する

いつふみ

夕焼けに少年漬かり明日 漬け方が英語で届くE

メー

虹 シマ子

ビルの窓から責任感が飛び下りた

富 英

ヒサ子

東大は一夜漬けなど通さない

故勝

水虹順

美笑汀風

鉄

人間に漬かり人間くさくいる

シマ子

夫 治

責任あるポーズ仁王は疲れはて 責任は人間ですと熊が出る 床柱責任感を光らせる 資本主義責任用の秘書を置き

> 大 幸

勝

路

責任のないのが話かきまぜる

庸

佑

骨箱を抱けばようやく喪主の顔 十七歳だけの責任でもなかろ

高瀬

霜石

妻

子

責任がないから孫を溺愛し

漬 17 る

子

柳五郎

子

愁 女 選

多賀子 しげお あらた あずき 子 塩漬けにされたまんまの私小説 塩漬けにじっと我慢の株がある 美味しいと夫が言うので漬けている 物置の漬けもの石に亡母の影 井戸水に漬けた西瓜が孫を待 潰ものにピクルスと言う外国語 かくしゃくと儂の歯で嚙むニシン漬

潰ものの味を引き出すとうがらし 漬物が一口ほしいフルコース 漬物ですきやき鍋を締め括る 漬けることまだ知らぬ嫁よく食べる 霜 雅 清 よしみ

勇

漬け方も習う民宿囲炉裏端 浅漬けの素に秘伝が嗤われる 沢庵の尻尾にもある自尊心 浅漬けへ老母のたしかな目分量 糠漬けの秘伝途絶える核家族

古漬けの味に似て来

温泉で菜っぱ洗う野沢漬 小包の外まで包う酒の粕 たっぷりと漬けては活きる草木染 アリランの唄が恋しいキムチ漬 鯨の軟骨松浦漬が持つ風味 薬漬けになっても希望捨て切れぬ 粕漬が出来たと貰う垣根越し 縄のれん漬物自慢のママがいる 育ち今日も糠味噌かきまわす 小た夫婦

> 玉 7 洞悦 尚

> > 111 庵 男

ひかる 靖

そっとしておこう茄子の辛子漬け古漬けをじっくり煮込む祖母の味 おそろしやすぐキレたがるゲーム漬け みつこ 銀 螢 波

まつり太鼓はずんで漬ける魚寿し ぬか漬の樽は居場所を知っている 地 小林妻子 充

99

いつふみ 四 大

凡々子 政 平均の寿命を延ばす薬漬け ぶぶ漬けを食べて京都を締めくくる 骨のない影を漬けてるアンケート 夜漬けしたスピーチが出てこない

輪の中の漬物石になる自覚

神は居ない臓器を漬ける病理室

勝

視

子

次

山かけて点を取りたい一夜漬け 玉のような初孫そっと湯へ漬け 奈良漬に下戸は酔ったか桜いろ 漬けもので活性化した過疎の

漬物に老母が乾かす柿の皮

不步数室

○弱虫がお使い出来て泣き笑い ▽虫の音を聞いて初秋の月仰ぐ ○初秋かな虫声高く鳴き始め かなとかけりは俳句などに用いられる切れ、初秋かな虫声高く鳴き始め 恒雄 は避けた方がよい。 字といって、川柳ではできるだけその使用 裕 峰

弱虫とお使いはアンバランス

▽弱虫が初めて勝ってきた血のり

○一匹の虫だがあるよ意地覚悟 覚悟が不適切では

句が多かった。出題には辞書を繰ってできる

出題が拙かったせいか、

今回は殊の外同想

だけ広範囲の語義・用語になる言葉を選んだ つもりだったが、結果的には左のような同想

▽一匹の虫だがあるよ意地面子

○告白のムードづくりにすだく虫 原句に軍配か

句を沢山生んだ。

驚いた虫も殺さぬ顔をして

▽告白のムード高める虫すだく ○毒味する虫を嫌った野菜買う 上五は面白い表現だが、ここは端的に 輝

夫

きらり キミエ

純

○腹の虫治ってるわけ知ってるか ▽農薬で虫も嫌った野菜買う

▽腹の虫治まりましたその笑顔 川柳としては下七音字が不適

虫という字を入れることも又、蝶や蟻その他

虫」という題では難しい話は別として、

虫好かぬ相手もきっとそう見てる 虫好かぬ思えば相手も同じらし よく言うね虫も殺さぬ顔をして

の虫を詠んでいただいてもよいのです(初歩

○安全な野菜虫と分けて食べ 中六を中七に整える。

志

重

け(着想)のあり方の勉強の場なのですから 教室の課題吟としては)。川柳としての見付

▽虫の音を肴に妻と月見酒

内容が乏しい

○虫の音にビール一入腹に沁み

つよし

○虫になり好きな娘の背に止まりたい ▽無農薬野菜を虫と分けて食べ この場合虫ではなく蝶の方が。虫といえば 大抵の娘さんは嫌うものだから

武

▽ダイエットいつも鳴いてる腹の虫 ○腹の虫柔道メダルおさまらぬ 原句の中句と下句を代えてみると

○ダイエット腹の虫まで悲鳴あげ

典

▽篠原が見事抑えた腹の虫 日本人観戦者の立場からすれば 中七が冗句。篠原選手のことだから

▽腹の虫おさまりつかぬ誤審判

○悪い虫つかないうちに嫁に出し この句も同想句が多かった。同じ内容でも 表現を替えるように工夫すること。 宗 明

○蓋とればやる気の虫が騒いでる ▽親の目へ娘につく虫は悪う見え ってゆく方がよいのでは 上五を"みんなから頼られて"の内容に持

▽おだてられやる気の虫が騒ぎ出

た

○脱皮した蝶に夢あり青い空 空もいいが蝶には花がお似合いでは

敬之介

○うちの娘に虫がついたと嬉しそう "いい虫"を強調するとすれば 朋 月 ▽脱皮した蝶に夢あり花の園

○虫穴のあいた野菜に安心す ▽いい虫がついたと嬉しそうに親 文

江

添削は不適だが敢えて句意を汲むとすれば 虫喰いの野菜―安心の句は多かった。この

▽虫喰いの野菜に安堵する生活

-100

		害虫の巣で一ぱいの永田町	(,		▽虫干しの機会少なくなる化繊
		私の句	三美恵子	〇ゴキブリと勝負こちらも腰据える 一	リフォームと虫干しは面白いが一
		(さてどうなりますか)		▽虫の音に夫婦喧嘩もバカらしく	○リフォームで虫干しの数徐々にへり 錦
子	伊玲	身中の虫にコバルトあててみる		上五が安易	▽墓参り虫も唱和の経の声
		(秋は別れの季節か)	セツ子	○喧嘩やめ虫のコーラス聴く夫婦	先祖は冗句。
枝	幸	虫の声昔別れた顔をふと		▽虫喰いのあとも風情となる生花	○虫の音を止めて先祖の墓参り てるみ
		(男は女の涙に弱いか)		下五が安易に詠みすぎ	マナフタリンつけておきたいうちの娘に
代	千	泣き虫を女の武器にしています	民	○もり花に虫喰いのあとさまになり	意は異るが
子	浩	虫けらのように命を粗末にし		タツヱさんの添削をご参考に	できるだけ人間を詠むようにされたい。句
勝	好	たでを食う虫と暮した半世紀	賢治	○虫めがね老眼鏡の杖になり	〇虫よけに備長炭も仲間入り
子	佑	外面は虫も殺さぬ嫁姑		▽ストレスをためてあばれる腹の虫	▽ゴキブリの糞へ一家が大騒ぎ
月	菜	いいとこを見せて財布が虫の息		前後を入れ替えてみれば	中七の表現に一考が欲しかった。
П П	和	不況風仕事の虫が家に居る	よしこ	○腹の虫もストレスためてあばれだす	○フンが有り探偵擬き虫を追う サト子
子	悦	瀬戸際でやっととどまる蟻地獄		▽共生の虫に畑も支えられ	▽腹の虫おさまりつかず亡母へ愚痴
トヨ子	ŀ.	議事堂に金喰い虫の顔並ぶ		ズなどを想定すると	原句もいいが、明確にするには
雪	深	人のエゴを哀れに思う「蜘蛛の糸」	9	見付けはいい。ただ下五がなおざり。	○腹の虫おさまりつかず仏壇に 益子
子	(鳥)	知らぬ間に同居の虫も友となり	洋子	〇虫たちとほどほど共生我が畑	▽字を探す辞書へ頼りの虫眼鏡
江	君	秋の夜更けて一途な本の虫		舞夢さんの添削をご覧下さい。	が、反面必要な言葉が詠みこめない。
子	敏	ダイエット三日坊主の腹の虫	栄呼	○シドニーで破れた男子腹の虫	中八が冗長。繰り返しは強調に効果がある
=	圭	挙げ句には玉虫色でケリをつけ		▽保護色の虫に老眼悩まされ	○虫眼鏡うごかし動かし字をさがす タツエ
巨八重子	(三)	ここまでとマグマになった腹の虫		中七が説明句にしている。	▽左遷地にこおろぎの声侘びしすぎ
禄	無	妻の目に虫の居所探られる	ふりこ	○保護色で虫の所在に目を凝らす	状況を少し変化させてみると
士	出	虫干しの本に青春拾い読む		▽老いてなお抑えかねてる腹の虫	○こおろぎの声が侘びしい子等思う 栄 子
美弥子		泣き虫の笑顔はじけるウェディング		してみてはどうか。	▽虫なりに自前で生きてゆく強さ
		佳句	少しずら	短気を表現するとすれば、視点を少しずら	原句は面白いが、川柳としては?
	•	▽ゴキブリの天敵スリッパがうなる	栄翁	○何時までも歳をとらない腹の虫	○虫の一生世話もかけずにお見事だ 円 女

の川

泣きやんで

木本朱夏

泣きにきて赤い夕陽を見て帰る

草が野原いっぱいに咲いた。 と茂り、春は白い野茨が、秋にはぽっと月見の中洲には鷗が群れ、川岸には葦がざわざわの中洲には鷗が群れ、川岸には葦がざわざわいの中洲には鴫が群れ、川岸には葦がざわざわい。

ハイネや朔太郎の詩集に親しんだ城跡の代の単なる感傷であったろう。

を幸せとも気づかず、若かった。苦かった。 と幸せとも気づかず、若かった。苦かった。 と幸せとも気づかず、若かった。 と幸せとも気づかず、若かった。

人間をやめたいような日の師走丸ければ丸く金魚は泳ぐなり

東の草分けで、私財を提供されて川柳の指導をされ、また清水白柳、岸本水府その他、関をされ、また清水白柳、岸本水府その他、関をされ、また清水白柳、岸本水府その他、関東の書いたシナリオ通り、結婚し子供を産親の書いたりがうっすらと寒い、孤独、寂寥。肩先のあたりがうっすらと寒い、孤独、寂寥。肩先のあたりがうっすらと寒い、孤独、寂寥。肩先のあたりがうっすらと寒い、孤独、寂寥。肩先のあたりがうっすらと寒い、孤独、寂寥。肩先のあたりがうっすらと寒い、孤独、寂寥。

金槌が降って来そうな板囲い

智水庵

たのである。

いた或る日、ニュース和歌山で川柳に出会っ再現。毎日の日記に思いのたけをぶちまけて

中筋三幸先生ごきあと三幸川郷牧室の中衛軍が口出ししそうな形見分け

中筋三幸先生亡きあと三幸川柳教室の主幹中筋三幸先生亡きあと三幸川柳教室の主幹に就かれたのが菅井智水庵先生である。 た生は本名菅井康郎。大証二部上場企業のスガイ化学株式会社の代表取締役社長であった。 お人柄であった。

智水庵先生もまた公私ともに多忙ななか私智水庵先生もまた公私ともに多忙なないる。 「まあ良いじゃないですか」何か事がある 「まあ良いじゃないですか」何か事がある。 「まあ良いじゃないですか」何か事がある。 「まあ良いじゃないですか」何か事がある。

おもいきり顔を洗ってあれは夢 朱夏昭和六十二年であったか薫風先生が三幸川昭和六十二年であったか薫風先生が三幸川昭和六十二年であったか薫風先生が三幸川でるだけ」、三幸の句会も「なんとなく出席でるだけ」、結切りに遅れるのは常習というお粗末さ。

っただけの「悲しき玩具」でしかないのか。お角出会った川柳もひととき私に珍しかんたが一番悪い生徒です。アッハハハ」とあ生前の智水庵先生が下さったお手紙に「あ

から適切に汲みとって下さった。 とがあったのでしょう」と私の心情をこの句とがあったのでしょう」と私の心情をこの句

堀端三男さん、福本英子さんにお願いして初知端三男さん、福本英子さんにお願いして初めていたのが「きゃらぼく忘年句会」である。なったのが「きゃらぼく忘年句会」である。ないは、「きゃらばくなが、現るとのなが、 これの を感じた私の転機になった晴天の霹靂であった。

を加。寺尾俊平、森中惠美子、田中好啓、現参加。寺尾俊平、森中惠美子、田中好啓、現を加。寺尾俊平、森中惠美子、田中好啓、現参加。寺尾俊平、森中惠美子、田中好啓、現参加。寺尾俊平、森中惠美子、田中好啓、現参加。寺尾俊平、森中惠美子、田中好啓、現参加。寺尾俊平、森中惠美子、田中好啓、現参加。寺尾俊平、森中惠美子、田中好啓、現参加。寺尾俊平、森中惠美子、田中好啓、現参加。

平成六年十一月川柳塔みか月の大会の前夜絶叫の固まっている椿の実

いらっしゃい」と励ましてくださった。へ行っても良いけれど、大きくなって戻って

声をかけて頂いた。「朱夏ちゃん、お前さん祭でのこと、寺尾俊平先生に思いもかけずお

勉強会「川柳ぐるーぶ駅」がスタート。レコ勉強会「川柳ぐるーぶ駅」がスタート。レコル海道、柳川、名古屋、鳥取、もちろん関に私はいわゆる現代川柳に傾倒してゆく。現に私はいわゆる現代川柳に傾倒してゆく。現に私はいわゆる現代川柳に傾倒してゆく。現の本語がある。

ったけれど、それなりに楽しかった。しかったけれど、それなりに楽しかったらず身で苦吟の題材でイメ実その他、その折々の持ち寄りの題材でイメ実を映起して川柳を作る。現代川柳大会にも参加する。相変わらず身作で苦吟の題材でイメ

当時出会って感動した句を紹介しよう。 地方の細川不凍さんは十七歳の時事故に 北海道の細川不凍さんは十七歳の時事故に ながらも、積極的に作品を発表されている。 この句に出会った時、私は声もなく打ちの されていた。これが川柳なのか!この句に めされていた。これが川柳なのか!この句に のと言っても過言ではない。

生きて愛して、愉しかりし月日を堅く心にの濃やかな情愛であろう。 知の象徴するものは万葉の時代より、男女

くる句である。とる句である。となりである。となりである。となりである。となりである。となりである。となりである。となりである。というとないである。というというというというというというというというというという

を大いに広げてくれた勉強会であった。駅は五年で廃線となったが、私の川柳の発想、葉を弄び奇を衒い、私は疲れてきた。結局、葉を弄び奇を衒い、私は変れてきた。結局、

人恋し人わずらわし波の音寝転べば畳一帖ふさぐのみ

人生や鳴呼にはじまる広辞苑 薫岡

があるが、人と人の出会い、触れ合い、おもべかあるが、人と人の出会い、触れ合い、おいたからであろう。いたれ、庇われていたからであろう。けて来られたのも、川柳塔の温かい絆に支えけて来られたのも、川柳塔の温かい絆に支えみし、座り込みながら私が今日まで川柳を続みし、座り込みながら私が今日まで川柳を続

いやりのなかから、人の心にしみこむ真実の

にないと思う。 一様なりの「人間陶冶の詩」を模索 大いところは愛かも知れない。 「今ここに居る私」をどう表 大いところは愛かも知れない。 「かが生まれるのではないか。川柳の行き着 にだ、本格、革新、前衛、詩性、川柳の形 はどうあれ「今ここに居る私」をどう表 はどうあれ「今ここに居る私」をどう表 はいいと思う。

泣きやんで海の凪ぐ日を信じよう

ほたる川柳同好会一〇〇回記念句会 平成十二年十月十日

一○○回のあゆみほたる川柳同好会

井上直次

中心となり平成四年七月十四日第一回句会を中心となり平成四年七月十四日第一回句会を平成四年五月蛍池公民館主催で橘高薫風先生を講師として「川柳入門講座」が八回にわ生を講師として「川柳入門講座」が八回にわ生を講師として「川柳入門講座」が八回にわたり催されまして、講座終了後受講者有志が

句報は当初より会員のボランティアで作っ句報は当初より会員のボランティアで作って頂き、翌月渡しにはなりますが、これも一ではとなりました。

ちております

忌憚のない意見を出して頂き、活気に満ち満

感謝しておるものでございます。
今、会員数は三十数名になっています。これもひとえに薫風先生の温かい御指導、並びれもひとえに薫風先生の温かい御指導、並びれもひとえに薫風先生の温かいます。こ

として前句会の秀句取得の方にやって頂いて句会は宿題三題三句ずつ提出、選者は原則を勉強々々と努力致しております。日本の詩である」、という教えを忘れず、日東ねておられます。路郎先生の川柳は「人間重ねておられます。路郎先生の川柳は「人間和気藹々の雰囲気の中、楽しみながら苦闘を

なりました。

十二年十月十日に回を重ねること一〇〇回と

回の休みもなく今日まで続いて参り、平成

爾来、毎月第二火曜日午後から同公民館で

持つことが出来ました。

席題は一題で一句提出、全員の互選によりおります。

作の短冊の展示なども行って好評を得ており 作の短冊の展示なども行って好評を得ており が川柳塔同人ないしは誌友の方々で、ただ を員相互の実力向上にも努めております。 また毎年秋に行われる公民館主催の「公民 また毎年秋に行われる公民館主催の「公民 また毎年秋に行われる公民館主催の「公民 また毎年秋に行われる公民館主催の「公民 また毎年秋に行われる公民館主催の「公民 また毎年秋に行われる公民館主催の「公民 また毎年秋に行われる公民館主催の「公民 また毎年秋に行われる公民館主催の「公民 はまつり」にも積極的に参加し、各会員自信

十月十日、一○○句会記念日には句会終了 ・ 場所を近くのアイボリーホテルへ移し、 後、場所を近くのアイボリーホテルへ移し、

導御鞭撻をお願いする次第でございます。くせい川柳会」はじめ他の句会の方々の御指

)回記念句会

懇親会

田 辺 正三郎

のか。三句作ってしまった」と仰言ったり、 頂く。僅かの時間に「席題は一句で良かった 句もあって久々の盛況であった。 会員も増えて参加者二十六名、外に九人の投 がちだが、先月薫風先生のご紹介で、かなり ーがないので、このところ老齢の方は敬遠し 薫風先生も早くからお見えになり選もして 会場は蛍池公民館。 古い建物でエレベータ

終了後、かねて予定通り会場を豊中駅前の

られた。

兼題でも天に抜けられたのは流石と感心させ

いがこめられていて、一同聞き入った。終っ 短く軽いなかにも川柳によせる並々ならぬ想 て行っていたが、今年は一ヶ月繰上げて十月 た。例年は十一月に少し早目の忘年会を兼ね アイボリーホテルに移して懇親会を開催し 十日に百回記念懇親会とした。 型通りに物故会員への黙祷、 薫風先生のお話。懇親の場に相応しく 会長挨拶など

> 束が送られた。 第一回から中心になって熱心にこの会を育て 篤なるご指導を感謝して花束贈呈。続いて、 てこられた前会長の井上直次氏にも同様に花

て当同好会設立から現在に至るまでの、ご懇

ラマである。 まで、一連の南朝の悲史を適切に要約したド 湊川の戦いから正行の四条畷での最期に至る 北朝、楠木正成の活躍から後醍醐帝の隠岐配 による「南朝の群像」。 乾杯の後宴会に入る。去年は福引をやった 今年のイベントは椋山祥風氏の企画構成 建武の中興、足利尊氏の反乱、桜井の駅 時代は十四世紀、

四卓のテーブル毎に合唱 島高徳」や「桜井の駅」の昔懐かしい唱歌を 淀みなく、随所に「桜の幹に十字の詩」の「児 栗田久子さんのナレーションも朗々として

その間に

高嶋勝の達筆の士が二人居る)さらには祥風 かに認めてゆく。 の和歌をステージに設けられた紙に墨痕鮮や の漢詩や 「天勾践を空しゅうする莫れ かえらじとかねて思えば梓弓 なき数にいる 名をぞとどむる 時に范蠡無きにしもあらず」 (当同好会には宮田禄骨)

> 出であった。 さんの和歌朗詠も入って、なかなか凝った演

であった。 参加、幼時をしのび童心に還って楽しい 最後に全員で「荒城の月」を合唱 大人の学芸会のような色彩もあるが、 全員



橘高薫風名誉主幹を囲んで、ほたる川柳同好会会員

本 社 十一月句会

P + ウ 月七日(火 1 1)午後 五 大 時 阪 *

れた。 取県西部地震で特に大きな被害のあった方へ 月句会には93名の参加があった。受付に、 の御見舞募金箱が置かれ、皆の気持が集めら 秋にしては気温の高かった七日夕刻、 11

に黙祷を捧げたあと句会は始まる。 11月3日亡くなった同人の北勝美氏 90 歳

刊されたことを報告、二十句を紹介する。 氏の句集が、薫風名誉主幹等の尽力により発 お話は新理事長の板尾岳人氏。故寺尾俊平 はじめての主役柩の中にいる 少しはにかみ妻と手をつなぐ坂

野菜中心の食事をし は靴の選び方が大切である。また歯を大事に、 歩くことにより健康を維持している。それに 手本に健康長寿を目指さねばならぬ。自分は 息づかいの句集は間もなく入手できると言う。 など家族を愛し川柳を愛した俊平さんらしい 川柳を続けるには、まず健康。紫香氏を御 し、健康で川柳バンザイの

> 日を過していると結ぶ。 月間賞は江口度さん (司会-遠野) (受付-弥生·昭子) (寝屋川 (記名―月子・澄子) 市)に輝く。 (清記―義

板 東 子

四島の返還返事まだこない 荒れ模様妻の返事に険がある 絵手紙の返事に郷里の秋深む 飲むことの相談返事早いこと 忙しい人の順から返事くる 良い返事らしい茶柱立ってい 札束を積まれ即答してしまう 低気圧妻が返事をしてくれぬ あらためて返事しますとそれっきり 返事無いけどただいまと鐘たたく 返事待つポストにダイレクトばかり 玄関を開ければ猫が返事する お返事のいいとこだけがとりえです 合格の願いそのまま返事無い コスモスの風にさそわれいい返事 はじめ いつふみ しげお 英 子 武

> 単刀直入イエスかノーかだけでよい ちぐはぐの返事補聴器と補聴器 お別れの返事勇気がいりました ハイハイハイ三回目には腹が立つ 遺言状へ返事書いてもいいですか 歳月がくれる許すという返事 のらりくらりと返事をのばす理由がある 飾らない返事まっすぐとんで来る 金釘流の母の返事にある温み 希久子 昭雅 美 文

返事などいらぬと絶交状届く 即答を避け風向きを読んでいる 老母からの返事同居はいつもノー 重ね返事で重たい妻の尾骶骨 かりん

死にたいと思った時にきた返事 病む父の怒声にやわらかい返事 扶美代 セツ子

母の返事暗記している泣いている 扶美代

這ってでも行くと嬉しい返事くる

よい返事聞いて嬉しい茶を入れる 三男はそうかそうかと聞いてくれ

オーイハイ返事と一緒にお茶がくる

とめどなく思い乱れて待つ返事 君になら出来ると熱い師の返事

一度目の返事で妻は動きだす

いつまでも待つ気神様の返事なら

気力体力失せた男の生返事

寺 JII 弘

題 選 :20

選ばれたあなた様へと来るメール マイウエイ邪魔せぬ人を選びます 選ばれて走って負けた悔いがある 慎重に慎重を期しまだ独 国民が選べば総理違う人 セツ子

-106

酷使した指宝石を選ぶ妻雅文	たが選ばれる 定	土地選ぶ枠をローンに決められる はじめ	選手宣誓車椅子から活もらう 英 ヱ	三Bを選ぶわたしの好奇心 冬 葉	選曲の間違いですと言うておく 義 子	特選の雅号がひとり歩きする 寿 美	選ばれてみたが孤独な管理職 睦 ヱ	自分の意志で選べぬものに親がある 昭 子	特命で選ばれるのも七光り 愛論	選ばれたのか熱い視線がとんでくる ア キ	甘えん坊保護色ばかり選び出す 正雄	まな板の鯛も包丁選びたい 弘 風	選ばれた時点で敵が見えてくる 千里	金賞に選ばれ菊も襟正すたもつ	ばら園で一本選ぶのに疲れいわゑ	風に飛ぶタンポポの種土選ぶ 萬 的	当選すればやっぱり欲しい袖の下 千 秀	ボクをまだ指名してくる友がいる 扶美代	どの指もきみを選んで炎えている たず子	選外にタイプの娘がいるコンテスト 求 荘	ヒロインに選ばれてから上り坂 典 ヱ	気楽さを選んでひとり暮らしする 美代子	楽をする気ならあなたを選ばない つづや	メシフロネル私選んでくれた人いつふみ	わたくしを選ぶときっと手が掛かる 恵 ヱ	錯覚で選んだ夫と五十年 倫子	両親が選んだひとと真珠婚 瑠美子	選ばれて選んで今は共白髪 欣 ヱ
(低音になってお金を貸してくれ		ドラの音に涙左遷も栄転も	・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	茶 落ち葉降る音を聞いてる秋の底	音もなく銀杏散る日の御堂筋	足音の揃う怖さを知っている	飛行機の騒音と住む基地の街	耳をすませば日本列島軋む音	幸せのポストの音を待っている	音階がひとつ狂った寒復習	補聴器を切って雑音から逃げる	ラス是	使 真「旨」	選ぶのは選ばれるより汗をかく	軸軸	じゃんけんの町会長がよく動く	天	女優の家選び生まれたわけでない	地	名刺折る場所はこれから選びます	人	誇り高き女選んで下り坂	程々の値段を選ぶ風邪薬	世話役にまた選ばれて叱られる	運命線ここからわたし選に洩れ	職選び切ないけれどいまは死語	佳	選りすぐりばかりスタートの武者震い
しげお	瑠美子	柳弘	いわゑ	美代子	あやめ	勇太	笛生	楓楽	剛治	螢	庸佑	i				ダン吉		賢子		セツ子		洞庵	たもつ	朋月	昭子	一步		天
春夏秋冬妻の音には変りなく	雑音の中に立派な音もある	お静かに風の生れる音がする	リストラが私の音を消しにくる	生きてゆく音だ遠慮などいらぬ	佳	あの音は人間消した削除キー	御近所の雑音妻は良く拾い	雑音を入れないようにする看護	雑音は聞かぬと決めたロバの耳	雑音に迷い真実見失う	そうなんだ音は世界の共通語	寄せ付けぬ轟音滝に神宿る	梵鐘の余韻にこころ洗われる	歳かしら靴音までが枯れて冬	エンジンの音聞きわけている港	電子音私と波長が合いません	さて音が消えると狂いそうになる	秒針が止まれば音の無い世界	ピリオドを打つ気になった波の音	音もなく若さを奪ってゆく時よ	罪ひとつ洗い流した水の音	荷を解けばふるさとの音ころげ出る	点滴の音は励ましなんだろう	消灯の病室無音の夜が長い	舞台暗転一切の音はたとやむ	友の輪に欲がからんで軋む音	水の音火の音明日を生きる音	寝付かれぬ心見透すオルゴール
武庫坊	金太	睦子	重人	大輪		千里	遠 野	セツ子	たず子	房子	一步	達 子	一風	萬的	恵子	泰子	度	伽羅	澄子	泰子	千里	昭子	ダン吉	求芽	三男	正雄	寿美	澄子

兼題 倉 求

思案無しコンピューターで片付ける

はじめ

芽 選

ぬくもりの音が聞こえる路地住 賢 子 ブランドを着せると気取り出す案山子 着こなしに女は過去を覗かれる 暑いのにマネキン冬を着せられる

心境に応じて風も音を変え

男

雑音に慣れて静かさ落ちつかず

かりん

老妻と二人ぼっちの音で住み

山本 希久子 選

じいちゃんもフリースを着る世の流れ 本心をかくす女が着ぶくれる 和服着た娘に亡妻をダブらせる 土に生きるモンペの母が美しい 病弱な亡母の記憶へ白衣着る ピンク着てブルーな気分吹きとばす 正 坊

お振袖二十歳の青春が匂い立つ 着飾った女がチラチラ見せる隙 着なくても持ってるだけでよい着物 番好きな着物着て寝ています 一色媚びることなし冬の山 タン吉 しげお 定 男

似合うがなたまには夫言うてくれ 着物着て出ると視線が寄って来る はんなりと菊師の技を着る人形 プライドを捨て出直しの作業服 枚を脱いだり着たり身を守る 度着ただけでこやしにされている 伽 かりん 昭 澄

振り袖を着て泣いている七五三

虫干しのつもり和服を着て出かけ

こだわって着れば私になじむ服

すぐ鎧着たがる心もて余し 白を着て少し初心を思い出す ブランドを着て心根は痩せている 豊作へ案山子も派手な衣裳着せ ありがとう毎日替えている肌着 着せられた犬に毎朝出会う土手 好きな服着ると体がしゃんとする 出不精に木綿の服がなじんでる 何を着て出かければいいぬくい冬 菊を着て人形の眉秀でたり 看る人を好む着物でございます
 スマートになれたら着れる服ばかり あやめ かりん いわる

作務衣着る枯葉の私語を聴きたくて ウルトラマンの着替えこっそり見てしまっ 着る人が着れば木綿の華やかさ 着飾って寒い心をさらけ出 お仕着せの法被でどんぐり背くらべ

だぶだぶの服で隠している微罪

P

キ

普段着が好きでくるくるよく動く 蓑を着た虫になりたい時もある

鹿

太

美代子

ふりこ ますみ 泰

代的

太子

大典高 美輪子栄

良い思案できましたかと空の月 空腹で堂々めぐりする思案

思案橋戻って過去に会いに行く 思案する中途半端は大嫌 思案する脳がちんまりまとまりぬ

誘いの罠に思案投げ首ひっかかる 凡人の思案カレーか牛丼か もう思案しなくてもいい紙おむ 思案は別愛する人はそばにいる 底ついた思案へモカを熱くする 思案する茶柱に檄とばす 投げ首の医者に委ねるのはよそう 前向きの思案へ神は味方する 窓際の思案他人のハエを追う 歳かしら思案の枠も狭くなる 馬鹿らしい思案だったよレントゲン ちょっとした暗示に触れてみる思案 希久子 英壬子 かすみ つづや

文

行ったり来たり熊もいっしょに思案する 何れ来る日は思案の外に置いておく 錆びついた頭へ神の鈴を振る 天気予報も思案に入る旅プラン 父ちゃんに内緒の株がまた上がり

白いうなじで思案されると負ける 思案する為にメダカは群れたがる コスモスのゆらゆら思案続いてる つずつ思案ほぐして愛を積む たず子 しげお

花道で一 子の思想尺貫法で計れない 親バカの目では子供は計れない きっちりと計れば客の目が光る 八方美人きみの真意が計れない 許される距離を計ってする浮気 思案中らしい尻尾たれている 思案する男結びに賭けてみる 思い余ってコスモス畑の中にいる 思案する舞妓の指がまた白い 目立たない位置で思案を重ねてる 思案して長女に頼る手紙書く 思案する犬に夕陽がよくあたる 思案した果てを一蹴されて秋 思案しにおんなの風呂は長くなる ピアスまではずしてはかる体重計 白黒の思案は神の目を盗む 飾られた石はさびしく思案する ひとり言が増えて男の物思い 秋の風思案の糸がもつれてる 吊橋のゆれに思案の旅心 結局は実家へ泣きに行く思案 夫一婦が思案する 河 内 天 笑 はじめ 扶美代 定 あやめ 賢 定 扶美代 かりん 保 重 恵 恵 T 選 義 + 子 子 子 的 葉 太 男 子 風 女 丁寧に松茸計る八百屋さん 計りごとするには声が高すぎる 計画になかった妻の車椅子 愛情が冷めるとベルが作動する 計られたと気付く霊柩車の中で 恋心計るハカリを捜してる ライバルが間合い計っていたらしい 計量のスプーンで出せぬ母の 内堀の深さ計りに酌がくる 言い訳の長さを計る砂時計 損得を言わぬ計りを胸に抱く 計りごとにしては見事な蜘蛛の 居酒屋は尺貫法で呑むところ 多い目に計ってくれた小商人 計りごとに乗ったふりして踊ります 執念の足で計った日本地図 日に何度秤に乗るのダイエッ 計画は利息で遊ぶはずでした 物差しを沢山もって丸く生き 目分量だけどいつもの母の 熨斗袋義理の深さを計られる 行列の長さで計るものがある 急にやさしくなった奥様の計り へそくりを出すタイミング計りかね 血圧が上がるナースがひとり居る 紅葉に秋の深さを計る道 美辞麗句心の底を計りかね 八間を計る目盛りのない秤 味 1 事

> 計算がうまくて人が寄りつか きっちりと計れば右手長かった パックしながら娘と妻の計りごと あっち向いてこっそりウエストを計る 幸せの尺度を下げて満ちている 82 瑠美子 たもつ 洞 寿美子 庵

昭秋

参観日大人の計り置いていく 江 П 度

いつふみ 笛

計算の外へと子等が泳ぎ出す

かりん

昭 P 賢

妻の目がきらり可愛いはかりごと

ますみ

たもつ 伽 倫

ダン吉 つづや セツ子 はじめ 扶美代 希久子 輪 楠昭子 江口度 藤井正雄 寺川弘一 板尾岳人 中澤伽羅 玉置重人 金井文秋 榎本舞夢 安達はじめ 事務所へお知らせ下さい。 左記に掲載します。もし誤りがありましたら 小池しげお 海老池洋 川久保睦子 谷口義 岩佐ダン吉 岸野あやめ 西内朋月 寺井東雲 川原章久 福本英子 阿萬萬的 高須賀金太 田辺鹿太 河内月子 坊農柳弘 平松かすみ 長浜澄子 黒川紫香 浅野房子 一本勇太 出口セツ子 堀端三男 西口いわる 高田美代子 神夏磯典子 鴨谷瑠美子 板東倫子 坂上高栄 石原靖巳 石森利昭

正大

修

森下愛論

山本希久子 宮西弥生

吉村雅文

前たも

宮崎シマ子

宮口笛生

本年1月から11月までの皆出席者の氏名を

本社句会皆出席者(順不同



毎月25日締切・30句以内厳守

長谷川呂万報

晩婚に期待ふくらむ仲人口

岸和田川柳会

よろしくとたのんだ口裏高くつき 娘と妻が口裏合わす指輪の値 介護認定口裏合わず母卆寿 口裏にちらりと見えた二枚舌 口裏を見抜き許すも母の愛 美しくなれと地球へお月さま 期待する方が無理です蛙の子 弘 蛙

武

城

どん底に落ちたら笑うことにする 帰省した実感素足に履いた下駄 用心に亡夫の下駄がものを言い 少し酔うてストリップへ来た宿の下駄 庭下駄に作務衣の似合う禅の寺 舞子はん厚底下駄をはいてはる 富志子 路 萬 辰 房

郎

まさお

ひとつずつ罪のうろこを取って死ぬ 慈悲深いわたしは蚊にも餌をやる 縋りたい気持ひたすら写経する 紳士面さげて痴漢で突き出され 大臣の理屈を聞くと腹が立つ

柳宏子

尚

求

プライドを楷書の中にひそませる

つまでも暑い九月の扇風機 柳塔おっぱこ吟社

気どっても岸和田弁が出て困る 困るのは美女にホテルを誘われる 柳宏子 さよ子 的

官邸が困る日銀独自性

ウインクをされて困った人違い

お誘いにうきうき老母のコンパクト

みつ江

モシモシでぷつんと切れてから

0 闇

胸張って生きたつもりの半世紀

よしみ ひかり

あきら

家業継ぐ嫁が峠を越えて来る

しげお

風だけが聞

いてるバラの独り言

木村あきら報

スミ子

高

五.

月

く生きまるく納める舵をとる

眠り誘う総理の駄弁聞いている 脈ありと見たかたびたび誘われる

約束も果さず姉は一人旅 何もないが笑顔を膳にのせて出 十薬は欠けた土瓶がよく似合い

旅の荷を軽くする知恵ついてくる 残暑まだ嫌われながら居候 裏道を知りつくしてた竹トンボ 赤とんぼひょっこり都会に迷いくる 深む秋来し方想う鬼ヤンマ 約束をきっちり守る飲み仲間 約束をインプットした置時計 いやなこと忘れ上手で丸く生き 赤とんぼ歌しか知らぬ子供らよ

河内弁の電話へ勝ったなと思う ハネムーン電話に泣いた父の声 雨の日の電話ばかりがよく弾む 携帯で晩のおかずを指図する 彼岸花母よろこばす十年忌 高槻川柳サークル卯の花 川島諷云児報

お誘いの電話に妻の目が光る

誘われるうちが花よと受けている

ズ川柳会 山崎 君子報

1

終章の花博を舞う鬼ヤンマ

ミサヲ

碁敵に持って帰れと時雨傘

げんこつを開くと消えてゆく憎悪

7

網もってトンボ追う子はもう見な 貴代子

トニア

男みな旅人私は羅針盤

はつ絵 武庫坊 いわゑ 子 君

とぼけるに限るお金のいる話

核心に触れる話はとぼけてる

また元の二人になった羅針盤 よく出来た妻で家庭の羅針盤

おとぼけでないが先立つものがな

洞 甚 苑

ダン吉

日本丸舵

取り巻きの舵にゆらゆら乗ってゆく 遺伝子を憎んでいない花の種 舵とりを違えて不況の海にい のとりかた違うてる る

とし子 雄

さりげない心づくしが憎いほど

八つ裂きにしたい男の飯を盛る

愛しさも憎さも少しある遺影

女

紫 義

突っ走る脳波にストップ羅針盤

羅針盤余生まだまだ先を指す

澄

-110 -

あやめ

波留吉

手鏡に見はなされても生き延びる 朝の靴履くと背筋が伸びてくる 親切の一言胸に灯を点す 不況にもビクともしない妻の 古日記余白にこもる地獄の目 大ヒット孫で一躍時の人 世界一極めた背中に国旗舞う五輪大会 腰

札入れが欲求不満を繰り返す 明日また逢えると信じている握手 里帰り胸中察した母の膳 勝手とは言えども雨はもつ要らん 言いたい事胸に納めて家族の和 健康であの世の迎え憧れる 人生は山坂越えて共白髪

寿々女 坊太郎 いさむ マツエ 任延

宮崎シマ子報

子を思う心と同じ乱れ雲 父きびし母はなつかし流れ雲 ご自慢を聞かねばならぬ耳である 雲ゆきをじっと眺めて黙す老い ぼんやりと雲見ているも憩いなり 隠すからプライバシーを聞きたがる コスモスは雲の流れの方に向く かけて思慕を匂わす花の首 欣史子 シマ子 喜美子 あずき 能

達筆も下手も同じく出るコピー

美

小西 雄々報

川柳塔みぞくち

久 鈴 公美枝 枝

ちらほらと愛の目盛りが見えはじめ

九条に鎧兜が見え隠れ

月下美人月の雫の精になる

長月の夜空は澄みて青い月 満月の夜風に触れた鶴と亀

> 名月に渇いたこころ潤った 満月にすすき団子がよく似合う 風に乗り月の砂漠を歩く夢 見え隠れしつつ蛍が近

まさる

かおり

月明りほんのり香る花がある

八重子 吟

勝

月沈む頃呱々の声高らかに 団子だけ食べて月など見ずに寝る 満月を仰げば亡妻が降りてくる 満月に童話のうさぎ飛んでくる

柳塔わかやま吟社

本物はまだ見たことがない名画 チラホラがやがて怒濤の革命に 冷や汗の後の祭りの誤字脱字 コピー機に涙ひとつが無いのです

偽札へさてこれからの使いみち 拡大コピーしても蛙の子は蛙 コピーして送る私の載った記事 コピー機の中に心を置き忘れ すぐ秘密しゃべるコピーの無節操 射月芳 三喜夫 裕豊

輪 子

佳句地十選

(11月号から

男ならいっぺん引いて見たい山 収穫祭終えると冬の絵に変わる 鉢菊を褒めて切り出す祭り寄付 お茶くみと言うならコピーしてやらぬ 念のため誓詞のコピー取ってある カラーコピーしたくなる程嬉しい日 佐代子 精鉄 正 博

智恵子 弘.豊

正康 江光女子枝代

17

牛尾 緑良報

約束を果たせないまま午後は雨

人生の午後リストラで知りました

あき子

美智子

慌てずに人生の午後描いている

あすのことケセラセラで昼の風呂

秒針が気だるい午後を持て余す ガーデニングに凝って一人のおそい昼 フリータイムあってもいいな主婦の午後 彼岸花午睡の癖はまだ抜けず 世間体気にせず強歩午後の 狂う世を嘆く静かな昼の月 誤字脱字ちらほら交じる母の手記

さち子

午後一時コンピューターも眠らせる 午後に来る母に好物ちらしずし 千寿子 紀美女 和君 重枝

川久保睦子報 静 江

笑う日を一日多くする夕餉 正論を戦うのなら矢を貸そう 同情が中途半端で有難い 田 あずき 治

頷いた日からドラマが始まった 明 子

花束の真ん中にある請求書 横道に逸れ面白くなる話

諷云児 子

玲

切り捨てた男運から這い上がる まだ燃える火種が胸の奥にある

裏道にプライド捨てる穴がある

人脈が切れて危険な首になる

川 大 阪

ただし

藤

坊農

勘だけが僕の行く先知っ 決断は国に任せた吉野川 真っすぐに勘で歩んだ人の道 人生に深呼吸 てい 3

夏の日が一番好きな茄子の艶

定年で脱いだスーツが欠伸する

笑ってる僕に良く似た地蔵さん 逃げ切ったつもりが嘘を置いてきた

りの下手さを独りかみしめる

トヨ子 美代子 ちょっぴりの勘が作った母の味 すかたんと責める言葉の温い友 勘違いしていましたと思い 決断はしたが実行伴わず やり

口下手にマイクが回る三次会 雨ほしい息苦しいのも年のせい 公園を斜めに私の指定席 いい話持って来たのに吠えられる

はじめ あい子 高 奪われた領土がいまだ遠い位置 すかたんも度重なれば個性です いい顔がしたく決断ウヤムヤに

一昭昌酔

新米を食べて余生の伸びた幸

地蔵盆はしゃぐ子等に亡子を重ね ヒビ入りの鏡に映るピカソの絵

炎天に三日の命歌い上げ

志華子

リーダーの決断生死分けた山

直鉄聰

久留美 昭 決断へ応援くれる妻と子等 上弦の月が奪っていった影

とし子 欲一つ減らすと勘もよみがえり 決断が揺れて捺せない印一つ 一筋の匠に冴える勘どころ

原潜の事故見に魚寄ってくる 勝負師は勘も味方にしてしまう 坂道で厚底靴を脱いでいる

一朝

子 風

元

身に憶えないのに噂飛び歩く 身勝手な親で子離れまだ出来ぬ 好き勝手通した過去が身にしみる 幸せは身近にあって気がつかず

吉之助

女

IE

睦 春典

他人さんの励ましで得たエネルギー

とりあえずビールは喉の天国だ 堪忍袋の紐がほどけてゆく怖さ クーラーに寝かせて貰う熱帯夜 未練とはもしももしもの別れ道 愚かです甘い言葉にのせられて くすりやの回し者ほど数を飲み

朝

寿美子 あやめ 峰 決断がついた一歩を踏み出そう 台所今日も茶碗の割れる音 感情を許す津軽の勘どころ

> まつお 比呂志 本蔭棒

敏

白

決断をしたのか鼾たてている どすかたん亡夫の怒声懐かしい 決断を急がす風が生ぬるい

決断はしたけど金がないのです

ダン吉 柳宏子

玄関に難儀な靴が脱いである

して取ってさわやかメダリスト

メイドインUSAの孫帰る 揉めごとは四捨五入して聞いておく 下心ないから花は美しい 悪者になっても守るものがある 国境が溶けて涙のめぐり逢い 雑踏の中で自分を見失う その割に覚悟のわるい偉い人 父のげんこもほどほど枯れて丸くなる ああそうかそうかと彼は聞き上手

道 千

柳弘報

民

かよこ 酔

なついては離れて消える影法師 身を引き締め尼僧山寺守り抜く なつかれているとは知らぬ鬼の なつく子に肩車して見る花火 なつかれて小言のみ込む祖母の顔 面

美人からウインクされて身構える 身勝手な不法投棄を雨が抱く 弁解は自分自身に言い聞かす

希久志

一章

また一病生きていくのは難儀やな パックしてまだ老けたくはない素顔 世直しを人に叫んでいるパック 余生も
うパック旅行と
決めている パック詰め安くても無駄老い二人

ルイ子 芳 満 飛欣庸 子子鳥 之佑

玄関で勘が当っ たかやくめし

この人と心に決めた日の記憶 タイトルを奪った汗が美しい

柳重

弘人風

御無沙汰の電話ちいさな嘘をきいている 少々の礼儀外して夏を住む 小さい秋のかけらも見せず天燃える 輪の中に入れぬ無口 貝になる の天昇りたき走り葛 武庫坊 年高 美 代

美智子 百合子 波留吉

難儀なことおきた時だけお仏壇 難儀して歩いた道が懐かしい 難儀して建てたお城に一人住む 難儀やなあ 二階に何を取りに来た 十七歳 難儀な歳になった孫 一円が足らず難儀なお買物 ただし 幸 益紫

代

美しい言葉はいらぬまた会おう

正剣報

111

万歩計今朝も彼女に逢えるかも

友

はびきの市民川柳会

徳山みつこ報

リストバンド腕に覚えのある標 御帰館の夫は楯に部下を連れ 門前の老妻が柳句を批評する 五分粥の母にサンマの身をほぐす 五七五の五で立ち止まる万歩計 有終の美に紅葉を散らす木々 勇気出し飛んで渡れた溝の幅 コンバイン数珠の先頭悠々と 神仏を恨んだころに加護のみ掌 水漬く屍ロシア原潜海の底 めしどろぼうよくもつけたよお漬物 正虹四高 晴

郎明翠夫笑夫

ヨーイドンスタートダッシュが苦手です 屠殺場で若き視線は何思う はにかんで陰陽石を指すガイド 捨て石の使命カラスに説いてみる 怒ってるのか地球の噴火止まらない 人愛すそんなに罪な事ですか 水溜り飛んで若さを確かめる ロ箱に節穴がある二ツ三ツ 秋道哲 吉 博郎 則 夫

まあまあと仲裁銚子さげてくる

かつみ

舐め合うた傷が救いの俺お前 温暖化救ってくれと地が叫び

ほどほどに折れて頑固と言わせまい

生きざまは変えぬ頑固な父の背な

あすなろ

おっとりと口論してる京女 言い勝って淋しい風に会っている 口論になりそうわたし貝になる

> ダン吉 みつこ

乾いてる非の打ちどころ無い男 嘘少しまぜ終焉のドラマ書く まだ主軸回して機嫌の良い男 大丈夫と聞けばニッコリVサイン 着信は不採用ばかり寒い朝 占いが気になるまずいワンカップ ートーベン僕は雨の音が好き

進

携帯が僕の行方を捜し出す 日本の行方が分からない総理 インターネットに地球の行方託す気か 電話くれまた逢いますとそのまんま 産声高く行方期待の三代目 この国の行方や如何に世紀末 久仁子 吐

大声が出るので口論負けません口論でためたストレスふっ飛ばす 口喧嘩絶えない夫婦楽しそう 口論で済まなくなった遺産分け ゆっくりと口論を聞く右の耳 老い二人口論までの馬力なし たけし 聡 平

柳五郎 佐加恵 まさお さり気ない医者の言葉に救われる アピールの届かぬ愛が老いていく ハイハイとアピールしてる子当てられず 自閉症沈む夕陽に救われる ひらめいた一手に窮地救われ 奇抜さが受けて社長の目に止

まる

扶 獏 庸 美代 沓 佑

風

矢内寿恵子報

りつえ

いい人と言われ頑固が玉にきず 頑固だが筋を通した祖父だった わたくしも頑固あんたはなお頑固 心打つ頑固な父にある涙 空缶のようにけられたなと思う けって出た故郷を夢が呼び戻す けられても踏んばる力親がくれ けり返す術も覚えた雑魚の意地 八方塞がりけった位で解けます けり返す力が湧いた闘病記 頑固一徹通した父にある重 踏み台は蹴って自分の足で立つ 喜美子 あやこ 地佳平 悦妻辰 さちこ ず

墓下の頑固も恋の邪魔をする 受験の子頑固に徹夜してるらし 聴診器頑固の本音聞いている たばこ止めてまで長生きはしとうない 頑固者同士無口な夜が明ける 頑固者同士今夜も背を向ける 頑固一徹効くお薬はないですか みさえ こふゆ はるみ はじ芽 たづ子 ひでの

-113 -

はまゆう川柳会 中後 清史報

夢之助

の旅にわくわく集う駅

エリートの

妻まで鼻が高くなり

かほる

房毬君

利に疎く人の好いのが玉にきず 理屈より本音で言えば済む話 力作に互選の票がいつも割れ 力んでもついていけない老いを知る 力説をすればするほどそっぽ向く 赤ちゃんも真っ赤になって力んでる 動乱のはざまで漁夫の利を占める 文明の利器を使えぬ老いの脳 御利用はお控え目にと取る暴利 力んでも前に進まぬ運の尽き 力んでも園児のやわい力瘤 恵美子 さだ代 サト美 美佐子 すみれ てる坊

登

也

ああ言えばこうと逆らう反抗期 尼崎いくしま川柳会 年代報 利ぼん

理屈抜き君の笑顔に惚れました 理屈では勝って虚しい風が抜け 理屈好き周りに誰も居なくなる

そばの花いつか古里捨てた僕 御馳走は食べ飽きたろう里のそば 赤ちゃんのやわ肌そっとついて見る 背くらべしたどんぐりが転び合う 団栗ころころ童話の森に秋がくる 秋たけなわどんぐり落ちて陽の匂い 子供たちどんぐり拾いおままごと どんぐりで遊んだ遠い幼い日 二日酔いそば一杯の朝の膳 十四郎 ヒサコ 正

> 夕焼けで小指と小指絡んでる 夏焼けの肌をいたわる秋日 詩の中の告白ひとり熱くなる 淋しさに秋の花野にしゃがみこむ コスモスが満開ひとり持て余す 笑い仏の眉の辺りにとまる秋 やわらかな言葉にいつも裏切られ 鳳仙花生まれついての肌の色 素給せの肌を祭りの風過ぎる 笑顔でも肌の合う人合わぬ人 古伊万里に匠の肌が今息吹く ビーチバレー若さが跳ねる黒 赤ちゃんの餅肌そっと触るなり コスモスが囁き合うてる向こう岸 が肌

川柳ささやま

靖子報

子

江

夢一つ鞄に詰めて始発駅 どこまでを追って走るか運命線 始発駅今日を生き抜く顔ばかり 人情の温さをくれる里の駅 ふところに火種を抱いて駅を発つ あれ以来二兎は追わない木の根株 輪の善意を挿した朝の駅

多美子

とみ子 八重子 美智子

つや子

リストラが夕陽背にしたハーモニカ ローカル線走って来る人待ってくれ

史

夏を語ってさようならはひらがな 腹時計老いてますます正確に おどけ上手口をつぐんだ吾亦紅

> しづ子 満寿蔵

7

静

子

比ろ志 武庫坊 選ばれた西瓜の自慢聞いて食べ 選ばれて知った重さの玉の汗 エリートでない子優しく居てくれる

半蔵門 [景]

義

老いの日が選ぶ三字の安楽死 駅前の風旅人へあたたかし 花一輪わびしく咲いた無人駅 エリートと言われて医師にある誤診 エリートと聞けば話がやりやす 京大は出たが家には寄りつかず 10

> П すず子 かつ子 美紗子

柳クラブわたの花 大内 朝子報

陽炎を残して追った夢も消え 肩寄せてすごい美人と雨やどり 屋根叩く雷雨話の腰を折る 拾った子犬泣き泣き元へ戻さされ 青空へ手を伸ばしてる肩車 キャンドルの炎に幸せが映える 昔話囲炉裏の炎語り出す 縁日の思い出父の肩ぐるま 首輪代りに妻のケイタイ持たされる ミツ子 剛治 君道 八寿子

世にそむき存在みせたいすねた奴 節曲げず頑固に生きて悔いはなし 定年の夫に感謝の花束を 火の玉となって商戦勝ち抜こう 夏バテの沈む夕日が赤すぎる しょうむない話に男首かける 土手一面花の炎がおおうさと 美千子 春 子 枝 風

明

-114

ショベルカー嚙みつきそうに見おろして 陶工の炎見つめる厳しい目 嘘でしょうあんたの小鼻動いてる 山怒る炎と灰に島を出る 飛べない蟬草むらにおく炎天下 国のつけ小さい肩も担ってる キャンドルの炎やさしく娘が巣立つ 一杯のワインに炎える胸の芯 表札を少し大きくした虚勢 **肩透かしされて期待の華しぼむ** の夫婦頑固と我慢バランスで 朝正友

知佐子 いつふみ トシエ 春 まさと ますみ 江 子

竹原川柳会 時広 路報

減塩の煮物にいつか慣らされる 重箱へ煮物をつめて里の母 残る胃にやさしい煮物食っている 目分量でうまい姑の煮ころがし お隣も主人が煮ものするらしい 褌担ぎに煮汁が残るチャンコ鍋 トンネルを抜けると父が立っていた 煮えきらぬ夫に一言活入れる 金木犀そろそろ香る曲がり角 どうしようストレス溜まる話聞く トンネルを抜けると故郷が光りだす トンネルを出てから返事するつもり トンネルの向こううっすら浄土の灯 危険です食欲の秋やってくる (大1) 千 千年枝 比呂子 汎 喜久恵 正房 菁 笑 蘭 子 美

道子純甫 大空をトンボの家族うれ 満天の星空を行く走馬灯

空気のような愛が男はありがたい 今朝男子誕生空は青かった 青空の深さ私の色を刷

明暗を分けた僅かの車間距離

価値観が違う二人で面白い 人違い生きているはずのない夫 間違いを誤魔かす苦労もついやだ

澄江高

美栄嗣

子

フルムーン財布は空にして帰る 京の空若き日を京友禅に 果てしない空おいてきぼりの私 の上の小さな空は僕のもの

亀岡

西宮北口川柳会

やわらかい糸も織りまぜ輪が和 木綿糸で縫うから温い母の愛 母の縫う絣が匂うしつけ糸 糸口へまだ恩返しできてない 綾取りがからんで心つかめない 震災の証また一つ消えるビル

句読点打って人間取り戻す 打ち寄せるIT風も馬の耳 愛憎の糸からんだりほぐれたり ミシン糸のリズムも涼し白い服 未練断つ波止場の風がほほを打つ 水打って客待つ顔になる女将 どうせなら金糸銀糸で老い紡ぐ 落胆へ手を差し伸べる蜘蛛の糸

> 武庫坊 哲子

赤は赤主張を通し独り闇 納まらぬ私の胸に大文字 文

×

諷云児 Ŧi. 7 る 月 4

陽のしずく煮つめきわまる柘榴の朱 お百度を心で踏んで煮込む粥

不

打つ腕を甘く見たのか曲がる釘

性転換わざわざ白を黒にする 雷がわざわざうちの空通る

念願の宅地に礎石の杭を打つ 碁敵にとどめを打って旨いお茶 そばを打つおやじ老舗の顔になる

夏貞静 年喜子風枝恵枝生

口の飴溶けても結論間に合わぬ 初対面で身上調査するおんな 損得で動かぬ人で頼られる 価値観の違いは愛で埋めておく

求房正たず子 芽子坊子

哲子報

思い出は母につながるふかし芋 この道を行けば寺なり彼岸花

トミエ

太

妻の里あって親しみ湧く路線

絹能 比ろ志

靖 E

一千円ぽっちと孫の苦い顔

石上

川柳会梨花

折りたたみ傘を出がけに渡される

富喜子

千ルイ子

代

しげお

悦子報

千円のにせ札裏は二千円 空財布二千円札飛んでこい 一千円出すけえ腰を揉んでく れえ 石花菜

美恵子

呆けぬ間に二千円札目にきざむ サミットで二千円札エット撒き 和歌子 蛙

幸せが続き落ち着けなくなった 親も子もすぐにキレだす怖い国 かぼちゃにも主食つとめた過去がある 白紙でもわざわざ票を入れに行く 夫婦してボタンの穴のかけちがい かつみ 忠良 まさ子 一枝

-115 -

ま夜中の番号違い聞いた声 友達の電話番号うかばない 野兎になって仏に抱かれよう 心ならず野太鼓打った宮仕え 私の視野で大きく育つ孫 野性の子がだんだん少なくなってくる

行

男

真

番号で呼ばれ獄舎の日が長い 割りきって落ちるほかなし砂時計 番号順に人間を処刑する 番号をつけ人間の臭い消す 番号順我慢しきれぬ油照り

柳弘報

求

美千子

道

朝

螢

遺産分けじっと待機もそれっきり 土掘れば化石の声がする大和 菊作る夢を託して土作り 許す日の言葉を胸に待っている 振り袖も背広も米に化けました へそくりも土産に化ける里帰り

> 季世恵 真理子

酌ぐ人のいない盃九谷焼 あしたから出直す靴に紐がない 闘志満々腕をさすっている補欠 横綱に土つけてからつく自信

> あやめ とし子 さと美

竹べらの土が古代を解きほぐす 化けて出る程も未練はありません 病院へ化けて出てやれ医療ミス 美白ガン黒化け物が出る戎橋 種袋じれて待ってる秋の土 いの土地とも知らず伸びる草

> ただし 子 砂 待機していつか世に出る馬の足 やきもの師心が通う土を選り 碑を去らぬ父の化身か鬼ヤンマ 変わり身の早さをおもう蝶の羽化 化かされた振りして乗った泥の船 寝転んで大地の鼓動聞いてみる 先手読み心のゆとりもつ待機 花束の渡す順番並ばされ 大盃になみなみとつぐ綱の味

(石) 悦

高

田辺 鹿太報

盃を片手に生きて来たいのち 盃の鶴が飛び立つ大安日 女よりおんなに化けるのど仏 ぐい吞みを選ぶ小さな祝い事 分校の素足大地を踏みしめる

秋

雄

声出して読めば山河が見えてくる さわやかに恋を譲って旅に出る さわやかな笑顔で分かる夫の朝 軽い麩が重宝されるお吸いもの 泣く時は一人の夜にして欲しい 活気付けせめて華やぐイヤリング 亀与子 ま イサミ 哲尚鹿

利

ITの時代は夜も昼もない

美和子

ひっそりと離島の夜は更けたまま ーゲンへ走る活気に妻が いる

十四郎

だんだんと無口になった定年後 本当は何も知らぬから無口 手花火をかざし迎える新仏

弥陀の手の上に転んでいる無口 八月の空を仰いでいる無口

実印のいらぬ相談なら聞こう わたくしに来る相談はしれて 相談に乗れてよかった茶がうまい 相談は妻だけにする子供達 いる

相談をされてこちらが眠られず やんわりと断る言葉探してる 升ビン下げ相談に行ったまま いしたいと大きなお腹連れてくる

柳ねやがわ(前月分) 江口

場所取るにこんなに苦労する花火 お喋りが無口になって恋をする 線香花火しめって母はもどらな 線香花火ポトリと闇が支配する 遠花火兵士は戦思い出

和長直

洋

ペン持てば無口な人の様変り

嫁った娘のいつ帰ってもよい二階 金のいる相談だけは持って来る 記念樹も二階を越えて子の門出 階段に手摺りをつけた母思い 静か過ぎても不安二階の子供部屋 三世代二階住まいで揉めている

昼網の活気を妬む通り雨

通院と知らずに動く万歩計 ふる里の夢断ち切れぬ帰化 母さんの退院家中活気づく さわやかに孫とやさしい英会話 ふるさとの祭囃子に父母はせる

妻

夢之助 弘 美智子

かすみ 子

子風野

勇太朗 たもつ 沙置子 日出子 文 朝 英壬子 あやめ ルイ子 修 成 栄 清

手洗いを貸してもらったパチンコ屋 尻尾にも充電をして出掛けよう 夕顔満開門灯を消しておく いちばん早い秋を見つけた不眠症 思案して水が流れてゆく日 冬葉 度

東大阪市川柳同好会

豊作を見れば心地のよい疲れ 疲れたら帰りたくなる老母のそば 心地よい疲れ覚える朝寝坊 精一杯膨らむ明日は咲くサイン 小切手のサイン自信に満ちている 妻のサインに首を振っている朝 故里野菊竹の華咲くミレニアム 竹割った気性に男従いて行く 竹の花咲いて不吉を予感する 青竹に野菊一輪山 柳宏子 シマ子 朝 たもつ

男

秋

耳底へ愛の時間を溜めて居る 計の知らせ白い時間が過ぎて行く 雨止むなもっと二人でいたい時 疲れずに大きな海を泳ぐ母

千里

度

緑

好奇心チャンスを求め伸びて行く 花束のリボンが揺れる悪だくみ 悪いのは国の予算が多すぎる 悪循環いつまで続く物価高 悪友に誘われているボランティア

このピンチ我慢でしのぎチャンス待つ

登

陳列に並べてわたしを倍にする 泣きながら下宿のママがくれた箱

ートブレイクの間で慌てる白

い嘘

自家産の藁にこだわるしめ飾り

紅紫朗

扶美代 夫

藁ぐまを積んだあの日を思い出す 神さまに捧げる藁は青く干す

生薫

ワンチャンス大事に活かし優勝だ 待つよりも積極性がチャンス産

ひとり芝居の背中に負った荷が重い うとまれても米の出荷のとき迎え 飛び出した娘にも夜なべの荷がとどく 明日は嫁く娘の荷の中に母のメモ

池

はじめてのケース女性の太田知事 判例があって判決予想され しっかりと包む歪なマスカット 風ぐるま水子地蔵の群れに舞う 満月に誓うた愛が欠けてくる 欠けていく月が侘びしい女文字 ナイスミドルに呼び止められた心電図 満

月姫と混浴夜の露天風呂 妥協するたびに手馴れた塩加減 結局は独りと思う昼の月 好物の羊かん食べて仏顔 笑い袋落としてからの息詰り 電磁機のケースに入る予約する 満月も笑う夜更けの千鳥足 三日月にプランコ掛けてのぞく 明日

ばっは

のぼる

甚六は荷が重すぎてパンクする 余吏子 寿 悦

あれは僕人の波間をゆっくりと 公園の蟬もう泣かぬ炎天下 ひろこ

けい子

昭 夕

子人清水子子

出口ない森で慌てる影法師 骨のない男で消えるのも運命 車庫入りの電車で肩を叩かれる いっぱいのケースを叩き込む躾 灯明がゆれる我がままかも知れぬ 遠い日の亡母に習った返し針 特別のケースとカルテ手を打たず ペンケース一年二組と書いてある 目歯耳がお年ですねと言ってくる 少年の無邪気と妥協のない

> みきを 喜代子

三和子

虹

萩 乃

柳塔鹿野みか月 土橋

次の間に私の好きな軸掛ける 信頼して抱かれていますスヤスヤと 次の間の爺ちゃん達の腹話術 居心地がよいか次の間から戻らない 爺ちゃんは原っぱへ出て杖を振る 和武

画廊見に今日のおしゃれは念を入れ 和やかに画廊ふれ合う趣味仲間 雨三日見ぬまに月は丸くなる 次の間へ向けて髭根も樹の枝も

ようこそのことば画廊で凜とする 画廊から抜け出たような人に会う 画廊には自慢の壺をでんと置く 夢買いにこっそり画廊まで歩く みどり 節

かつ乃

-117 -

美しい夕焼け画廊から燃える 未熟でも咲かす画廊へ飾るまで 天高し小さい画廊に赤とんぼ 画廊から始まり消えた初恋よ 人の面かぶって画廊見た疲れ 画廊からこころの炎えることを識 画廊からでっかい夢を描いている ふるさとの藁打つ音も消えてい 藁灰のぬくもり食べる芋の 画廊からよろこぶ女の声がする 一枚の絵を抱きしめている画廊 一本のカンフル剤となる画廊 藁稭も抱いてる赤くなるものを ŋ 節

孔美子 くに子 はるお 汲 螢

> 結納の目録だけはボクが書く 目録はいらぬ裸で嫁に来い

修 伸

寿美報

味覚より先ず目で食べる京料理 家内には味覚音痴で通してる 本物でないと見抜いている味覚 秋茄子の味覚は嫁も知っていた おふくろの味が一番性に合う 毎週のゴミの日知っている鳥 毎週の通院生きているあかし ぬか床が包む味覚の茄子の味 なぎさ のぼる 美 佑 里 的

毎週違う女だと思う花時計

絵手紙が毎週寂しくない任地 週休で小遣い妻に渡される

生きるため時には鬼と手を結ぶ 靴紐をしっかり結ぶ二度の職

八月に勝負をかける塾カバン 雨乞いへ押され踊り出すピエ

牛乳をスリルと共に飲んでいる

踊り子の汗がとびちる土佐の夏 踊り子にパワーをもらう夏祭り 盲点があって人間丸く生き 評判の美人何かが物足りぬ ライバルに盲点ひとつないあせり 院内で感染すると言う怖さ 堅物も妻に盲点握られる

人妻と踊り佳境で目が醒める

熱三日こんなに旨い粥の味

きみ子 縫代をたっぷり取れぬくらし 結び目が固く自由にはばたけぬ 結んで開いて愛は残らぬ鳳仙 適齢期男結びをしておこう

少年の夢に目盛りのないメジャー メジャーカップ今日はここまで飲んでいい ダイエット メジャーもほめてくれている むき

結ばれた紐の長さで円を描く 老夫婦嫁に味覚を合わしてる 肝臓も週休二日と言っている 目録で起承転結先ず分り 目録の重み戸惑う二DK

宏

日出子

子の嘘を見抜くメジャーを取り換える 川竹 松風報 珠

かず子

朝ばっは アキラ 文 直 秋 ほたる川柳同好会

黙ってる顔に嫌いと書いてある 同じ空気吸うのも嫌になる夫婦 好きなのに嫌いなそぶりしてた春

好き嫌い無いけどうまい物が好き 好き嫌い我が人生長生し 好き嫌いいえぬ時代に生きたはず 本当に嫌いなのかと親の顔 五十年飽きず惚れたり嫌うたり

足元の虎穴は見えぬ千里眼

高 知

人間のうたを探しに未知の

啓一郎 てるみ 郎 三歩目のどうにもならぬうす氷 肩の凝る話へ停車しない耳 土壇場のスリルを神は待っている 肩の凝る話は止そう北新地 凝り性でお金のことは無頓着 果実酒に凝った思い出瓶にあり 形見分け小物に凝った母の影

よさこいが出世しました全国区 世は平和八十路の母の舞扇 風鈴が八月の風呼んでいる 八月の未だ還らぬ仏たち 八月の陽を吸い込んだ梨の味 八月の少年の夢甲子園

千京松良栄

鳥香風雄珍

シマ子子

嫌いとは言えずストレスつのらせる 好き嫌い言うてるうちは未だ子供 嫌いなものダイヤモンドと美男子と 嫌っても嫌い切れない血の絆 田辺正三郎 まみ子 久敞直 セツ子 柳 子子次

絵手紙に凝ってるらしいよく届く 昭黒長 子 兎

正三郎

勝

上中が同じでスリル選の時最高のスリル余命を知らず生き 手料理をスリル味わうと言うた人 今思えばスリルばかりを追いし日 時刻表スリル味わう一人旅 料亭の味に近いと誉めてみる 縄のれん上司を料理しウサ晴らす 17

吉太郎

信 よしろう

江口

玉になろう玉になろうとしてる水 被害者のその手記に知る胸の傷 被害者も指紋しっかり採取され 軽い嘘大きくなって舞い戻る 愛犬もいっしょ被害地あとにする 玉砂利を踏んで謀反を考える 大うつしになった被害に息をのむ

親を看る介護計算外でした 余命表計算だけはしておこう 計算はうまいが家計簿は赤字 捨てられてから輝いたガラス玉 光らない玉だがわたしには宝 新築へ玉荵吊るす姑が居る

バランスが崩れ派閥が軋みだす 夫唱婦随見せたバランス戸口まで バランス上僕もついでに叱られる 真ん中でバランスをとるお母さん 三世帯孫がバランスとっている おしゃべりと無口バランスよい夫婦 遺産なし借金なしで終るだろう

央

風化した十代の夢稲を刈る

ちやほやと育ったパパを持てあます

秋

背信へ父の遺影が笑みかける 宇宙から祝電届く敬老日 サングラスとればどこにも居る娘 赤飯を食べて気づいた敬老日 生きてまだ真っ赤な花に魅せられる こ近所のばあちゃんに頼られている ランスが良すぎて夫婦すぐにもめ

みさを報

ルイ子

風

枕の下に遠い戦争いつもある 銭勘定すれば隣も遠くなる 近くでもこころの遠い人がいる 遠くから見守る故郷の道祖神 補聴器と補聴器内緒ばなしする

秋雄 17

合掌の指からこぼれていく頑固

勇太朗

葉

光子

あやめ

純潔は遠い昔の死語かしら 遠い恋虚しく風が来て座る ハニワの目遠い昔を語りかけ

子人子

夢多き十代だった揺れていた 十代の夢を探しに戻りたい 花火にもなる十代の玉手箱 遠い日の思い出深いラブレター イーメール遠い二人を近くする モニカ十代の夢詰めたまま

せ 風登 子 花 美

ひとり暮しは一人ぐらしの忙しさ ジーパンの穴から通す秋の風 日出子

かすみ

恋かしら食べものがのど通らない ダイエット食欲おさえ一万歩 病状がよくて食欲推し進め 食欲へ理性がきかぬ腹をもつ

宮崎シマ子報

マイペース頑固に通す蝸牛 頑固では無いと閻魔に言うつもり 頑固者きっと淋しい人だろう

たもつ

剛欣

治

ますみ

千年の塔を支えている頑 父に似てぼくも頑固になっ 流行が頭を越していく頑固

子通

平静を装ってきた両の肩 テニヲハがとけずじんわり肩のこり 万緑の肩書き消して地に還る わがままも笑って手際良い介護 リストラの肩やんわりと叩かれる ルパーさん来る日はわがまま隠しとく てきた

直

扶美代

ともかくもぶつぶつ言って日が暮れる 食欲が月給袋いじめ出す 異常なし聞いて食欲わいてきた 食べるものみんな美味しい旅の膳 大丈夫食欲もある夢もある 黙庸紀義邦 子弘昭章

ぶつぶつを聞いてくださる仏さま

食欲を満たして財布かるくなる 食欲があって楽しく生きている 食欲のある祖母がいて家安堵 幸次郎 弘

みさを

-119 -

折り畳み傘杖にもならず邪魔になり 金メダルもうCMに呼び出され 町にまだ昔に折れる辻がある 折れ線が示す努力の体脂肪 口で折れても父には父のプライドが ええ加減に叩くと釘も折れ曲がる 枝折りのみかんたわわに里帰り 程々にしいやその内友も減る 待ちに待つわがままできる里帰り 人気あるうち貯める奴使う奴 つくられた人気と知らぬ高い鼻 わがままだが結婚したら直します がままで子供にソッポ かれてる シマ子 とみを 勝 宏 文信 宏 蘭 美 子秋博

雨の通夜ぬれて集まる人気者 松本よしえ報

声聞いてほっと安心電話口 急用の不在電話が困りもの あの顔にしょっちゅう腹を立てている 性善説しょっちゅう私裏返す 電話では話つきない母心 口先でしょっちゅう丸め込まれてる ンタイと呟いてみてまわり見る きみ子 次 智 小 雄 玲 男 Z

> 携帯に有無を言わせぬベルが鳴る 携帯で妻の所在を確かめる 母ちゃんの地震で飯にありつけぬ 残り火を燃やす電話を待っている 長電話後ろの列の長いこと 解禁は近いと蟹が呟いた 紅の色をしょっ ちゅう変える女 喜美子 幸 節 康

水瓶の水はしょっちゅう替えている 地震かみなり親爺の力地に落ちた 何時からかひとりつぶやく癖がつく 日出子 ちよ子 重

呟きは橋の袂でふと止まる 道路ぞい何時も余震の住む古家 ああ今日も終ったなあと呟いた

築五年呟くように雨が漏る 怒鳴り声電話に出れば声変わり

ゆり子

風

夏痩せの女が長い電話する スワ地震妻を忘れて飛び出した

司

石谷美恵子報

岩美川柳会

長針は損でなかった広い視野 性分で損な方へはよく転ぶ 欲ごころ追肥振り過ぎ損をした 激論をきっかけ無二の友となる きっかけはどうあれ花が咲けば良い 論がきっかけ恋が芽生え出す 寛 生 漁

> 恥ずかしいよもや寝言でばれるとは 過信した健康よもや救急車 真夜中の電話よもやと驚かす

> > 知香子

英

きつ 振り出 昭和生れ女の城で芋を煮る 振り出しに戻りわたしをより磨く 振り出しの けは遺産血肉を争わ しに戻りゼロからやり直す 男が睨む遠花

きみ子

きっかけが縁で婿にと所望され 振り出しは同じどんぐりだったはず きっかけの傘もいつしか雨が漏 損をする野望は初手から持たない

和歌子

一睦

子 京

公蟹

子乃郎瑶

きっかけが摑めず秋を独り酌む 損しても楽しかったと日記書く

節

損しても穴埋めできる土がある 食欲の秋損したことは忘れよう 振り出しは未来バラ色だったはず 虫殺す愛は急所を外さない

中もくせい川柳会 田中 正坊報

腹心がよもやと思う背を向ける

見せられぬでも捨てられぬ絵が溜まる 敵方の一人によもや妻がいる 自分の絵描くのに誰に媚びるのか 自画像の絵筆は年齢を隠しとく 父のポンプ詰まらせたのは酒 賭け事はよもやがあるので面 白 10 正三郎

ふる里の山を描いたら冨士になる 見重

呟いてみることも無くあくびする

みち子

振り出しは鍋釜だけの四畳半 難問も急所を突くとすぐ解ける 賀寿恵

恋は卒業損得抜きの間柄

り出しで役がおいらに来る予感

男

気紛れに地酒求めて独り旅

地震かと貧乏ゆすり足止める 白米と梅干しょっちゅう食べている 仲良しでしょっちゅう喧嘩する夫婦

悠

大地震建設大臣飛んで来る

震度七の激論からつぶやきに

美恵子

-120

再会の肩たたき合うおでん鍋 運命は人の数だけあるんだよ

11 林 正

きく子

朝寝坊やきもきしてる庭の靴

この毬を押すと反応まだ若い ライバルの痛みへそっと傷ぐすり 痛くともここ一番のハイヒール

棲む池を追われさまよう痩せ蛙 雨の日は手毬つきしてうつ晴らす

舞尚

伽

羅夢

隣からあくびを貰い笑い合う 喝采をもらって道を間違える

これだけはと亡母に貰った琴の爪 逃げ道をあけて言いたいことを言う

遠澄房

野

私だけやきもきしても始まらず

智恵子 平成の路地に毬など見当らぬ 幸せなリズムでまりをつきつづけ 痛む足さすってパワー送ってる

喜美子 正雄 日の出

日出子

会美

義 蛙

現金は痛み止めにもなるらしい 瓶の中技あざやかな糸手毬

生きてゆく知恵を貰っている出会 拳骨をもらって愛と気づかされ

あずき

請求書もらってからの不整脈 貰う気で親に借りてる頭金

未練かな汽笛もドラも遠くなり

わかあゆ川柳会

松本はるみ報

近道をえらんだ毬が転び出す

毬のよう弾んでみたい老いの 飾り毬亡母手作りの宝物

初恋に再会しました背を曲げて その時のえくぼに負けて今がある 伐らないで山の叫びが聞こえそう 山ぼうし逢いたい人も白が好き ひとつ越えれば向こうは極楽か 恵美子 はるみ かつ子 ちよえ 好 毬ひとつ弾んでとんでまだ独り よい嫁に恵まれもめた事がない 母として生きた証の子が誇り まだ誇りあるから靴を光らせる ロボットが毬遊びする新世紀 痛いとこ突くも愛よ母なれば

その昔えくぼが僕を狂わせた あわてない妻が元気で居てくれる

言の言葉にみんな大あわて

純愛は雌に食われてなお愛し

児玉

さと美

柳塔まつえ吟社

恒松

白いテーブルにロボットが来て座る 酔顔に妻ロボットのような顔 ロボットのかげで不況の風が吹 ロボットの父は子供を叱らない ロボットが世界制覇を夢に見る ロボットのように衛兵交替

角とれて人の痛みも分かりかけ 銭などに魂売らぬ男の譜 よくはずむ毬がこのごろ秘密もち

子子子司子

叮紅報

秀 Ш

真理子 棚の上昨日のぐちが置いてある 棚の裏ふれてはならぬことばかり 手の届く棚に大事な物を置く 網棚に噂話をぶらさげる 八間にあき本棚へもぐり込む

智恵子

たけし

割引の案内受けてむだづかい 案内をされて座った抹茶席 台風で飛んでしまった案内板 愛らしい茶碗が一つ増えた棚 案内の旅で素敵なひとに会う

ひふみ

風邪抜けてすんなりペンを走らせる さよならをすんなり言えた秋の風 すんなりとしゃっぽは脱げぬ意地がある 玉の興案内状の字が踊り 得意という案内持って出る 知恵子 与根一 桂政 太 注

包丁を研ぐと砥石が喋り出す 包丁が使いこなせず光ってる 切れ味を売る包丁へ油断する 掌に載せた豆腐包丁怖がらぬ 刺身が旨い包丁が切れている すんなりと忘れる事のむずかしさ 大役をすんなり受けて後悔し すんなりと割れる気のない柘榴の

実

すみこ

多賀子 煩悩児

良

鯛の目が光り包丁うろたえる うぶみ川柳会

上曲

宣子報

痛恨の一言親友を失わす 入道雲ぐらり我を見失う 飽食の風へ失せゆく礼智信

和歌子

ピンクから始まる赤い修羅がある 年上の妻はピンクで若返る 返事くるようにピンクの切手貼る ピンク少し差して華やぐ母卒寿 百歳になるとピンクを誂える ピンクのパジャマ僕はその気になれません 先週も今週も深いスランプ 失った池が大きくなってきた ひまわりの返事が高い位置にある 先ざきが読めたらいいな僕の夢 先ず髭を落として苦境の城に居る どうしても先入観が邪魔をする 指先の一本池を深くする 蓮池の恋なり溺れまいとする 池の鯉 恋などとてもかたれない どこまでがとてもとてもか解らない わたしにはとても出来ない綱渡り とても暑い小さな蟻に負けました 病院でとても沢山みたコント 蝸牛とても僕にはできぬ行 良い返事ポストも赤く音も良い 猫抱いて何も失うものもなし 女ですピンクと縁の切れぬまま 背伸びした指の先から雨になる ホッチキス丸秘をとてもよく守る セールスに冷たい返事ドアチェーン 人暮らし影が返事をしてくれる 高田美代子報 婦美枝 栄 登美枝 あづま ひろこ くにお 美ッチ 葉士人 健 ユリ子 宣 高金利リスク隠して誘いかけ 冴えわたる月だしにして回り道 バス一便逃しうれしい顔に会う さよならをするたび女磨かれる 落ち込んだ人を励ますピンク色 横浜あおば川柳会

幸せな一日だった仕舞風呂 燃えつきて第二の希望探してる 何もかも忘れた人と終い風呂 男のような気質を父におしまれる 打ち明けてさっぱり碧い秋の空 子育てをさっぱり知らぬ親がいる お隣が釣れだしてからさっぱりや 行けどゆけど行けど蜃気楼の町 城下町 屋根の歴史が重すぎる この町に来てからわたし花粉症 町角で捨てた女と擦れ違 病窓の鳩につれない町あかり コスモスにトンボピンクの物思 三りんぼうの町で三人ほど転ぶ 静かに暮らすそれだけで贅沢な町 新しい町では捨てる夜叉の面 下町の暮しが見栄を外させる 大声で泣ける私の町がある 夜の町はぐれた人が身を寄せる 町の子が今日はお客で村祭り 浪速から明治の町がまた消える 若者の町で奇妙なパラパラパ

マサ子

和鐘昌

詩ごころ誘われて行く秋の旅

偶然が重なり神がこわくなる

道

純

街政

良

敦子 喜代子 よしえ

呆け防止予定で埋まるカレンダー さよならを言わずに両手握りしめ 本日限りちょっとのぞいてみようかな 素朴さが買う気を誘う朝の市 また来ての余韻ひきずる終電車 こころざし男に耐えるときがある 還暦は第二楽章アンダンテ

句多留

あかり

蘭

偶然を装って待つ街の角 誘ったら条件つきで孫がくる 毀れてもあしたに希望つないでる 出稼ぎの父の帰りを待つ暦 もらうものもらえば帰る仕度する 偶然に逢って名前の出ぬ二人 ええじゃないか悪魔がわたし唆す 道のりを想えば言えぬさようなら 現地発ニュースが誘う紅葉狩

雅

枝 知

丰

かつみ 美代子

葉

筒

さよならの前にお礼を言っておく 行く末にこころを鬼にする絆 縁談に祖母が持ち出す伊勢暦 さり気なく誘いをかけるイヤリング 生き甲斐で暦満杯家事放 定年が暦に曜日きいている 肩書きを外し心の友となる

為佐子

峰

JII 柳 会

待望の雨も自然の怖さ連 待望の農家の嫁は異国人

サト子

鈴

美

П

平

n

十田洞庵報 あらた 子

八重子

絹

敏

かづ子 亜希子

待望の雨につややか秋なすび 鏡の前笑顔作って出る舞台 待望の金マラソンの影になり 評判のドラマも涙飽きてくる 午前様妻の笑顔にあとずさる 鏡拭き笑顔を作り艶めいて 難関も笑顔美人で切り抜ける 待望がいつか野望になっていた

> 和 令 ユミ子

待望のまなざし受けて泣く赤子 待望の減量したがしわが増え 忍耐のリハビリ励む退院日 待望の平和な女だが何と変

> よし子 みやこ

新築へ待望の家やっと出来 待望のメダルにほほずりヤワラちゃん 待望の外灯ついた田圃道 待望の男児に熱い家族の目

信昌悦

٤

米田 幸子報 待望のスター一座が島に来る 終章の絆を妻と太く縒る 思い切りおしゃれ六十路の同窓会

庵

内緒事持てばハートがうずきだす ながながと続いたドラマ幕下りる ながながと論せば孫はうわの空 火遊びで火傷を負った二人連れ 尾ひれつけ内緒話がよく泳ぐ ながながと無心電話も効もなし ポンと膝叩いて急場抜ける知恵 しろう 重佳晴 順 忠 Ш 女

ながながと下手な説教馬耳東風

急ピッチ一升瓶を空にする 銀行員の内緒話が面白い ながながと迷惑かけたさようなら ながながの胸中思う病んだ母 談合の内緒話に羽が生え 内緒はできぬ即効薬のまむし酒 ながながの読経に立たぬ膝 八つき目に入り内緒はもつ利かぬ 火加減を知らぬ女が焦げつかす ながながと賞味期限のない夫婦 火あそびは七十までと決めている 水平線につづくわたしのメモ 火の祭り無病息災護摩をたく

急がせたわりにゆっくり食う客だ 急いでる時に限って長でんわ 内緒だと言うのにしじみ舌をだす おんぼろの傘でながなが待ちぼうけ 8円切手を貼って大至急 待つ時は長く感じる救急車

みつ子

内緒にも疲れ我が家は硝子張り 火も水もくぐった妻の糞度胸 千手観音 千の急ぎへ余裕もつ

柳塔みちのく 小寺 花峯報

再会を夢みたはずの無人駅 義理欠けば冷たい風が吹き抜ける 大バーゲン狙う売り場へ真っしぐら 義理果すまでは足など向けられぬ 義理堅い男が夜逃げの支度する ヒサ子 妙 きよし 子

闘病記どのページにも母がいる

プニング願い九回裏に立つ

同居にも慣れて笑いの朝が来る ビリッコの子でもわが家の宝です ハプニング求めて秋の旅に出る ハプニング待つ野次馬に僕もいる 和かつみ 和歌子 信け代 龍芳博玲一 螢 光丈子夫 買 枝 曼珠沙華遊女の墓の無口なり 父の樹にもう帰らない青りんご 狙われているとは知らぬ籠の鳥 捨て切れぬ義理が柳に揺れている 狙われているので黒を白という 美しく咲いて鋏に狙われる ライバルの隙間に入るサインペン 宿敵を狙い打ちして紫煙の輪 狙われた獲物が死んだ振りしてる 直球を狙いカーブにしてやられ ライバルがだあれも居なくなって冬

花黙井

" 花

人蛙永匠

い撃ち外れて襲う無力感

ふ銀 慕順 えた 波情風

玲 玲 石花菜 見 節雄 見坊泉 子子々

> 柳ふうもん吟社 杉本 孝男報

五楽庵

花

よしえ

休戦ライン花火が舞っている平和 精一杯残り火煽り二度の職 筆頭者です粗大ゴミまだ生きる 埋もれ木となって秀才朽ち果てた 残り火も人も愛さずにはおれぬ さすらった旅の終りにきみと逢 ビリッコに馴れて走るが恥ずかし ハプニングではない汗の結果です つ隠す標準語が狂う 節

子

桜 郎

41 のり代 金 美恵子 良

日の出 志げ緒

残り火はまだ消さないと薄化粧 残り火は私の為に使い切る もうすぐ五年ガンの再発クリアでき もうすぐの言葉の裏にある不安 嫁に来い熊が出るからよう行かん マグマが怒るとハプニングで済まめ 水たまり澄んできたから踊ろうか 目には目を隣のバラの棘を抜く 残り火にありがとうだけ埋めておく ビリッコも入閣嬉し記事となる ビリッコになって戦死をまぬがれた ハプニング神のお遊びかも知れぬ はつ江館 三津子 行 喬 由健 茂登子 敦 美子 男

俗行事などを題材とする川柳(未発表作

▼お願い 各地柳壇の原稿は、 所定の 残り火がぽっくり寺で燃え上がる

ハプニング続き家計簿あわて出す

もつすぐの人生今日も善を積む

原稿用紙、 所定の様式でご提出下さい。

いただきます

年賀のご挨拶を欠礼させて

実兄の死去により

岳 人

F 柳 集

住・信仰・年中行事等に関する習慣・民 文学ルート(5市)周辺の自然や衣食 文学ルート(松江市・尾道市・今治市・松山市・高知市) 賞―大賞1点・奨励賞5点・佳作賞若干

第二次選者 宿題 (各題2句以内 高知市「龍馬」「よれこい」 今治市「椀」 松江市「茶」「堀川」 松山市「温泉」「椿 尾道市「渡船」「桜」 岡村 月原 橋田呂久朗選 定本 嵐舟選 宵明選 広文選 叮紅選

社全日本川柳協会会長 IJ 理事長 常務理事 橘高 吉岡 仲川 ハたけし 薫風

応募方法 号の場合は本名も書き添える。 郵便番号・電話番号など明記のこと。雅 応募可)。応募作品には「宿題」及び氏名 き、封書に書かれた作品((FAXによる ふりがな)・住所・年齢・性別・職業・ 専用の応募用紙または官製はが

出品料一無料 発表—平成13年8月、 応募締切―平成13年3月31日出(当日消印有効 入賞者に通知

応募資格—年齢・職業・性別・国籍は不問

応募先・お問い合わせ 「茶·堀川」松江市経済部観光文化課 「椀·船」今治市教育委員会文化振興課 48)25-7367 FAX(0848)25-7293 722-8501尾道市久保1·15·1 LL(0 渡船・桜」尾道市教育委員会文化振興課 690-8540松江市末次町86 52)55-5293**FA**(0852)55 -555 53 TEL 08

温泉・椿」 88)22-6394 FAX(0888)23-9361 780-8571高知市本町5.6.13 11(08 龍馬・よさこい」 高知市教育委員会社会教育課 89)948-6634 (089)943-900 790-8571松山市 898)36-1608FAX(0898)25-1700 794-8511今治市別宮町1·4·1H 松山市企画財務部国際文化振興課 一番町四·7·2 IL

◎一人でも多くの応募をお待ちします。 ど、どの「宿題」を選ばれても構いません。 文学ルート形成推進協議会

TEL0848-25-7367

◎「宿題」によって応募先が異なりますので

要注意。

松江市民の方の高知市への応募な

-124 -

エッセー 鶴 田 眼 遠 野

その返事と同時に隣の席に座っておられたダ を借りるまでも無く、即答したのであった。 た。私を川柳塔に紹介して頂き、ゴッドファ ちり送る事を忘れなかった。 さんをお訪ねして以来、御無沙汰の弘前であ 昨年の川柳塔まつりが済み二次会の席だっ を川柳塔みちのくの方々に掛けて頂いたのは、 か。来年は句会もありますし…」と言うお声 ン吉さんにも行きましょうとの眼と声をきっ 「桜の頃いちど弘前へいらっしゃいません (名付け親)でもあり、 「はい行きます」との返事には、 師と仰ぐ五楽庵 酒の力

> は『川柳塔みちのく』の編集後記を読んだか らである」と熱弁をふるわれた。 全てに出掛ける事は出来ず、今回出席したの 者として出席されており、 私は記念句会等いろいろお声は掛かるけど その記念句会には森中惠美子さんが特別選 その時の話の中で

ように私の耳に入ったのである 摘に対してであると、少し声が大きくなった は『川柳塔みちのく』の編集後記Bさんの指 の事である。今回この記念句会に出席したの 集後記だけは眼を通すように心掛けていると くる多数の柳誌を全部は読めないが、 惠美子さんの話では、各柳社より送られて 必ず編

ると次のような内容である そのBさんが書かれた編集後記は、

要約す

意を表して本大会に出席したとの事であった。 堂と編集後記に載せた『みちのく』に対し敬 の批判が取り上げられており、その批判を堂 とは選者の眼を疑いたくなると、きつい内容 だ。ある句を例に出し、このような句を抜く かなければ川柳が判っていない、と思われる んじゃないかとの思いで選をされているよう がベテランや名の通った方の句となれば、抜 この件に対して第一人者の考えを聞きたい 少人数の句会等に於て、句風や字のくせ等 ある程度誰の句というのが判り、 その句

いい季節ですよの言葉通り、大阪よりは遅い

そしてお伺いした五月の弘前は、いちばん

日の東北川柳連盟青森県大会の事である。 温かいおもてなしの興奮も冷めないまま、 前夜祭のあとの夜桜見物、みちのくの方々の 春ではあるが満開の桜が私達を迎えてくれた。

37

惠美子さんは自分が選者をする際に心掛けて いる事として次のような事を話された。 のは私ひとりでは無いように思えた。続いて

度量を出句者から試されているのです」 やその文字の勢いで、作者の句に対する思い 入れを判断しています。 選者も選者としての 「私は句は勿論の事、句箋に書かれた文字

人に見せているようだった。 ふるわれ、一段と胸のバラが惠美子さんを美 しかし残念な事に、この日の記念句会はワ 堂々と選者としての心構えについて熱弁を

ープロで打たれた事前投句を、選者惠美子さ んに渡していたのである。

快いみちのくの旅情だけでもなかった。 柳を離れた素顔を拝見し、素直なお人柄と共 の御厚意で惠美子さんと同席させて頂き 句会後、五楽庵主幹はじめみちのくの方々 胸にバラは無くても美人に映ったのは、

第である。 に理解されず、 く句箋に走らせてますが、勢いだけでは選者 句会等での風当りはありませんかとお尋ねし た。さすが柳人、心が広いと感心した。 たところ、以前と変りませんよとの事であっ 私はみみずにも劣る沙蚕(ごかい)を勢い良 今回この事を書くのに当り、B氏にその後 没句を豊富にかかえている次

柳界展

開催された。当日の本社関 により春木市民センターで 会は10月21日 ★第50回岸和田市民川柳大 いる伽藍 枯れてゆく快楽と座して 上田 84名の参加

に秀句は次のとおり 当日の本社同人の受賞並び の参加により開催された。 席者145名、投句者79名 町「水明荘」で10月8日出 余震の続く中、 前々日の鳥取県西部地震の 東伯郡東郷

★第24回鳥取県川柳大会は

秀句(三才) 〈新日本新聞社賞〉 折鶴の首のあたりが固す 亜弥

好きな道 匹の蟻を人差し指で追 極めて国宝にな 河内 田中

折鶴の首のあたりが固す 纜は頑固で島を譲らない 田中 より開催された。本社同人 者を含む160名の参加に 22日、メイシアターで見学

★吹田市民川柳大会は10月

島の民

北村

して、石原靖巳氏が毎月執 号から西出楓楽さんと交替 地底の息吹今もうかがう

会長)

の選評を、

12年10月 川竹松風

次のとおり決定、本社同人 ★第5回・鶴彬川柳大賞が る意外

係者の秀句は次のとおり。

空港の善意外貨の残り銭 理なこと 僕よりも先に逝くなと無 母さんのふところにある 気配りは裏でしていた七 島崎富士子 中井アキ とおり。 ★第50回富田林市民文化祭

★第21回桜井市民川柳大会 10月22日桜井市まほろ 長谷川呂万 らぬ妻

本社関係受賞者次のとおり ば文化センターで開かれ、 〈文化協会長賞〉 灰汁抜いた男がもててい 渡辺 富子

年間の句報の中から の秀句は次のとおり。

秋の皿に娘の工夫盛って

日の本社同人の秀句は左の 参加により開催された。 林中央公民館で120名の 川柳大会は、 10月28日富田

主主義

輝

マ出

★第72回奈良県川柳大会は おかめだが医者も薬もい 逆風を奏でる真うしろの 藤村 森子 女女

同人の秀句は次のとおり。 加により開催された。本社 出席156名投句29名の参 10月29日奈良県新公会堂で を執筆。 黒川紫香相談役(尼崎市 『川柳高知』

毒針が一本盛ってある台

藤村 女女

両氏が入選した。 治佐ダン吉・出 借金はみんなに分ける民 ロセツ子

■春城年代句集『菜の花』 (A5判5ページ) がいく 版△

美氏第三句集『あし音』 書」第1号として発行。 しま川柳会の「いくしま叢 ■吹田川柳会会長、坂本晴 ンターで10月15日開催され

(序文に代えて)」 香氏(相談役・尼崎市)と 先般決定していた「第1回 奨励賞の北野哲夫氏(三田 が行われた。大賞の黒川紫 文学ルート川柳」の受賞式

風名誉主幹は二次選者とし 市)が表彰を受け、

恒松叮紅、 が応援にかけつけた。 板尾岳人理事長 藤井明朗両参与

新 同 人 紹

介

天笑・諷云児・靖巳推薦 村 五

月音

鳥取県川柳大会に出席のた め鳥取県東郷町行。 |薫風名誉主幹は10月8日

幹も同行。 祭」が、松江市総合文化セ 記念「へるん祭&市民文化 ■小泉八雲生誕150周年

西大寺会陽川柳大会 第50回

2 # 平成13年2月25日(日)投句締切11時30分 ころ 岡山県 西大寺ふれあいセンター(086-944-1800) 第1部 1月31日締切 各顯2句 (事前投句)

「パワー」 「送 る」

濱 野 奇 童 選 北 野 岸 柳 選

「梯 子

芙巳代 田 前

岡山市金岡東町3-4-16 山口流木宛 (086-948-3463)

各題2句 欠席投句拝辞 第2部

> Γ 平 Γ 隣 「いのち」 占

選 橘 高 風 中 惠美子 選 森 新 家 完 司 選 多 洋 子 選 本

「花 東 光 「咲 () 清 水 かおり 選 部 明 選 石 JII けんじ 選 西

今

前 原 滕 郎 選 会費 5000円

懇親宴 2月24日(土) 18時から

申込みは1月31日までに流木宛(TEL上記)

第1部投句のみ1000円 (発表誌呈)

20センチ×4センチの句箋に1句ずつ各題 2句、裏面に雅号、封筒に〒、住所、氏名 を明記

大会大賞

2部共参加者は2000円を当日徴収 第1部、

> 辛い点つけた生徒を忘れない よく笑う家族の小さい薬箱

ピーマンの中に作戦つめておく

西大寺川柳社 主 催

全日本川柳協会会長賞

八木

孝子

NHK賞 くすぐってみちゃだめですか仁王様 生活の垢 大衆の色となる

国立市長賞

国立市教育委員会賞 披露宴 未婚ばかりの席につき

上流へ向かう口笛ひびかせて

飛松 Щ 瀬 典男 33 桜井真紗子 ひろし

宇都

佐藤

いた。 近辺句会有志が懇話会を開 事前投句の選者として国立 菱田満秋会長 30日横浜あおば句会 並びに、 歳。 阪 が行われた。 市

柳大会へ薫風名誉主幹が 10月29日NHK学園全国

北

計

報

A

翌日生野南会館で葬儀 は11月3日死去。 勝美さん (同人・大 90

訂正とお詫び▲

この道のほか知らず」は本 人の申し出により削除 下段23行目「この道を来て 10月号—P35 (川柳塔

きららしきらり 郎賞得点表)下段5行目 呂志→比ろ志・下段13行目 揺→一瑶 水煙抄)上段1行目 P 92

憂もある→鬱もある (川柳塔) 上段15行目 P 67 比

42

え→みさ江 賞得点表) P

> 近 塔

中段22行目スミエ→スミュ ■11月号=P114下段26 P101(秀句鑑賞 下段12行目 93 柳

・20行目みさ 本間

行目

(御芳志御礼) 木間

第 14 П N H K 学 園

JII 柳大会受賞句

12年10月29日 NHK学園

(国立市

句会名	日 時 と 題	会場と投句先
川 柳 会	16日(土)午後1時から 必ず・三角・以外・雑詠	鳥取勤労者総合福祉センター 1 F 会議室 (鳥取駅南) 〒680-0044 鳥取市御弓町40-3 宮木方 坂田和歌子
岸和田川柳会	16日(土)午後1時半から 配る・欠点・こだわる・騒ぐ	市立福祉総合センター 2 F 南海線岸和田駅東歩 3 分 〒596-0827 岸和田市上松町610-85 芳地狸村
東大阪市川 柳同 好 会	16日(土)午後 6 時から 椅子・見る・走る・袋	東大阪市立社会教育センター 2 F 近鉄布施駅北長堂小学校隣 〒578-0925 東大阪市稲葉3-3-21 片岡湖風
岬川柳会	17日(日)午後 1 時半から 弱虫・ふらふら・たそがれ	岬町淡輪公民館 〒599-0301 大阪府泉南郡岬町淡輪3592 八十田洞庵
川 柳 ねやがわ	17日(日)午後 2 時から 警官・天才・ゴール・自由吟	寝屋川市立総合センター4F 京阪寝屋川市駅からバス総合センター前下車 〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉
もくせい 川 柳 会	18日(月)午後 1 時から 多い・ノート・解放・自由吟	豊中市立中央公民館 阪急曽根駅南東歩5分 〒561-0826 豊中市島江町1-3-5-801 田中正坊
川 柳 塔みぞくち	18日(月)午後 7 時半から 年末・今年の出来事・雑詠	溝口五区集会所 〒689-4201 鳥取県日野郡溝口町溝口757─3 小西雄々
南大阪川柳会	20日(水)午後 6 時から 輪切・一日・有頂天・遠来	玉造老人憩いの家 JR環状線玉造駅西徒歩3分 〒543-0012 大阪市天王寺区空堀町15-18 寺井東雲
高槻川柳 サークル 卯 の 花	21 日 (木) 正 午 か ら 涙・軋む・土壇場・いじめる 自由吟	高槻現代劇場306号室 阪急高槻駅徒歩7分 〒569-1142 高槻市宮田町3-8-8 川島諷云児
川柳クラブ わたの花	22日(金)午前10時から 夢・日記・迎える	八尾市生涯学習センター 〒581-0866 八尾市東山本新町9-3-16 吉村一風
はびきの 市 民 川 柳 会	24日(日)午後1時から 掴む・うっとり・資産・「アパート」	羽曳野市立陵南の森公民館 近鉄高鷲駅北東徒歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷲8-31-11 塩満 敏
京 都	25日(月)午後 1 時から 例・テーマ・魔法	ハートビア京都 地下鉄丸太町駅南改札⑤番出口すぐ 〒600-8428 京都市下京区弁財天町328 都倉求芽
城 北川柳会	12月に限り休会	

[★]日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所 (06-6629-6914) へご連絡ください。

		(所惟口州)
句会名	日時と題	会場と投句先
尼 崎 いくしま	1日(金)午後1時から みかん・私・雑詠(A·B)	サンシビック尼崎 3 F 阪神尼崎駅南西徒歩 5 分〒661-0035 尼崎市武庫之荘5-25-17 春城年代
富柳会	2日(土)午後1時から 咳・追い風・自由吟	富田林市立中央公民館 近鉄富田林駅南出口徒歩3分 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 池 森子
川 柳 塔 みちのく	2 日(土)午後 4 時から 泣く・ハガキ・矛盾	弘前市桶屋町4-7 居酒屋とんぼ2階「川柳道場」 〒036-8002 弘前市元大工町50-5 波多野五楽庵
川 柳 塔唐津支部	3日(日)午後1時半から 酌・語る・そろそろ	唐津市栄町公民館 〒847-0082 唐津市和多田天満町1-2-13 仁部四郎
川柳塔なら	7日(木)午後1時から 宣伝・暮れ・踊る	船橋フロムワン(船橋商店街内) 近鉄奈良駅西へ 7 分・JR奈良駅北歩 5 分 〒636-0144 奈良県生駒郡既鳩町稲業西2-4-23 中原比呂志
川柳塔打 吹	9日(土)午後1時から まじまじ・面影・岸	倉吉市上灘町上灘公民館 〒682-0805 倉吉市南昭和町21 野口節子
川 柳 塔 ま つ え	9日(土)午後1時半から 酒・ドラマ・再び	松江市雑賀町 雑賀公民館 〒690-0859 松江市国屋町381 竹内すみこ
川があるもん吟社	10日(日)午前 9 時から 第19回鳥取県投句川柳供養大会	鳥取共済 5 階ホール(11月号P.51参照) 〒680-0033 鳥取市二階町3-102-2 植田一京
川 柳 塔わかやま	10日(日)午後1時から 完(字結び可)・ぎりぎり・モザイク (21世紀に期待する自由吟)	近鉄カルチャーセンター2F JR和歌山駅前 〒641-0012 和歌山市紀三井寺111―2 牛尾緑良
八尾市民 川 柳 会	10日(日)午後6時から やけくそ・越える・眼・正当	八尾市文化会館4F 近鉄八尾駅東へすぐ 〒581-0845 八尾市上之島町北1-15 宮崎シマ子
西宮北口川 柳 会	11日(月)午後 1 時から 頭・引く・近い・自由吟	西宮市立中央公民館 阪急西宮北口駅南出口徒歩3分 ブレラにしのみや 〒662-0841 西宮市両度町2-19-515 山本義子
ほたる 川 柳 同 好 会	12日(火)午後 1 時から 世紀・走る・遠い	豊中市立螢池公民館 阪急・モノレール螢池駅西へ150米 〒561-0864 豊中市夕日丘1-7-5 田辺正三郎
尼 順 浜 川 柳 会	12日(火)午後 1 時半から 風邪・カレンダー・自由吟	尼崎市立立花公民館 尾浜分館 阪急武庫之荘北口から市バス優番尾浜2丁目下車 〒661-0976 尼崎市潮江5-2-47 田辺鹿太
堺川柳会	14日(木)午後 1 時から 打算・出る・そして	堺市総合福祉会館 5 F 南海高野線堺東駅市役所西入る 〒593-8305 堺市堀上緑町 2 ―16―3 河内天笑

編 後

O鳥取県西部地震に遭われ の紹介者は亡き小出智子さ っても過言ではない。彼女 もらっている。彼女抜きで 勤続7年近くになり、事 の働き振りである。もう は川柳塔は機能しないと言 務全般にわたって熟知して

順調に回りはじめた。 役割分担も決まり、歯車が お祈りします。 しい年を迎えられますよう 平常の暮しを取戻され、 運営機関である常任理事の た通り、社務全般の企画 011月号51頁でお知らせし た同人、誌友の方々には、 新 次第である か、との意見をいただいた。 親しみが持てるのではない 記)の筆者を明記した方が Oある方から当欄 ん。改めてその思を感じる

(編集後

ろう。ただし、様々の事情 があって実働は目下3人な うまく軌道に乗せられるだ れなかった。 しあり、姓・名共のは見ら 容は5人になった。これで

が多く、頭文字だけのも少 てみると、名のみという本

が加わったことにより、陣 ○わが編集部は新しく2人

あらためて他柳誌を調べ

たいのは、事務所を守って にバックアップして下さっ Oここで声を大にして言い 編集要員を、引続き全面的 ので、正坊さんが慣れない ので、ご面倒ながらちょっ 以降ずっとこの形になって う考えからか、字数制限の ら目次下に名を記している せいか、当欄では8年11月 〇編集はあくまで裏方とい . る。ただし、99年1月か

下さっている鍛原千里さん

とご覧下さい。

<u>ن</u>

同の心

無関心、

自分に関係が無い限

り周

近頃思う事は、

えてしまったのではないかと思う。 低下していく頭脳や体力に、おそ 電波の世界がすっかり世の中を変 いる事だ。我々の意識の外だった 若者の世代が歴然と変わって来て どんどん進む機械文明と相反し 私たちの世代と りに全く興味なし。 ばならぬと教えられた事である。 てた事。その上、社会を見据え、 ったと思う事は、多くの仲間を持 していない。私が川柳をしてよか て大衆を見ず、自分の立場を意識 **八間を掘り下げ、自己を見つめね** ロボット化して行く人々にどう 大衆の中にい

ろしい気もする。優先座席に堂々 若い女性、悪気はないが要するに と腰掛ける若者、悠然と化粧する

吉田あずき

か人間の心を失わぬ様祈りたい。

ごった煮が、テレビに乗っ に加えて一儲かりまっか」の ように思う。河内弁その他 に変な、あえて言うならへ が、関西漫才ブームの時代 西弁についてのことである を惜しまぬ一人である。 亡くなられた。浪速を代表 て全国に広がった感がある。 ンテコな大阪弁が蔓延した ☆さて、大阪弁もしくは関 する芸人であったとの賛辞 ☆過日、ミヤコ蝶々さんが、 って自称大阪弁で通すこと からの漫才ブームに乗っか そこで、雑種弁の私は、折 け答えも全国区であった。 社内の喋り言葉、電話の受 めていた時のことである。 店、出張所をもつ会社に勤 と言うのは、永年全国に支 大阪弁で大いに得をした。 教えいただければと思う。 と言うのか知らないが、 ☆何をもって正しい大阪弁 ☆しかし、このヘンテコな い申し上げます」。 会でお目にかかれます節、 話を差し上げました節、 にならぬよう勉強中。 名を汚さぬよう、足手纒い の昨今であるが、先輩のお ただくことになり、戸惑い 集部のお手伝いをさせてい 定年後も定着してしまった。 とした。これが十分通用し、 ☆さて、これからのちお電 ☆このたび、はからずも編 「なにとぞ、よろしうお願 3

) 1119F	路・水煙抄投句) /TJ /NJ	種 目 「
			」 発表(2月号) 地名
			地名
			姓・雅号

同人・ 誌友 マルで囲んでください。



作 品募集

愛 JII 茴 水 課題吟 香の 染 煙 柳 (3句) 花 帖 抄 塔 そろそろ (8句

(8句

尾

波多 板

庵

(3句 3句 酌 3

梅

宣

嶋

ま

3

選 選 選 選 選

吐 地 H 公 政 担当 選

3月号

振替 〇〇九八〇-五-三三三六八番

電話(0分交元—六九

初步教室

見

る」(3句)

月号発表

(12月15日締 711 内 切 天

笑

「早 い」「安 い」 課題吟

楓 Ti. 岳

夜市川柳募集

初歩教室 「壁

津田 第7回「脱 < 湿透 ハガキに3句 12月末締切 投句先 〒593-8305 堺市堀上緑町2-16-3 河内天笑方 堺 川 柳

> ₹545 0005

1000年(平成十二 年 年 分 発行人兼 人阪市阿倍野区三明町 ウエムラ第2ビル202号室| 七千 701 JII 年)十 九百円 Ŧ 円 月 (送料共) 塔 Н

治

本社12月句会

슾

題

費 題

0

0

0円

投句料

500日

平日の10時から16時までにお願いいたします。川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝

祝日を除く

定

六

百

円

送

84

地下鉄谷町9丁 題

E

吉

月7

B

午後5

時

涙

天王寺区石ヶ辻町19

電06.6772.1

徒歩8 12

分

近

鉄上

本

HI

步

3

野

あ のやめ 徒 アウィー 12

・ナ大阪 **未**

4

豆 越 え 3 腐

極 步 <

> 高 藤 Ш

85 当日発表 3

河 内

(各題2句以 内 天

本 美代子 īF. 笑 雄

選 選 選

本社 1月句会 6日(土)予定

とてください。

ただし茴香の花欄は女性だけ。

用教

兼題 「テーマ」「開 「ほめる」「続 < 1

(3)各欄への投句は、

必ず氏名と住所

(県・市名)

をリ

明

(4)

各欄への投句数および投句

締切期日の厳守をお願

11

ます。

く」「仲 間

> (2)愛染帖・茴香の花欄・一 欄 の投句は [1]

投句用紙を使用してください。 分以上前納の定期購読者)に限り、 の投句につい 路集(課題吟) 7 川柳塔柳箋を使用り、および初歩数 本誌最終ページ



【イメージ・キーワード】 "Value for Human"

バリュー・フォー・ヒューマン

ミッシェル・アルクール



オーエスケーの 紳士服

株式会社大二工スケー

〒540-0024 大阪市中央区南新町 1 - 4 - 7 (06) 6 9 4 1 - 9 6 3 1

川柳・俳句・エッセイ・小説



新聞・チラシ・ポスター・伝票等

あらゆる印刷物の事なら、まずお電話を……。 あなたの思いをかたちにします

美研アート

〒530-0022 大阪市北区浪花町 9番 4号 TEL (06) 6372-1178